中等新國文法要解　全

特259
275

始

特259
275

東京高等師範學校講師 日下部重太郎編

中等新國文法要解

株式會社 東京開成館藏版

中等新國文法要解

目次

緒言……一
上篇 序說……七
第一章 文の成立……七
第一節 文……七
第二節 主語と述語……八
第三節 客語……八
第四節 修飾語……九
第五節 總括……一〇
第二章 品詞……一〇
第一節 主語または客語となる詞……一〇
第二節 述語となる詞……一一
第三節 その他の詞……一二
第四節 總括……一三
中篇 品詞の解說……一三
第一章 名詞……一三
第一節 名詞の種類……一三
第二節 名詞の複數……一四
第二章 數詞……一四
第三章 代名詞……一五
第一節 代名詞の種類……一五
第二節 人代名詞……一六
第三節 指示代名詞……一六

第四章　動詞……一七
第一節　四段活用……一九
第二節　上一段活用……二三
第三節　下一段活用……二三
第四節　上二段活用……二三
第五節　下二段活用……二四
第六節　正格活用の總括……二五
第七節　カ行變格活用……二五
第八節　サ行變格活用……二五
第九節　ナ行變格活用……二六
第十節　ラ行變格活用……二六
第十一節　變格活用の總括……二七
第十二節　動詞の活用の識別……二七
第十三節　自動詞と他動詞……二七
第十四節　動詞の音便……三〇
第五章　形容詞附形容動詞……三一
第一節　形容詞の活用……三一
第二節　形容動詞の活用……三三
第三節　形容詞の音便……三四
第六章　助動詞……三五
第一節　助動詞の種類……三五
第二節　使役の助動詞……三七
第三節　受身の助動詞……三八
第四節　可能の助動詞……三九
第五節　敬語の助動詞……四〇
第六節　時の助動詞（過去）……四一
第七節　時の助動詞（未來）……四二
第八節　希望の助動詞……四三
第九節　打消の助動詞……四四
第十節　指定の助動詞……四四

第十一節　推量の助動詞……四六
第十二節　比喩の助動詞……四七
第十三節　動詞と助動詞との連續の總括……四八
第十四節　助動詞と助動詞との連續（一）……四八
第十五節　助動詞と助動詞との連續（二）……四九
第七章　助詞……五一
第一節　助詞の種類……五二
第二節　第一類の助詞……五五
第三節　第二類の助詞……五九
第四節　第三類の助詞……六三
第五節　第四類の助詞……七〇
第六節　用言と助詞との連續……七六
第八章　副詞……七七
第九章　接續詞……八〇
第十章　感動詞……八二
第十一章　品詞の轉用……八三
第十二章　語の構成……八五
第十三章　敬語……八八
下篇　文の解說……九二
第一章　文の成立……九四
第一節　語と連語と節と文……九四
第二節　連語の種類……九五
第三節　節の種類……九六
第四節　文の主部と述部と客部……九六
第二章　文の組立の種類……九七
第一節　單文……九七
第二節　複文……九八
第三節　重文……九八
第三章　文の常態と變態……九九
第一節　文の常態……一〇〇

第二節　文の變態……一〇一
第四章　文の敍述の種類……一〇三
附錄
表の注意……一〇五
係結法大要……一〇七
品詞分解の方法……一〇八
文の分解の方法……一〇九
文法上許容スベキ事項……一一一
練習問題解答……一一三
上篇の部……一一三
中篇の部……一一四
下篇の部……一二四

中等新國文法要解

緒言

一、我が國の學校教育に國文法の教授が始つてから既に半世紀を過ぎた。この間に諸先學の功勞によつて、國文法教授が段々と進歩發達して今日に至つたことは、深く感謝すべきである。さうしてその進歩發達は尙今後に多くを望まねばならぬことは無論である。わけて中等教育における國文法教授において多く改良の必要を感ずる。

二、さて、「文法」といふ語は、始はギリシア語のグランマ(Gramma)に起つて、ラテン語及び他の諸國語に傳はり、英語には Grammar と呼び、我が國では「文法」とも「文典」とも「語法」とも「語典」などとも呼ぶもので、書くことば又は話すことばを正しく用ひるための法則である。それで「文法」とは文語法並に口語法の兩方または一方を指して呼ぶ名稱である。さうして文法を取扱ふのに、(甲)言語の學として專ら理論的に取扱ふのと(乙)言語の術として重に實用的に取扱ふのとの二大別がある。卽ち(甲)は理論的文法であり(乙)は實用的文法である。實用的文法は實用に供する程度において自國語または他國語の文法を示し、理論にわたる事は必要ある場合にだけ之を說き加へるものである。中等教育における國文法の教授は當然(乙)に屬するものである。

三、「中等新國文法」(以下に本書といふ)は中學校及び師範學校の教授要目に準據し、實用を主として新に編纂した國文法の教科用書である。本書は上中下の三篇とし、まづ上篇においては、思想と文、文の成分と品詞との關係の大要を明かにして、文法學習の根本を堅め、次に中篇においては各品詞を解說し、特に用言の活用及び連續と助詞の用ひ方とを明確に學習し得るやうに努め、終に下篇においては、詳かに文の組織を解說し、かやうにして國文法を統合的に

學習し得ることを期した。

四、本書は理解と記憶とを容易にするために、多くは實例から歸納して簡潔に文法を說明し、また便宜によつては演繹の方法を以て之を說明し、且つ各所に表を用ひて文法が一目瞭然となるやうにした。さうして中等教育における國文法の學習は、文語と口語との文法を會得し之を應用することを必要とする。文語と口語とは用言と助詞とにおいて著しい異同があるから、本書はその異同を分明にするために詳かに文語と口語とを對照した。但し、文語も口語も共にその用言や助詞などの用ひ方を同じくする場合、卽ち文語と口語と共通のものがあることを注意すべきである。

五、國文法において學んだ文語及び口語の法則は、單に本書の練習問題だけに止まらず、講讀や作文や談話などにも之を適用して修練することを要する。本書の練習問題に對しては、この參考書に解答を例示してある。さうして讀本などに就いて練習するやう本書に要求してある場合にも、この參考書にその例題と例解とを示してある。

六、およそ文法は、言語の職能と意味と形式との三類を以て呼ぶものである。例へば「花咲く。」といふ文において、「花」を主語といひ、「咲く」を述語といふのは、その職能を以て呼ぶのである。また名稱の詞である「花」を名詞といひ、動作の詞である「咲く」を動詞といふのは、その意味を以て呼ぶのである。また「花」は語尾が活用しない詞であり、「咲く」は語尾が「咲か・咲き・咲く・咲け」と四段活用をする詞であるといふのは、その形式を以て呼ぶのである。かやうに三類の見樣があることを注意して國文法の學習を助けるのは、教授上の一便宜である。

七、現代の我が國語においては、文語法と口語法とが廣く行はれてゐる。その文語法とは、從來雅正な標準文語とされてきた中古の語法に基づき、しかも近古以後の語法の變遷の影響をうけて、中古の語法中の耳遠くなつたものを漸次淘汰し、且つ近古以後に新しく發達した語法の幾分かを加味して、いはゆる「普通文法」を成すに至つたものである。さうして口語法とは、明治維新以後の大御代の東京の語法に基づき、その標準語を整理するに當つて、關西の地方に行はれてゐる勢力ある語法の幾分かを加味して、いはゆる「口語文法」を成すに至つたものである。

さて現代において、口語法は我等の思想發表と文章讀解との兩方に用ひられ、文語法は主として文章讀解の方に用ひられてゐる。本書には文語法と口語法とを兩々解說してあるが、口語の方は既に小學校の時から習熟して居るから口語法は學び易いし、中等教育においては文語の學習に困難があるによつて、自然と文語法の方に比較的重きを置き、これに口語法を引合はせて說いてあるのである。文語と口語とは大概その語法の特徵によつて區別し得るけれども、また兩方の語法が共通である場合もあるのである。本書に揭げた例題も練習問題も、大概は文語を前にし口語を後にしてあるから、文語と口語との差別のあるもの及び文語と口語との共通のものを生徒自身に區別させるやうにし、またその區別の疑はしいものを問はせ、或は教師から問をかけるやうにされたい。

いはゆる「普通文法」の中の「文法上許容スベキ事項」は明治三十八年十二月二日の官報において文部大臣から告示されたのである。この許容文法は、現今の教科書を始めとして廣く普通文の中に用ひられてゐるものであるから、本書においてはそれ〴〵適當の箇所に載せて從來正則とされてゐる文法の事項と對照するやうにした。なほ此の參考書の末に右の許容文法の全文を揭載しておくから教授上の便覽とされたい。

八、文法は言語及び文章の習慣によつて成立つた法則であり論理法は思想構成の規範的法則であるから、文法と論理法とは必ずしも一致しない。しかし一致しない所があるとても、それを反論理的であるとは謂はれない。何となれば、文法の形式は論理法のと差異があつても、その意味は論理に反して居ない、また反してはならないのである。つまり文法は人文上の習慣によつて成つたものであるから、純粹に論理法そのものと同一ではないのである。それであるから、文法においては、或物事を言ひあらはすのに、例へば、

(イ) 去んぬる何月何日。
(イ) 昨日參上致し候ひき。
(イ) 水を飲みたい。

(ロ) 去る何月何日。
(ロ) 昨日參上致し候ふ(候)
(ロ) 水が飲みたい。

などといふ兩樣の形式が習慣上で成立てば、兩樣共に是認されねばならぬ。また同じ事を言ひあらはすのに、

(イ) 慨嘆するに堪へたり。
(ロ) 慨嘆に堪へざるなり。
(ハ) 豈慨嘆に堪へざらんや。(堪へざらんの反語)

といふ三種の形式が習慣上で成立てば、三樣共に是認されねばならぬ。しかし、「來る何月何日」と云つてゐるのは不合理であるから「來む何月何日」と改めねばならぬと理窟の上で云つて見たところで、それが習慣として成立たねば之を改めるわけには行かない。また理窟の上で、同じ事を言ひあらはすのに、

(イ) それは犬でない。

(ロ) それは犬であらぬ。

(ハ)　それは犬であらない。

といふ三樣の形式が作り得られても、我が日語の習慣上では(イ)だけが成立つて、(ロ)や(ハ)は成立つて居なければ、(イ)だけを是認するより外に致し方がないのである。さうして、また我が古代語では、

(イ)　せば（未然形）すれば（已然形）

の區別の習慣が成立つてゐるのに、後世ではその習慣が變つてきて、その區別がすたれたので、我が現代語では、

(ロ)　すれば（假定形であると共に已然の意味をも表はす場合がある）

といふ習慣が成立つてゐることを是認せねばならぬのである。また代名詞の

(イ)　貴殿。　(ロ)　貴公。　(ハ)　貴樣。

の如き元同樣の價値で用ひられたものが、(ロ)や(ハ)の方は習慣上段々價値が落されて來たので、今更「貴い公」だの「貴い樣」だのと文字の理窟を並べて見たとて誰もこれを承知しないだらう。實に「習慣は言語の立法者である」からである。

九、すべて古今世界の諸言語は習慣の上に成立つたものである。我等日本人は中等教育において三種の言語形態に接するのである。卽ち

(一)　添着語（または「膠着語」などと譯する agglutinating language）

(二)　孤立語（または「單意語」などと譯する isolating language）

(三)　屈曲語（または「曲尾語」などと譯する inflectional language）

の三種で、我が日本語や琉球語や朝鮮語の如きは(一)に屬し漢文を產した支那語の如きは(二)に屬し、英語やドイツ語やフランス語の如きは(三)に屬するものである。例へば、漢文の「如是我聞」を我が國語では「是の如く我は聞く」と譯讀する。また我が國語では「我は、我の、我に、我を」といふのを英語では "I, my, me, me" といふ。かやうにそれぞれの國語にはそれ〴〵の特質をもつてゐるから、甲の國語は乙丙その他の國語と相互に異同がある。さうして「自國語だけを知る者は眞に自國語を知る者ではない」とさへ云はれてゐる。そこで國文法の研究において他國語の文法を參考することは宜しいが、それは我が國文法との異同を明かにするためでなくてはならぬ。

こゝに一言附け加へたい事がある。西紀一八四八年にドイツのシライヘル氏（A. Schleicher）は比較言語學史の研究において、孤立語を劣等とし、屈曲語を優等と論斷したので、その後この優劣說が學者間にも墨守されてゐたのである。が、近來は漸く斯樣な優劣說の非が悟られるやうになり、英語の如きは本來屈曲語に屬するとはいへ、段々と孤立語的もしくは添着語的の形態を加味して變遷してきたのは、決して英語の墮落衰頹ではなくて、却つて進步發達であることを、イギリスのスウィート氏（H. Sweet）等によつて認められるに至つた。西紀一八八七年にポーランドのザメンホフ氏（L. Zamenhof）がヨーロッパの諸大國語を基礎として人工的考案を立てた一種の世界語であるエスペラント（Esperanto）の組織法が、いかに日本語の組織法に近似した所があるかを觀ても、我等は我が國文法の優れてゐる一證明を得たことを喜ばねばならぬ。エスペラントは國際語として漸次勢力を增しつゝあるけれども、我等は國民の生活において、神代このかたの祖先の精神的財產である國語を尊重し、その國文法を愛護し發達させることを努めるべきである。

一〇、そも〳〵その國民がその國文法に對して特に自覺を起すのは、(一)その國語の內で新舊時代的の差異または遠近地方的の差異を著しく認めた場合か、(二)その國語と外國語との接觸によつて彼我比較的の差異を甚だしく認めた場合である。例へば我が國民が漢文に接觸して「乎己止點」をつけて之を譯讀したことは謂はゆる我が國語の大特質である「弖爾乎波」（助詞と助動詞）を自覺させ、また漢文の反讀は彼我の語序（word-order）の異同あることを自覺させたのである。近世における西洋諸國語との接觸においては、更に深い自覺を國文法の上に起させたのである。平安朝の隆盛時代の口語から發達した優雅な中古文法は後世までの文語の準據となつたけれども、變遷した後世の口語との差異のために、歌人や俳人や國學者等が「弖爾乎波」のみならず廣く國文法上の研究を必要として進步させたのである。また明治維新後の大日本帝國の國民は國內各地の諸方言の割據を不利不便とし、これを統一するのに現代の標準語を以てすることを必要として遂に現今の口語法を建設するに至つたのである。

現代の中等教育では、國語においては口語法と共に文語法を教へなければならないし、それに漢文の和讀法を必要とし、英語においては英文法を授けなければならない。實に面倒な事である。しかし之を教授する以上は、たゞ面倒な事を利用して、層一層、文法上の趣味と實益とを增進するやうにしたいと思ふ。漢文には漢文の特質があり、英文には英文の特質があるから、悉くは國文法に合はせて譯讀し難いにもせよ、成るたけ正しく和讀すべきである。また我が國語の古文と今文とにおいても、それ〴〵異同があるけれども、精々正しく對照するやうにすべきである。

一一、文法教授は習慣法の上から語意を説明して了解させるのであるけれども、それと共にその習慣法を讀誦させて正しい語感を養ふことを努めねばならぬ。例へば、

ほとゝぎす〳〵とて明けにけり（千代）

西瓜太郎踊り出でよと割つてけり（瓊音）

の二句を比較して見るに、「にけり」の「に」は「ぬ」の連用形で「てけり」の「て」は「つ」の連用形である。これまで幾多の學者が「ぬ」と「つ」との差別を論難してゐるむづかしい理窟はあるが、實際上この場合、前者は「ほとゝぎすほとゝぎすと吟じなやんで居る間に何時しか夜が明けてしまひました」といふ當夜の狀態を叙述した句であり、後者は「桃太郎よりも大きくて眞赤な水瓜太郎がとんで出でよとばかり眞二つに大西瓜を割つたわい」といふ豪氣な動作を描寫した句であると說明すれば宜しい。さうして二句を對照讀誦させて、さて「にけり」と「てけり」を取違へて讀めば二句共に妙味を失つて、語意も語感も承知されなくなることを認めさせるのが有効である。

目には青葉山ほとゝぎす初がつを（素堂）

上の六文字の「は」は「青葉」の「あ」が母音であるから字餘りでも可いといふ位のお安い說明では、素堂が何と云ふだらう。字餘りでも可い位どころでない、實に「目には青葉」と吟じて差別の助詞「は」を用ひたのが此の句の生命で、その下に省略法の修辭を施した「耳には山ほとゝぎす、口には初がつを」といふ江戸子の氣に入る初夏の好季節が感ぜられるのである。論より證據、幾度かこの句を吟誦して見るがよい。かの江戸末期の惡和讀である「改點」の如きものでは、あたら論語も唐人の寢言のやうにしか聞えない。漢文にしろ英語などにしろ、惡和譯のぬえ讀みは戒めなければならぬ。國語と漢文と英語との教授が互に相助けて進むやうにありたい。さうして我等同胞は國文法を以て國語の憲法とする自信を徹底すべきである。

一二、文法書の組織は元は雜駁であつて、正字法（orthography）卽ち文字篇や、正音法（orthoepy）卽ち音聲篇や、韻律法（prosody）卽ち詩形篇の如きものまでも說かれたのであるが、かやうな事柄は綴字法や發音法や作詩法の任務に屬することで文法の本領とする所でない。文法の本領とする所は、實に單語分類論（etymology）卽ち品詞篇と文章構成論（syntax）卽ち文章篇とにあるのである。特に中等教育における實用文法としては品詞と文章とに就いて成るたけ平易明快に解說するを要する。

上篇　序說

第一章　文の成立

第一節　文

本文に「我等は言語または文字を以て思想をあらはす」といふのは、話すことば（spoken language）または書くことば（written language）を以て思想を發表することを意味する。

文法の術語として狹義に呼ぶ「文（ぶん）」は、英語に謂ばゆるセンテンス（sentence）に當るものを指していふ。この「文」を普通に廣義に呼ぶ「文」または「文章」の意味に解してはならない。文語」「文體」「文話」「雅文」「俗文」「日用文」「中古文」「現代文」「言文一致」「言文二途」などといふ場合の「文」は、普通に廣義に呼ぶ「文」または「文章」の意味である。例へば「言文」とは、廣く話すことばと書くことばとを意味するのである。

言文の源にさかのぼれば、音聲で言ひ表はすものが先であり、文字で書き表はすものは後である。卽ち文語は口語から發達したものであるから、口語が本で文語は末である。さうして口語の變遷は文語の變遷より著しいから、元は言文一致であつたものが、後には言文二途に分れてくる。我が國語で通例、口語並に文語といつてゐるのは、言文二途に分れた場合の言葉に文をさすのである。しかし口語といひ文語といふのは絕對的の名稱ではない。奈良朝や平安朝の言文一致の時代においては、後世で謂はゆる文語といふものも當時では口語であつたのである。言文二途は不便であるので、文語の本である口語い時代的標準を改める必要が起つた。今日の文語の文は主として平安朝時代の口語の標準に基づくものであり、口語の文は主として現代の帝都東京の口語に基づくものである。それで、言文二途の場合の文も、言文一致の場合の文も、どれも文字で書き表はすのは書くことばである。

さて口語の文と文語の文とは著しい文法上の特徵がある場合には、例へば「雪消ゆ。」と「雪が消える。」との如く明かに之を區別することが出來るけれども、文法上の特徵のない場合には、例へば「燕は遠く飛ぶ。」「彼は一を聞いて十を知る。」の如く兩者を區別することが出來ない。中等學校の生徒は既に小學校このかた口語の文に習熟してゐるから、口語の文に異なる特徵のある文語の文を辨別することが出來るし、又さうさせるやうに仕向ければならぬ。それで本書の引例には一々文語と口語との區別を附記しないのである。但し概して文語の引例を前にし口語の引例を後にしてある。

本文にいふ「思想」とは、通俗に言へばかんがへ（考へ）などといふもので、例へば

花咲く。月が輝く。雪は白い。

といふやうに物事を思考することである。これを文法から說くと、思想は第二節にいふ主語と述語とを含むのを通例とすることになる。

る。この節に說く單語や第二節に說く連語は、「思想」でなく「觀念」、通俗に言へば、おもひ（思ひ）などといふものであ

る。「思想」は英語のソート（thought）に當り、「觀念」は英語のアイデア（idea）に當る。

第二節　主語と述語

文には、思想の主體となる主語（subject）と、その主體について叙述する述語（predicate）とが必要である。述語をば叙述語とも說明語ともいふ人がある。

主語には「は」や「が」のやうな詞のつく場合と、つかない場合とがある。つく場合に「月が」「雪は」を併せて主語と見なす人がある。これは英語などの「格」（case）と我が國語の助詞添着の特質とを混同した見方であるから、かやうな場合に、「月」「雪」が主語で、「が」「は」は主語につく助詞と見るのが適當である。なほ第三節「客語」の條なも參考されよ。

文の成分が幾分か省かれる場合には、その省かれる成分は、他によつて誤なく了解されるものでなくてはならぬ。例へば「柳は緑、花は紅」「大變だ」の如き場合の「柳は緑（にして）、花は紅（なり）。」「（これは）大變だ。」の如きである。

第三節　客語

客語といふ名稱は、同名で呼ばれても用ひ方がちがひ、また別名でも呼ばれてゐるから先づその事から說かればならぬ。

大槻博士の廣日本文典には「鏡は壁に懸る」「狐は前へ向ふ。」の如き有對自動詞の標準「壁に」「前へ」や「蠶は絲を吐く。」「蜂は蜜を醸す。」の如き單對他動詞の目的「絲を」「蜜を」や「朱を藍に雜ふ。」「水を湯となす。」の如き複對他動詞の目的「朱を」「水を」やその標準「藍に」「湯と」の類を總べて「客語」と呼び、「水は流動物なり。」「鈴屋の翁は宣長なり。」「臣、臣たり。」の如き說明の名詞「流動物」「宣長」「臣」の類を、姑く「客語」とも見、或は「なり」「たり」と合はせて說明語とも見ると說いてある。

また英文法の「直接目的語（direct object）補足語（complement）」の名稱に倣つて、他動詞の目的となるものを「第一客語」と呼び、自動詞または他動詞の標準となるものを「第二客語」と呼び、說明の名詞となるものを「補足語」と呼ぶ說き方もある。また「直接目的語」を單に「目的語」と呼び、「間接目的語」と「補足語」とを併せて「補足語」と呼ぶ說き方もある。

（例）
（direct object）　I read a book.　余は本を讀む。
（indirect object）　He gave me a book.　彼は余に本をくれた。
（complement）　He is a farmer.　彼は農夫だ。

また吉岡郷甫氏の文語口語對照文法には、右の「第一客語」を「客語」と呼び、「第二客語」を「補語」と呼び、「補語」を職能の上から「だ」「なり」の如き用言に合はせて「述語」と見なしてある。

また三矢重松氏の高等日本文法には、叙述語に對する直接間接の目的語を總べて「客語」と呼び、福井久藏氏の新日本文典には、述語となる動詞や形容詞だけではその意味が明かでない場合に必要な語を「補語」とし、これには「を、に、へ、より、と」等の助詞が添ふといひ、山田孝雄氏の日本文法講義には、用言を運用する時にそれだけでは意義を十分にあらはし得ない場合にその補充として使用する語を「補語」といふとし、動詞の補語の中特に人又は生物と認められるものを「客語」といふことがあり、「客語」には「犬、人を吠ゆ。」「人、犬に吠えらる。」の如く助詞の「を」や「に」を伴ふものが多いとしてある。さうして「客語」の內容が他の文法書と稍趣を異にしてゐると說いてある。

本書に「客語」といふのは、述語となる動詞や形容詞、または指定の助動詞「なり」「たり」だけではその意味が明かでない場合にその補充として用ひる語を指して呼ぶので、通例、「を」「に」「へ」「より」「から」「まで」「と」「にて」又は「で」といふ助詞の添ふのである。その「客語」といふのは「主語」に對しての名稱である。

さて西洋の諸國語では、冠詞や名詞や代名詞の語尾が「格」によつて變化する特質があり、我が國語では、名詞や代名詞の語尾が「格」によつて變化することなく、その「格」は「格」なあらはす助詞「が」「の」「に」「を」等の添着によつて示すのを特質とする。例へば、

（ドイツ語）
父が　Der Vater
父の　Des Vaters
父に　Dem Vater
父を　Den Vater

（英語）
彼が　he
彼の　his
彼に　him
彼を　him

（ラテン語）
父が　Pater　（主格）
父の　Patris　（領格）
父に　Patri　（與格）
父を　Patrem　（對格）
父から　Patre　（奪格）

右の例のやうに西洋諸國語の名詞や代名詞には語尾變化があり、ドイツ語では四格、英語では三格、ラテン語では五格を形式上から必ず說かればならぬ。さうして英語では形式上、與格と對格（目的格）とが同一格であるが、意味の上から之を間接目的語（與格）と直接目的語（對格）とに區別してゐるのである。けれども我が國語には總べて名詞や代名詞に語尾の變化がなく、冠詞もなく、たゞ一定の助詞によつて「格」を示すのであるから、文の成立を說く場合には單に職能の上から「主語」に對して「客語」を說き、かの領格の助詞「の」の如きは助詞の條で「所有」等の觀念をあらはすことを說けば足るのである。

それでは何のために、「客語の中で、通例『を』のつく客語を目的語といひ、その他の客語を補足語といふことがある。」と附記したのであるか。これには二つの理由がある。一つには、客語をかやうに區別して說く文法もあることを知らせるため、今一つには、中篇第四章第十三節に說く「自動詞と他動詞」の豫備知識とするためである。何となれば、現今の國語辭典の動詞には「自動詞」または「他動詞」を區別してあるのが通例であり、その「他動詞」とは述語として目的語を要するものを指すのであるからである。なほ「客語」を「補語」または「補足語」と呼ぶ文法もある。

第四節　修飾語

以上に主語と述語と客語とを說いたから、これら文の三成分のそれ〴〵の意味を修飾する所の修飾語(m-diffem)をこの節に說く。これで文の四成分の大要が說かれる。修飾は限定とも云はれてゐる。從つて「修飾語」は「限定語」と呼ばれたこともある。

本節に例示した修飾語は(一)主語を修飾するものと(二)述語を修飾するものと(三)客語を修飾するものとあるが、なほ(四)修飾語を修飾するものもある。例へば「甚だ美しき花咲く。」「彼は頗るおもしろい文章を讀んでゐた。」の「甚だ」や「頗る」の如きである。しかし序說は複雜にわたることを避けて(四)の修飾語は下篇第一章第四節に之を說く。

第五節　總括

本節には、第一章の總括として文の四成分の順序と關係とを一目瞭然たるやうに圖示する。その圖を書き換へて見れば、次體左の如き順序となる。

(a)主語の修飾語、主語、(b)客語の修飾語、客語、(c)述語の修飾語、述語。

但し、右は文の常態の次體の順序を示したものであり、述語の修飾語(副詞)は時として(b)又は(a)の位地におかれることもある。また文の變態における四成分の順序は變動されてゐることがある。それらの複雜な事は下篇第三章の中に之を說く。

文を四成分に分けて見るのは、譬へば家を屋根や柱や土臺や造作などに分けて見るやうなものである。さてその家の各部を作る材料によつて、瓦や木や竹や石や土や金屬などに分けて見るのは、文法で云へば次の章に說く所の品詞卽ち詞の品わけである。

第二章　品詞

文の四成分と品詞との關係の次要をのみこませて文法學習の基をかためるため、第一章には文の四成分を說いて、第二章には品詞を說くのである。

第一節　主語または客語となる詞

主語または客語となる詞は、名詞と數詞と代名詞とである。次槻博士の廣日本文典には名詞の中に數詞をも代名詞をも兼攝させて總べて一品詞とし、數詞も代名詞も名詞の中の各一種としてある。また或文法家は、數詞を名詞の中に兼攝させてゐる。けれども多くの文法家は、これらを三品詞としてゐる。英文法などでは通例、名詞と代名詞とを二品詞とし、その特質によつて數詞を形容詞の中の一種としてゐるが、我が國語の數詞は名詞に近似した特質をもつてゐるから、名詞と數詞とを並べて二品詞とする。なほ中篇第二章の條に說く。

名詞と數詞と代名詞とを總稱して體言といふ。體言とは次節に說く用言に對する名稱である。體とは事物の本體をいひ、用とは事物の作用(はたらき)をいふ。「體用」といふ對語は宋の程頤の易傳の序に見えてゐる哲學的術語から出てゐる。なほ次節の中にこれを說く。

第二節　述語となる詞

述語となる詞は、動詞と形容詞と助動詞とである。(助動詞は、以前には助辭又は「てになをは」の中に入れて說いてゐたものであるが、特に一品詞として「助動詞」の名稱を與へたのは大槻博士の見識である。その後の文法家は概してこの見識に從つてゐる。)

動詞と形容詞と助動詞とを總稱して用言といふ。始め鈴木朖の言語四種論には「體の詞(名詞や代名詞をさす)、てにをは、形狀の詞(形容詞をさす)、作用の詞(動詞をさす)」の名目を立て、後に權田直助の語學自在等には「體言(名詞や代名詞をさす)、用言(動詞や形容詞をさす)、助辭(助動詞や助詞をさす)」の名目を立てた。その後は文法家によつて、或は助動詞を用言の中に入れる人もあり、或は助辭の中に入れる人もある。本書は、助動詞を用言の中に入れて說く方が學習に便宜であると認めて、さうしたのである。

助動詞の文語の「じ」の如き、口語の「う」「よう」「まい」の如き僅少の例を除いて、用言は語尾の變化する特質をもつてゐる。用言の語尾の變化することを活用といふ。本節に例示してある、

動詞「咲く」はカ行四段活用、
形容詞「清し」は第一種の活用(一名ク活用)、
助動詞「たり」は過去や完了を表はすものでラ行變格活用。

中篇に至つて活用形を說き名稱を授ける豫備として、本節に若干の活用形を示し且つ活用形に體言や用言や助詞を附記してある。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
咲く	か	き	く	く	け	け
清し	く	く	し	き	ければ	○
たり	ら	り	り	る	れ	○

本節においては副詞と接續詞と感動詞と助詞との四品詞を說く。その中で前の三品詞は用言や體言に副へて用ひられる類似の性質を持つてゐるから、「副言」と呼んでも宜しいのであるが、名稱が新しいのを恐れて差しひかへてあるから、その心持で敎へたいと思ふ。感さうして「花、水、時」は體言、「ず、む、ぬ、撥む、き」は用言、「ば、とも、ども」は助詞である。

なほ用言は述語となる職能の外に修飾語となる職能をも持つてゐる。これらの事を說いておけば、中篇に至つて品詞を詳說する場合に、用言の活用形の名稱、例へば「連用形」や「連體形」の意義が徹底し易いし、また形容詞が「遠く飛ぶ」の如く副詞に轉用される職能も十分了解し得るのである。

第三節　その他の詞

感動詞は「感歎詞」などとも呼ばれ、助詞は「關係詞」「後置詞」「てにをは」などとも呼ばれてゐるが、現今普通の名稱に從つて呼んでゐる。

第四節　總括

以上三節に說いた品詞(parts of speech)を總括して本書に十品詞の表を簡明に示してある。なほ左に參照として(甲)明治五年學制頒布の時の小學文法科の品詞名と(乙)英文法の品詞名と(丙)「馬氏文通」の漢文法の品詞名とを本書の品詞名に對照して見よう。(＊印はその國語に特質が有つて相合せぬ品詞)

(本書)

- 品詞
  - 名詞
  - 數詞
  - 代名詞
  - 動詞
  - 形容詞
  - 助動詞
  - 副詞
  - 接續詞
  - 感動詞
  - 助詞
- 單語
  - 體言(名詞、數詞、代名詞)
  - 用言(動詞、形容詞)
  - 副言(副詞、接續詞、助動詞)
  - 助辭(感動詞)
  - 名(な)
  - 裝(よそひ)
  - 挿頭(かざし)
  - 脚結(あゆひ)

(甲)

- 名詞(なことば)
- 代詞(かへことば)
- 働詞(はたらきことば)
- 樣詞(さまことば)
- 副詞(そへことば)
- 接詞(つなぎことば)
- 歎詞(なげきことば)
- 後詞(あとことば)

(乙)

- nouns (numerals)＊
- pronouns
- verbs
- adjectives
- (auxiliary verbs)＊
- adverbs
- conjunctions
- interjections
- prepositions＊

(丙)

- 名字 (靜字)＊
- 代字
- 動字
- 靜字
- (助字)＊
- 狀字
- 連字
- 歎字
- 介字、助字＊

本書は實用文法として便宜上から助動詞を動詞及び形容詞と同列にしたけれども、理論文法としては左の如く分類するのが適當であらう。

上の表の末段の名稱は、富士谷成章の用ひた名稱を適用したのである。同氏の引例を見ると、右の對照通りにならない所もあるが、斯樣に改めて見たいと思ふまでである。

なほ(甲)においては「數詞」を「かずことば」「動詞」を「わざことば」、「助動詞」を「すけわざことば」、「助詞」を「すけことば」と增訂して見るがよからう。

中篇　品詞の解說

品詞の解說は、各語詞の品種、語尾の變化の有無及び變化の形式と連續、品詞の轉用と構成、などを說くのが本旨とする。これを一言でいへば、各語詞の品類を詳說するもので、卽ち品詞篇であり、或は單語論とも呼ばれてゐる。

第一章　名詞

第一節　名詞の種類

英語その他の西洋諸國語において、名詞の種類を

固有名詞(proper noun)　ジョーン　ロンドン　大西洋　など

普通名詞(common noun)　人　首府　海洋　など

集合名詞(collective noun　家族　群集　國民　など

物質名詞(material noun)　鐵　水　雪　など

動詞名詞(verbal noun)　讀み　綴り　破れ　など

抽象名詞(abstract noun)　眞　善　美　など

等に分けるのは、大文字と小文字との使ひわけ、冠詞の用ひ方、數の單複の用ひ方、性の男女中の別、又は格の種類による語尾變化などを說かねばならぬ文法上の必要によるのである。我が國語の名詞においては、さう云ふ必要がないから、固有名詞と普通名詞との二種に分け、右の普通名詞以下すべてを普通名詞と總稱すれば足るのである。

我が國語においても固有名詞と普通名詞とを區別することは、種々の辭與を使用する上にも有益であり、概念を整理するにも有用である。

「梅」「菊」「虎」「熊」などの普通名詞を固有名詞として人名に用ひる場合に、人名と動植物の名とアクセントを異にすることを注意すべきである。若し同じアクセントを用ひるならば、その人は不快に思ふであらう。さうして東京語と京阪語との如くアクセントを異にするものがある場合には、動植物の名から採つた人名を呼ぶ時に、地方によつて變に感ぜられることがあるわけである。

漬物の「澤庵」(タクワンと發音)は、德川家光に召されて品川の東海寺の開山になつた澤庵和尙の創意によつて名を得たものだと云ふ。豆の「隱元」は、德川家綱の時明國から歸化して宇治の黃檗山萬福寺を開いた隱元禪師の持來つたので名を得たと云ふ。雞のシャモはシャム國から渡つたものであると云ふ。その他、石を割る大鐵槌の「玄翁」は、傳說の妖狐の化けた那須野が原の殺生石をうちくだいた玄翁和尙の名にもとづくと云ひ、瓜のカボチャ(たうなす)は、昔カンボヂアの國

から渡つたもので、鳥のカナリアは原產地が大西洋中のスペイン領カナリア諸島であるからだといふ。固有名詞が世界中から入り來つて國語の中に自由に使用されるのは無論であるが、しかし國語化した特別の事情がなければ、それは普通の國語辭典に登錄されるべきものでなく、固有名詞の辭典に收められるべきものである。

第二節　名詞の複數

我が國語の名詞では、多くは人や物事の單數と複數とを區別しないけれども、特に複數を示す場合には、

人々　國々　島々　村々　川々　橋々　處處々

などのやうに同じ名詞をかさねて疊語にすることがあり、又は

諸人　諸人　諸國　諸島　諸村　諸手　諸膝　諸役所

などのやうに「諸」「諸」といふ接頭語を添へていふことがあり、又は

議員がた　學生たち　子供ら　人夫ども
商人しゆう　若殿ばら

などのやうに「方」「達」「等」「共」「衆」「原」といふ接尾語を添へていふこともある。

右の方法によつて名詞の複數をあらはすのに、それ〴〵の習慣があつて、無暗と言ふことはならぬ。例へば「人々」「國々」などとは言はれるが、「鳥々」「郡々」などとは言はれないで、「諸鳥」「諸郡」などとは言はれる。また接尾語を添へる方法は、人に對する待遇をあらはし、且つ時代などによつて語感もちがふから、特に注意を要する。それで左に用例をあげておく。（線下には人外の物の例を記す。）

皇族がた、宮樣がた　大臣がた　御
婦人がた　皇神たち　女宮たち　君
だち　親たち　友だち　翁ら　臣ら
乙女ら　工夫ら　奴ら　男ども　女
ども　娘ども　親類ども　小僧ども
男ども　女ども　仲間どち　親類ど
うし　書生どうし　殿ばら　法師ば
ら　女ばら　奴ばら　大名しゆう
議員しゆう　檢那しゆ　女中しゆ

獸ら　鳥ら　物ども　事ども　馬ども　船ども　鼠どち　鳥どうし

右の中の「ら」はその人又はその物事の二つ以上をあらはすのにも、その外にあるものを併せて云ふのにも用ひる。前者を內等といひ後者を外等といふ。名詞の複數は內等であるべきである。

第二章　數詞

上古は和語で「十一」を「とをあまりひとつ」「三十五」を「みそぢあまりいつつ」といふやうに呼んだのであるが、漢語の數の呼び方を採用してから甚だ簡便となつた。さうしていふ接尾語を添へていふこともある。

品詞の中で、名詞には、最も容易に外來語を採用し得るものであるから、我が國語の普通名詞に外來語の採用されたものが甚だ多い。まづ西隣の支那語から古來採用したものが最も多く、古代印度の梵語や近世の西洋諸國語、その中にも英語やドイツ語やフランス語などから採用したものが頗る多い。それは普通の國語辭典に登錄されてゐる通りである。

世界諸國を通じて便利な十進法が最も廣く行はれてゐるが、十進法以外の數へ方も隨分行はれてゐる。例へば十二進法の一ダース、三十進法の一畝（三十歩）の如きである。寸尺法とメートル法とを併用すれば、メートルは一寸の三十三進法となるわけである。

分量の數詞の引例の「一千一夜」はアラビアンナイトの物語の夜の數、「三千七百四十八メートル」は富士山の海拔の高さによる。また順序の數詞の「一萬號」は新聞紙の日刊號數、「八代目」は將軍などの世代順、「十二段目」は忠臣藏（劇）の終の幕、「二十五の卷」は、妙法蓮華經の第二十五普門品（觀音經）の如きをさしていふ。

助數詞に一定の習慣がある。左に普通のものの例をあげておく。

神一柱　佛一體　人一名又は一人　獸一頭
又は一匹　鳥一羽　魚一尾　蟲一匹　木一
株又は一本　草一本　家一棟又は一軒　車
一臺又は一輛　船一艘又は一隻　大砲一門
歌一首　文章一篇　證文一通　書籍一冊又
は一卷　帶一筋　長持一棹　小判一枚　椅
子一脚　刀劍一振　旗一流　提灯一張　筆
一本　墨一挺　硯一面　紙一枚　など

（下に記す助數詞は二つ又はそれ以上の集合を以て單位とするもの）

筆一對　盃一組　下駄一足　洋服一着　甲
冑一領　鴨一番　紙一帖　屏風一双　鉛筆
一ダース　など

右のやうに助數詞は、數の觀念の重い場合に用ひられる。次のやうに數の觀念が名詞より輕く、名詞の形容として用ひられる場合の熟語は、名詞と見るべきである。

上御一人　日本三景　六歌仙　十勇士　五百羅漢　百萬塔　一軒屋　五人組　八大家　百人一首など

また順序の數詞も、名詞の形容として用ひられ、名詞の觀念の重い場合の熟語は、次の例のやうに名詞と見るべきである。

一等賞　二番雛　三號雜誌　第四聯隊　第五中學校　一の宮　二の鳥居　三の丸　四の君　五月五日　第六學年　大正十五年　西曆一千九百二十六年　など

右に列擧した諸名詞が固有名詞であるか普通名詞であるかは、本書第一章名詞の條に示した條件によつて判別される。

なほ「一般」（普通）「百方」（種々）「萬一」（萬分の一、若しも）などのやうに、數の觀念を失つたものは、他の品詞に轉用されたのである。

即ち、

一般（名詞）　百方（名詞又は副詞）　千古（名詞）　萬一（名詞又は副詞）　億兆（名詞）　千千に（「樣々に」の意、副詞）　萬づ（「悉く」の意の場合は副詞）など

第三章　代名詞

第一節　代名詞の種類

我が國語の代名詞を分けて人代名詞と指示代名詞との二種類とし、更にこれを

人代名詞（人）		自稱
指示代名詞	事物	對稱
	場所	他稱
	方向	不定稱
	近稱	
	中稱	
	遠稱	
	不定稱	

と細別するのは、從來通例行はれてゐる分類である。これが英語などの代名詞の分類とは餘程趣を異にしてゐるのは、各の特質の然らしめる所である。英語の代名詞の分類の例は、

人代名詞（Personal pronoun）（第一人稱）I, we;（第二人稱）thou, you;（第三人

稱) he, she, it, they.
關係代名詞(relative pronoun) who, which, what, that.
疑問代名詞(interrogative pronoun,) who, which, what, whether.
指示代名詞(demonstrative pronoun) this, that, these, those.
不定代名詞(indefinite pronoun) some, one, any, other.
反射代名詞(reflexive pronoun) myself, yourself, himself.

西洋諸國語の一大特徴たる關係代名詞は、我が國語には無いが、反射代名詞に似た「おのれ、みづから」の如きものは我が國語に存在するのである。しかし普通には疑問代名詞と不定代名詞とを不定稱とすれば、前の二種類の簡便な分類に歸着する。

自稱を第一人稱、對稱を第二人稱、他稱を第三人稱とも呼ぶ。

第二節　人代名詞

我が國語には人代名詞が甚だ多い。本書の表にあげたのは、最も普通なものである。西洋諸國語の人代名詞の簡易なのに比べて、我が國語のは甚だ複雜である。左に我が人代名詞の諸例をあげる。

(自稱)　我、私、僕、余、身、自分、拙者
おのれ、それがし、やつがれ(男)、わらは(女)、あれ、まろ、內、こち、こなた、此方、手前、小生、迂生、野生、老生、など

(對稱)　汝、あなた、御前、君、御身、御前、貴殿、貴君、貴公、貴樣、そなた、其方、其許、吾殿、吾主、御邊、御手前、なれ、いまし、みまし、きんぢ、そち、そこ、ぬし、吾御料(女)、吾御前(女)、御許(女)など(また自稱を轉用して)われ、手前、おのれ、など

(他稱)　彼、あれ、このかた、そのかた、あのかた、こいつ、そいつ、きやつ、あいつ、など

(不定稱)　誰、どなた、だれ、どいつ、など他稱の中には、近稱(このかた、こいつ)、中稱(そのかた、そいつ)、遠稱(あのかた、あいつ)の別がある。

人代名詞の複數を示す方法は、本書に例示する通り、名詞の複數を示す方法に等しい。

次の如き人代名詞は、元來は複數的のものであるが、また單數的にも用ひられる。
吾輩、予輩、吾曹、吾人、身共、吾儕、など人代名詞の中には、次のやうに指示代名詞を轉用したものが多い。

こち、そち、こなた、そなた、あなた、どなた、此方、其方、このかた、そのかた、あのかた、どのかた、など

自稱の「わたくし」は近古以後に用ひられてゐる人代名詞で、左のやうに種々に變形してゐる。

わたくし—わたし(watakushi, watashi)
わたい—わてい(wataii, wateii)
わし(washi)
わち—わつち(wachi, watch)
わい—わちき(wai, wachiki)
あたし—あたい—あてい(atashi, atai, atei)

本書の表には、事物と場所と方向との三區別をしてあるが、なほ時間や數量などに關する指示代名詞も若干ある。さうして純粹な指示代名詞を缺く場合には、「この何」「その何」「かの何」「あの何」「どの何」等の形式で「何」には名詞を充て用ひるのである。例へば、

	近稱	中稱	遠稱	不定稱
時間	この時	その時	かの時 あの時	い つ
數量	この數	その數	かの數 あの數	いくつ いかほど
その他	この子 我が子	その子 汝が子	かの子 あの子 かれの子 あれの子	いづれの子 どの子 たが子 だれの子

本書の表の指示代名詞に「ら」の添はつたものが表はす觀念については、本書に說明してある通りである。

第四章　動詞

動詞は、主として動作をあらはし、また狀態や存在をもあらはす詞であるから、本書に「動作や存在などを言ひあらはす詞」と說いてある。

動詞の積極は動作をあらはすのにあるが、その消極は存在をあらはして形容詞と相接するのである。卽ち

動詞
鳥鳴く。鳥飛ぶ。(有意の動作)
花咲く。花散る。(無意の動作)

事物代名詞の「こそ」か「あ」と」や、人代名詞の「わ」な「た」などといふ語根に助詞の「の」または「が」の熟合した「この」「その」「かの」あの」「どの」わが」なが」たが」などは、本書にこれを指示代名詞の一種とする。但し、これを形容詞の一種としては指示形容詞といふ說き方もある。

また前記の語根は、事物代名詞又は人代名詞として用ひられることがある。例へば

○憶良等は、今は罷らむ、子泣くらむ、そ(子)もそ(子)の母も、あ(吾)を待つらむぞ。(萬葉集、山上憶良)

○生も亦わ(我)が欲する所なり。義も亦わ(我)が欲する所なり。(孟子)

○色よりも、香こそあはれと、おもほゆれ、た(誰)が袖ふれし、宿の梅ぞも。(古今集、讀人知らず)

鳥の聲聞ゆ。櫻の花見ゆ。
由高く聳ゆ。石碑が立つ。
山有り。人が居る。(流動の狀態)(靜止の狀態)(存在の有無)

形容詞
山無し。人空し。(存在の有無)
山高し。雪白し。(狀態の形容)
人物善し。天性賢し。(性質の形容)
心うれし。靜かなし。(表情の形容)

右のやうに動詞と形容詞とは意味において相接する所があるけれども、その形式において明かに判別することが出來る。卽ち兩者の語尾變化に明かな相異がある。

用言の語尾變化卽ち活用の事は、本居宣長の「御國詞活用抄」や本居春庭の「詞の八衢」や東條義門の「山口の栞」などに研究されてから大いに進步した。その活用の形に始めて整頓した名稱を與へたのは義門で、その後漸く修正されて今日に至つた。卽ち、

○東條義門著「詞の道しるべ」には、
將然言　截斷言　聯體言　已然言　希求言

○富樫廣藤著「詞の玉だすき」には、
未然段　續詞段　斷止段　續言段　已然段

○黒川眞頼著「詞の栞」には、

將然言　連用言　終止言　聯體言　已然言　希求言

○大槻文彦著「廣日本文典」には、

不定法（未定）　連用法　終止法　第二終止法（連體法）　第三終止法（既定）　命令法

○吉岡郷甫著「日本口語法」には、

否定形　連用形　終止形　連體形　假定形　命令形

以前に「活用言」「活用段」または「活用法」などと云つてゐたのを、今は普通に「活用形」と呼ぶに至つたのは、明治四十年前後に文部省の國語調査委員會で方言調査と標準語法制定とのためこの名稱を用ひられてからの事と思ふ。今は、文語では、

未然形又は將然形　連用形　終止形　連體形　已然形　命令形

といふ名稱が普通に用ひられ、口語では、

未然形又は否定形　連用形　終止形　連體形　假定形　命令形

といふ名稱が普通に用ひられてゐる。活用形の名稱が異なると共に語形も皆異なるのは、文語の「死ぬ」「往ぬ」といふ語で、その他の語においては、活用形に異名同形のものを持つ。

近時中等教育を修めて更に高等教育に進む志望の者一千四百餘人の國文法答案に就いての調べによると、活用形の名稱の中に「未然」と記したのが一千三十一名即ち全體の約四分の三であり、「將然」と記したのが三百六十八名即ち全體の約四分の一であつた。さうして何々形と記したのが普通であり、何々段などと記したのが若干あつた。

動詞の活用しない部分を語幹もしくは語根といふが、本書は語幹の方を用ひてある。用言の語尾を除いた部分が、必ずしも單一な語根ではないからである。

動詞の活用の種類は、文語には九種あり、口語には五種ある。各種活用の動詞の多寡の順は左の通り、

（文語）四段　下二段　上二段　上一段　ラ行變格　サ行變格　ナ行變格　カ行變格　下一段　上一段　サ行變格　カ行變格

「詞の八衢」は、動詞活用の典型として完備したものではないけれども、これを基調として左に文語の各種活用の多寡の割合を掲げて見よう。

合計	四段活用	下二段活用	上二段活用	上一段活用	ラ行變格活用	サ行變格活用	カ行變格活用
ア行							
カ行	一八二五六一						一
サ行	一八七三一						
タ行	二三一四二						
ナ行	一四						
ハ行	一七八六二三二						
マ行	一三七七六四七						
ヤ行	二八四						
ラ行	二七一四四二				三		
ワ行	五四						
合計	九一四七〇一六〇四九七一二二三一七四一	一	二	二			

右の合計の百分比（四段は57%弱、下二段は27%強、上二段は4%強、上一段は1%強、その他は1%弱、）

活用の行の多少順（ラ行三九三、ハ行二七四、カ行二四九、マ行二二四、サ行二二〇、タ行四九、ヤ行三二、ナ行一八、ワ行九、ア行二）

下二段と上二段、また下一段と上一段は、語尾變化において エ段とイ段と相異ある外は同じ形式である。またラ行變格とナ行變格とは四段活用に近似してゐるが、ラ行變格の方は熟語としても用ひられることが甚だ多いによつて、多く練習を要する。さうしてサ行變格とカ行變格とは活用が近似してゐるが、サ行變格の方は熟語としても用ひられることが甚だ多く、且つ方言も少くはないによつて、多く練習を要する。

動詞の活用の假名遣を正すため、また普便の「假名音圖」を利用し、各種の動詞の活用を比較するため、同第二表「文語口語動詞活用比較一覽」を利用し、且つ詳細に文語と口語との活用形を對照するため、同第三表「文語口語動詞活用對照表」を會得するを要する。

第一節　四段活用

動詞の活用を教授するには、先づ四段活用に習熟させねばならぬ。四段活用は總體の動詞の三分の二ほどを占めてゐて、第一の基本となる活用であるからである。しかも、これは假名音圖のアイウエの四段に活用して學習し易いものである。

初學のために次の二件を懇に說明するを要する。

一、音圖の活用段の數と活用形の數と一致するものは、後に說くナ行變格活用だけで、その他の活用では活用段の數の方が少いこと。

二、活用形の名稱は、その活用形の重な特徴によつて名づけたもので、その特徴はその活用の任務の悉皆ではないこと。

語幹の例	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形（口語の假定形）	命令形
よ（讀）	ま	み	む	む	め	め

初學者は、活用形の名稱を以て活用形の任務の悉皆であるかのやうに速了し易いが、實際は左の例のやうな工合である。（上方は文語で下方は口語）

讀ま（未來の助動詞）む（未來の助動詞）
讀ま（未定につく助動詞）ば（未定につく助動詞）
讀ま（使役の助動詞）す（使役の助動詞）
讀ま（受身又は可能又は敬語の助動詞）る（受身又は可能又は敬語の助動詞）
（打消の助動詞）す（打消の助動詞）
讀ま（未來の助動詞）う（未來の助動詞）
讀ま（使役の助動詞）せる（使役の助動詞）
（受身又は可能又は敬語の助動詞）れる（受身又は可能又は敬語の助動詞）
（打消の助動詞）ない（打消の助動詞）

讀む。
- 讀ま（文を終止する形）
- 讀まい（推量打消の助動詞）
- 讀らしい（推量の助動詞）
- 讀な（禁止の助詞）
- 讀まで（接續の助詞）

讀む。
- 讀人（名詞即ち體言）
- 讀です（指定の助動詞）
- 讀やうだ（比喩の助動詞）
- 讀か（疑問の助詞）

讀め。
- 讀なば（假定又は配定につゝ助詞）
- 讀ない（不可能の意の打消の助動詞）

讀め。
- 讀（命令する形）
- 讀よ（感動の助詞）

讀か。
- 讀あげる（動詞）
- 讀やすい（形容詞）
- 讀ますまい（敬語の助動詞）
- 讀たい（希望の助動詞）
- 讀つつ（並行又は繼續の助動詞）
- 讀名。詞。に轉用する形。
- 讀文。中。止。する形。

（川。言。）

讀む。
- 讀（文を終止する形）
- 讀まい（推量打消の助動詞）
- 讀らしい（推量の助動詞）
- 讀な（禁止の助詞）
- 讀まで（接續の助詞）

讀む。
- 讀人（名詞即ち體言）
- 讀です（指定の助動詞）
- 讀やうだ（比喩の助動詞）
- 讀か（疑問の助詞）

讀め。
- 讀なば（假定又は配定につゝ助詞）
- 讀ども（逆接條件の助詞）

讀め。
- 讀（命令する形）
- 讀よ（感動の助詞）

讀か。
- 讀あげる（動詞）
- 讀やすい（形容詞）
- 讀ますまい（敬語の助動詞）
- 讀たい（希望の助動詞）
- 讀つつ（並行又は繼續の助動詞）
- 讀名。詞。に轉用する形。
- 讀文。中。止。する形。

（川。言。）

四段活用に屬する動詞の例（「詞の八重」などによる）

（カ行）明く　念く　揭く　緊く　斬く　浮く　動く
吸く　叫く　隙く　蒔く　焚く　走く　泳く　書く
啓く　滑く　蒸く　煩く　乾く　囲く　築く
敷く　逆く　退く　好く　背く　そよく
焚く　明く　平く　開く　突く　嬉く
繊く　紫く　貫く　説く　解く　訴く
轟く　泣く　嘆く　響く　抜く　配く
除く　吐く　刺く　響く　省く　引く
解く　閉く　閃く　吹く　防く　
蒔く　捲く　招く　巻く　導く　貫く
輝く　和く　行く　遊く　若く　浄く

（サ行）明す　倦す　現す　活かす　致す
出す　います　動かす　選す　催す　犯す
す　眼す　抑す　落す　脅す　惜かす
及ぼす　隠す　貸す　返す　崩す　下す
崩す　洗す　消す　汚す　焦す　越す
志す　繋す　殺す　探す　刺す　溢す
囲す　匿す　置す　示す　記す　遡す　質す
飼す　試す　達す　費す　照す　鎖す

（タ行）波立す　放す　通す　寄す　法す　成す　立す
焼す　温す　冷す　風す　干す　殘す　果す
戻す　催す　潮す　中す　乾す　召す　蒸す　編す
渡す　
（ハ行）過つ　打つ　穿つ　か　つ　酔つ
貸つ　育つ　立つ　断つ　保つ　放つ
言つ　待つ　満つ　持つ　分つ
（ハ行）洗ふ　争ふ　合ふ　扱ふ　洗ふ
謂ふ　厭ふ　祝ふ　配ふ　云ふ　浮ふ　問ふ
失ふ　散ふ　延ふ　参ふ　数ふ　憑ふ
補ふ　迫ふ　負ふ　行ふ　暴ふ　護ふ
思ふ　及ふ　語ふ　叶ふ　買ふ　聞ふ
通ふ　縫ふ　接ふ　食ふ　狂ふ　乞ふ
思ふ　吐ふ　さまよふ　暴ふ　殺ふ　忍ふ
ふ　敬ふ　吸ふ　住ふ　洛ふ　奢ふ　論ふ
ふ　集ふ　賞ふ　陽ふ　誓ふ　使ふ　償ふ
ふ　敵ふ　回ふ　飛ふ　整ふ
拭ふ　習ふ　単ふ　荷ふ　香ふ
計ふ　図ふ　組ふ　祖ふ　証ふ
ふ　運ふ　結ふ　選ふ　振ふ
洗ふ　賞ふ　断ふ　踊ふ　蹴ふ　尊ふ
向ふ　結ふ　明ふ　貫ふ　塞ふ　問ふ
雇ふ　ふ　呼ぶ　炭ふ　寄ふ

第一節　四段活用　第四章　動詞　品詞の解説　中篇

右の諸活用形の中で、文語においては終止形と已然形とが相對的に用ひられたのであるに、口語においては此の相對的區別がすでに未然形と假定形とが文語と趣を異にしてゐることを注意すべきである。

右のやうに各活用形の名稱は便宜につけたまでのものであるから、名稱の權威を避けるために單純の數詞を用ひて第一變化乃至第六變化（又は第一活用形乃至第六活用形）と呼ぶ方法がある。即ち、

第一變化又は第一活用形（未然形）
第二變化又は第二活用形（連用形）
第三變化又は第三活用形（終止形）
第四變化又は第四活用形（連體形）
第五變化又は第五活用形（已然形）（假定形）
第六變化又は第六活用形（命令形）

このやうな名稱は理論上では結構であるけれども、何等の內容を示さない名稱を直に初學者に授けることは、學習に便利でないと認めて、數詞名稱を用ひないで直に內容名稱を用ひたのである。但し、內容名稱を了解させた後に數詞名稱の呼び方を令のため授けることは容易な事であるから、教授上の形合で之を併說されても可い。

煩ふ　笑ふ　醉ふ

（マ行）赤む　憐む　編む　怪しむ　危む　歩む　忌む　勉む　痛む　挑む　瞀む　產む　倦む　埋む　渼む　凪む　圃む　霞む　嚙む　悲しむ　刻む　汲む　組む　悔む　苦しむ　好む　込む　沈む　萎む　白む　住む　澄む　荒む　進む　凉む　染む　巧む　疊む　樂しむ　賴む　搗む　搗む　鎔む　摘む　摑む　謹む　富む　慰む　泥む　惱む　憎む　睨む　盜む　嫉む　怨む　飲む　勵む　爽む　食む　僞む　潜む　含む　踐む　まどろむ　揉む　む　休む　止む　病む　歪む　緩む　淀む　讀む　力む　漁る　嘲る　當る　預る　（ラ行）上る　笑む　拜む　惜しむ　集る　侮る　炙る　餘る　操る　誤る　改まる　入る　怒る　憤る　至る　勞る　僞る　新る　彩る　うれる　賣る　怒る　起る　怠る　陷る　劣る　阿る　繰る　係る　限る　飾る　重なる　畏まる　語る　かぢる　代る　歸る　借る　刈る　蔓る　軋る　來る　切る　括る　潜る　腐る　下る　覆る　配る　曇る　繰る　削る　節る　凍る　籠る　凝る　泝る　探る　定まる　悟る　囀る　去る　下る　叱る　茂る　親む　滴る　縛る　締る　温る　知る　辷る　坐る　刷る　迫る　訪る　反る　祟る　濁る　便る　垂る　契る　散る　作る　綴る　足る　列なる　釣る　照る　滯る　墓る　積る　泊る　豐榮昇る　取る　名乘る　通る　直る　訛る　成る　鳴る　止る　隣る　鈍る　稔る　眠る　練る　這入る　握る　濁る　屬る　登る　乘る　宣る　殘る　計る　走る　始まる　憚る　張る　捻取る　光る　捻る　弘まる　耻る　塞る　降る　振る　誇る　屠る　掘る　罷る　勝る　混る　交る　廻る　守る　參る　亂る　實る　貪る　綫る　戾る　漏る　宿る　破る　遣る　讓る　過る　嚼る　寄る　料る　分る　渡る　割る　歸る　終る　折る

口語の四段活用には、ナ行の「死ぬ」や「往ぬ」、ラ行の「有る」や「居る」がある。なほ「居る」の四段活用は現代の文語にも許容されてゐる。文語のカ行下一段活用の「蹴る」は、口語では、ラ行四段にも活用されてゐる。また文語のマ行上二段活用の「恨む」は、口語ではマ行四段活用となり、その四段が現代の文語にも許容されてゐる。

（注意）サ行四段活用の動詞から過去時の助動詞の「し」「しか」に連なる場合の許容については、第六章助動詞の第六節に之を說く。

第二節　上一段活用

四段活用を敎へてこの活用に至る時に、次の五件を懇に說明する必要する。

一、四段といひ上一段といひ下一段といひ上二段といふのは、附錄第二表に比較するやうに、アイウエオの五段の中の幾段かに活用することないふのである。例へば上一段は、假名音圖の中線ウ段より上のイの一段にイ、イル、イレと共通に活用する。もし假名音圖によらないで說けば、イ、イル、イレと三段の活用をするやうに思はれる。

二、假名書きでは、上一段活用の動詞の多くは語幹を認めがたい。但し、ロトマ字書きにすれば k—i, k—iru k—ire, n—i, n—iru, n—ire, m—i, m—iru, m—ire と語幹の音を分離して見ることができる。「射る」は i, iru, ire で全く語幹を持つてゐないが、ヤ行活用ともしてあるから元は y—i, y—iru, y—ire で有つたやうである。「用」の活用は、國定小學讀本の用例に從つて本書はこれをハ行上二段活用としてあるけれども、古來の學者の間にヲ行一段活用とする說も隨分有力である。

三、四段活用の動詞の命令形には、命令の助詞がつかないけれども、上一段活用の動詞の命令形には、文語には「よ」、口語には「よ」又は「ろ」の命令の助詞がつく。

四、文語の上一段活用の動詞は、次の通りに少い。

（ア行）射る　鑄る
（カ行）着る
（ナ行）似る　煮る
（ハ行）干る　簸る
（マ行）見る　試みる　顧みる　後見る　鑑みる　惟みる（下五語は「見る」の熟語）
（ヲ行）居る　以る　率ゐる　用ゐる
（下二語は「以る」の熟語）

五、文語の上二段活用は、口語では皆、上一段活用となる。さうして文語の四段活用の「飽く」「借る」「足る」は、口語では上一段活用として「飽きる」「借りる」「足りる」といふのが通例である。それで口語の上一段活用は、附錄第三表に示す通り假名音圖のサ行とヤ行を除く外すべての行に活用する。

なほ關東や東北地方などでは、イ段とエ段との發音を混淆する所が多いから、この兩母音を分明にするを要する。例へば（イル）射エル（得）、キル（着）とケル（蹴）との區別の如きである。

第三節　下一段活用

上一段活用を敎へた後に下一段活用を敎へることは容易である。たゞ左の二件を說明するを要する。

一、上一段活用と下一段活用との相異は、單にイ段がエ段にかはることである。

二、文語と口語と共通の下一段活用は、たゞ「蹴る」の一語であるが、文語の下二段活用は口語では皆、下一段活用となる。それで口語の下一段活用は、附錄第三表に示す通り假名音圖のすべての行に活用する。なほ口語では「蹴る」を四段活用にも言ふ。

第四節　上二段活用

（次節の事項も便宜上こゝで本節に併せて說く）

古の上二段活用と下二段活用とは、後世は文語にばかり保存されて、標準の口語では上一段活用と下一段活用とに改まり、たゞ九州などの方言に古語の活用を今も用ひてゐるのである。しかもその方言においても古語の連體形を終止形にも兼用してゐる。それで次の三件を懇に說明するを要する。

一、上一段活用と上二段活用との相違點、並に下一段活用と下二段活用との相異點は、終止形と連體形と已然形（口語では假定形）とにあるのだから、この點を間違へないやうにすべきである。（附錄の第三表を照合せよ）左に標準口語と方言と文語とを對照する。

例語幹の	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形（已然形）	命令形
標準口語	お（起）	き	き	きる	きれ	き（よ）
九州方言	お（起）	き	き	くる	くれ	き（よ）
文語	お（起）	き	き	く	くる	くれ	き（よ）

例語幹の	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形（已然形）	命令形
標準口語	う（受）	け	け	ける	ける	けれ	け（よ）
九州方言	う（受）	け	け	くる	くる	くれ	け（よ）
文語	う（受）	け	け	く	くる	くれ	け（よ）

二、上二段活用においてはハ行とヤ行、下二段活用においてはア行とハ行とヤ行とワ行との假名遣を誤らないやうにすべきである。例へば、文語の連體形の「强ふる」と「斷ゆる」と「報ゆる」、「得る」と「堪ふる」と「强ひる」と「植うる」、口語の連體形の「斷える」と「報いる」、「得る」「堪へる」と「植ふる」

三、上一段活用の條に列記した文語と共通の上一段活用の動詞の外に、文語の上二段活用の動詞は、口語では皆、上一段活用となる。次にその文語の諸例を擧げる。

（カ行）生く　起く　過ぐ　靈く
（タ行）落つ　朽つ　閉づ　捻づ　恥づ
（ハ行）荒ぶ　憂ふ　生ふ　戀ふ　媚ぶ
强ふ　怨ぶ　伸ぶ　綻ぶ　亡ぶ　詫ぶ
用ふ

第五節　下二段活用

上二段活用と共通の事項は、前節の條に併せて說いたから、次の一件だけを補充しておく。

文語と口語と共通の下一段活用の動詞「蹴る」の外に、文語の下二段活用の動詞は、口語では皆、下一段活用となる。次にその文語の諸例を擧げる。

（ア行）得く　掲ぐ　受く　揭ぐ
（カ行）明く　擧ぐ　預く　受く　揭ぐ
懸く　碎く　遊く　下ぐ　捧ぐ　授く
妨ぐ　退く　長く　助く　平ぐ　附く
告ぐ　繊く　滑く　遂ぐ　投ぐ　逸ぐ
拔く　禿ぐ　開く　擴ぐ　更く　設く
負く　曲ぐ　向く　燒く　和ぐ　分く
（マ行）溶む　疎む　恨む　試む（一種の活用）
（ヤ行）老ゆ　悔ゆ　報ゆ
（ラ行）下る　懲る

四、口語では「恨む」をマ行四段活用としてゐる。さうして現代の文語においては「恨む」を口語と同じ活用とすることが許容されてゐる。

（サ行）合はす　失す　仰す　替す　着す　似す　載す　驅す　伏す　任す　突す　見す　瘠す　寄す
（タ行）宛つ　あわつ　出づ　奏づ　企つ　棄つ　育つ　立つ　撫づ　秀づ　隔つ　詣づ　滿つ
（ナ行）寢ぬ　重ぬ　兼ぬ　尋ぬ　東ぬ　列ぬ　擦ぬ　委ぬ
（ハ行）與ふ　誂ふ　會ふ　答ふ　訴ふ　押ふ　衰ふ　散ふ　換ふ　構ふ　加ふ　比ぶ　拵ふ　答ふ　支ふ　訓ぶ　統ぶ　添ふ　編ふ　堪ふ　逸ふ　貯ふ　仕ふ　整ふ　唱ふ　捕ふ　長らふ　准ふ　並ぶ　延ぶ　控ふ　燻ぶ　交ふ　辨ふ　教ふ

終ふ
（マ行）赤む　祟む　諦む　暖む　集む　改む　諫む　戒む　埋む　屈む　掠む　固む　獨む　樅む　清む　苦しむ　迅む　慄む　定む　占む　認む　沈む　鑑む　攻む　集む　褶む　嬌む　捻む　勉む　咎む　止む　留む　警む　睨む　慰む　宥む　始む　箭む　早む　止む　潜む　擴む　褒む　安む　止む
（ヤ行）甘ゆ　癒ゆ　覺ゆ　消ゆ　聞ゆ　悔ゆ　越ゆ　肥ゆ　冴ゆ　榮ゆ　聳ゆ　絶ゆ　潰ゆ　萎ゆ　映ゆ　冷ゆ　吠ゆ　見ゆ　見ゆ　燃ゆ
（ラ行）呆る　憧る　暴る　溢る　現る　荒る　入る　浮る　生る　埋る　後る　恐る　訪る　溺る　隱る　枯る　切る　幕る　崩る　汚る　焦る　しぐる　萎る　勝る　廢る　垂る　倒る　連る　疲る　慣る　流る　濁る　遁る　晴る　離る　觸る　腐る　紛る　墜る　亂る　漏る　破る　分る　忘る　割る　折る
（ワ行）植う　飢う　掘う

國文法で「正格活用動詞」といふのは、英語などで「規則動詞」(regular verb)といふやうなものである。次節以下に說く「變格活用動詞」といふのは、英語などで「不規則動詞」(irregular verb)といふやうなものである。

すべて文語の動詞の活用は九種であり、口語では合併作用が行はれて五種となつた。前にあげた文語動詞の統計の百分比を口語に變換して見ると、凡そ

四段活用は　六七パーセント
口語の動詞
下一段活用は　二七パーセント
上一段活用は　六パーセント

の見當となるであらう。但し、右の中には古語を除き新語を加へて精算するか要する。口語動詞の變格活用は大いに減少してゐるが、サ行變格の「する」(爲)は、他語と結合して用ひられることが甚だ多いから、その實際の勢力は益々盛である。

第六節　正格活用の總括

第七節　カ行變格活用

この活用を敎へるのに、次の三件の說明を要する。

一、文語の活用は上二段活用に似て、しかも未然形と命令形とはオ段の「こ」に活用する。さうして口語の活用は文語の活用に似て、しかも終止形は連體形と同樣に「くる」と活用する。口語の命令形には「い」といふ助詞がつく。

二、口語の未然形と命令形とは、方言の中には「き」に活用させて「きない」「きい」と言ふのがあるから矯正を要する。

三、文語ではこの變格動詞と同寘語の四段活用動詞「きたる」(來る)も用ひられる。

第八節　サ行變格活用

この活用の「す」を敎へるのに、次の四件の說明を要する。(「おはす」は文語にばかり用ひる)

一、文語の活用は上二段活用に似て、しか

も未然形と命令形はエ段の「せ」に活用する。さうして口語の活用は文語の活用に似て、しかも終止形は連體形と同樣に「する」と活用する。なほ口語の活用には二種有つて、未然形と命令形とは「し」にも活用して、「せぬ」「しない」「せよ」「しろ」と兩樣に言ふ。

二、口語の方言の中には、「せぬ」を「しぬ」に「しない」を「せない」に、「する」を「しる」又は「せる」に、「すれ」を「しれ」又は「せれ」に、「せよ」を「しよ」に、「しろ」を「せろ」に活用させて言ふのがあるから矯正を要する。

三、サ行變格活用の動詞「す」が、直接に和語の名詞や副詞、漢語の動詞など、その他の外來語の名詞や動詞につくときはその語を動詞語幹と化し、「す」の活用がその語尾となる。本書の引例の外にも、

（和語）噂す、心地す、物す、位す、嘘す、嘉す、欲す（ほりすの音便）、空しくす、高うす、明かにす、蔑にす、先んす（先にすの音便）、など

（漢語）勉强す、運動す、試驗す、及第す、旅行す、歸省す、拜す、存す、銘す、など

（西洋語）テストす、スピーチす、パツスす、チヤームす、スポーツす、など

四、口語では、熟語の語尾となつた元のサ行變格「す」が、或は四段活用に、或は上一段活用に轉化したものがある。例へば

（四段活用に）議す、辭す、解す、賀す、謝す、廢す、愛す、譯す、略す、祝す、など

（上一段活用に）察じる、判じる、煎じる、損じる、封じる、焙じる、通じる、輕んじる、重んじる、安んじる、甘んじる、疎んじる、など

第九節　ナ行變格活用

二、口語の活用の方は四段活用とするのが標準であるから、文語のやうにナ行變格に活用させるのは方言である。

三、文語の「いぬ」（往ぬ）といふ語は、方言には尙殘つてゐる。標準の口語ではこれを「いく」（行く、四段活用）といふ。

第十節　ラ行變格活用

この活用を敎へるのに、次の二件の說明を要する。

一、文語の活用は、四段活用に似てゐるがたゞ終止形を連用形と同樣に「有り」「居り」「侍り」といふ點が變格である。しかし口語では四段活用に轉化して、終止形を「有る」「居る」といひ、且つ現代の文語には、その四段活用の終止形「居る」が許容されてゐる。（「侍り」は口語には用ひられない）

二、文語において「有り」は、本書に例をあげたやうに種々に結合されて用ひられるから、特に終止形「有り」を正しくする必要がある。次に本書の例を追加する。

語には、その四段活用の終止形「居る」が許容されてゐる。（「侍り」は口語には用ひられない）

二、文語において「有り」は、本書に例をあげたやうに種々に結合されて用ひられるから、特に終止形「有り」を正しくする必要がある。次に本書の例を追加する。

「多かり」の類例、「善かり、惡かり、近かり、遠かり、」など

「靜かなり」の類例、「長閑なり、賑かなり、稀なり、珍らかなり、」など

「大將たり」の類例、「泰斗たり、臣たり、右大臣たり、」など

「爛漫たり」の類例、「判然たり、堂々たり、漠たり、確たり、」など

「讀みたり」の類例、「起きたり、受けたり、來たり、爲たり、」など

第十一節　變格活用の總括

正格活用の總括と照合して敎へ、次の二點に注意するを要する。

一、カ變とサ變との動詞は、その活用が類似してゐる。兩者の相異點は未然形と命令形とにある。

二、ナ變とラ變との動詞は、文語においても著しく四段活用に似てゐるが、口語においては全く四段活用に併合された。

活用を記すときの假名音圖の行段は、假名文字で書くのが可い。但し、萬葉假名（漢字）で次のやうに記す習慣もある。

阿行　加行　佐行　多行　奈行　波行
麻行または末行　也行　良行　和行
四段　伊段　字段　衣段　於段

第十二節　動詞の活用の識別

本節には文語の動詞の活用の識別についての方法を說いてある。識別は「鑑識」とも「鑑定」とも云ふ。口語の動詞の活用は、文語のにくらべて甚だ識別し易いから、別にその識別の方法を設いてないけれども、本節の應用問題として生徒に答へさせるのが宜い。その答は次の如くであるべきである。

口語の動詞は、先づカ變とサ變との動詞を記憶しておき、次の方法によつて、すべて*の活用を識別することが出來る。

(1)「讀まない」「書かない」などのやうに「ない」または「ない」の助動詞で打消して見て、語尾がア段であれば四段活用

(2)「起きない」「悔いない」などのやうに「ない」または「ない」の助動詞で打消して見て、語尾がイ段であれば上一段活用

(3)「受けない」「敎へない」などのやうに「ない」または「ない」の助動詞で打消して見て、語尾がエ段であれば下一段活用

（注意）(2)と(3)とを識別するには、イ段とエ段との發音を正しくすることを要する。これについても、イ段とエ段との發音の正しくない地方の發音を矯正する必要がある。

第十三節　自動詞と他動詞

自動詞と他動詞の事は、國文法ではこれを說く必要がないとする人もある。その說は、まづ次の二箇條を理由とするのである。

(一)　國文法で動詞の自他を說くのは、西洋文法の自動詞（intransitive verb）他動詞（transitive verb）の譯語から來たもので、動詞の動作の獨り自らする性質のものを自動といふ。動詞の動作の他の事物を處分する性質のものを他動といふ。

といつてゐるが、元來、英語などの動詞の自他の區別は、働き掛けと受身との轉換の成否にあり、卽ち動作のかゝる目的格（ドイツ語では第四格）の語の存否にある。その目的格の語を要するのは他動詞で、自動詞には絶對に目的格の語を要することがない。我が國語にも成るほど働き掛けと受身との轉換する場合はあるが、謂はゆる自動詞でも受身の相が成立つ場合がある。

（自動の例）

地が動く、

鳥が木に鳴く。

子が泣く。（受身）

母が子に泣かれる。

猫が人に打たれる。（有情の物の場合には受身が成立つ）

本が太郎に讀まれる。（このやうな受身は成立たない）

（他動の例）

人が猫を打つ。（働き掛け）

太郎が本を讀む。（働き掛け）

（英語の自他）

He teaches me English. (active)	彼（あの人）は私へ英語を教へる。（働き掛け）
I am taught English by him. (passive)	私は英語を彼（あの人）に教へられる。（受身）
English is taught me by him. (passive)	英語が私へ彼（あの人）に教へられる。（受身）

（直譯）

（注意）右のやうに英語の他動詞は、非情の物でも自由に働き掛けを受身に轉換することが出來るのである。しかし國語においては「英語が私へ彼（あの人）に教へられる。」といふやうな直譯語を承認することが出來ない。

かやうなわけであるから西洋文法流の動詞の自他を我が國語の動詞にそのまゝ當てはめようとするのは不都合な事である。

（二）それでは以前の我文法家は如何樣に動詞の自他を說いたかと云ふに、その代表的の說は本居春庭の「詞の通路」で、次のやうに六種に分けてある。

（一）おのづから然る、みづから然る

（例）きこゆ、ほろぶ、

（二）物を然する

（例）きく、ほろぼす、うつ、とがむ、

（三）他に然する

（例）きかす、

（四）他に然さする

（例）きこえさす、ほろぼさす、うたす、とがめさす、

（五）おのづから然せらるゝ

（例）きかる、

（六）他に然せらるゝ

（例）きかる、ほろぼさる、うたる、とがめらる、

右の（一）が自動詞に（二）が他動詞に當り、（三）（四）（五）（六）は動詞に助動詞「す」「さす」「る」「らる」の附いたものである。しかし、かやうな分類は思想の上の吟味に止まり、文法において動詞そのものゝ自他の法則を立て得たものでないと云ふのである。

それで國文法においては自動詞と他動詞との區別を說く必要がないとする說は、謂はれある事であるけれども、上篇第一章第三節にも述べておいたやうに、我が國語辭典には動詞の自他を區別してあり、且つその動詞の自他といふことは、思想の整理上に利用し得る所があるから、本書にも本節にこれを說いてあるのである。

そこで、辭書にいふ自動詞とは「月見ゆ」のやうに、主語の外には目的語を要しない動詞をいひ、他動詞とは「人月を見る。」のやうに主語の外に目的語を要する動詞をいひ、目的語には「を」といふ助詞がつくと說く。しかし稀には「を」の助詞がついても目的語でなく、從つてその動詞が他動詞でないものがある。例へば、

鳥が空を（空に）飛ぶ。

汽車、東京を（東京より）發す。

人、門を（門に）入る。

人、門を（門より）出づ。

我は山を（山に）登る。

我は山を（山より）下る。

大人、海を（海に）泳ぐ。

友人、郷里を（郷里より）去る。

世を（世より）去りて山に入る。

今を（今より）去ること十年。

などである。これらは辭書に自動詞と說明してある。しかし或文法家（高橋龍雄氏と記憶する）は形式に重きを置いて、「を」のついた客語をうける動詞をすべて他動詞と見なしてゐるが、普通の說ではない。

「詞の通路」には、自他の分れる活用の三種類として、

一、同行に分れるもの。

（例）立つ（タ行四段、自）

立つ（タ行下二段、他）

破る（ラ行四段、自）

破る（ラ行下二段、自）

破る（ラ行四段、他）

二、佐行に轉つて分れるもの。

（例）驚く（カ行四段、自）

驚かす（サ行四段、他）

戰ふ（ハ行四段、自）

戰はす（サ行下二段、他）

三、良行に轉つて分れるもの。

（例）圍む（マ行四段、他）

圍まる（ラ行下二段、自）

重ぬ（ナ行下二段、他）

重なる（ラ行四段、自）

大概はこの三種類に總括し得ると說いてある。しかし「戰はす」「圍まる」の如き語尾は、今は動動詞として說明されてゐるものである。

右のやうな說き方より、今通例行はれてゐる「動詞の自他の語形」卽ち本書に揭げたやうな說き方が、思想の整理に都合がよい。その例は、

一、自動詞だけある動詞（例）有り（ラ變）

死ぬ（ナ變）膝す（サ下二）寢ぬ（ナ下二）來る（カ變）眠る（ラ四）降る（ラ四）

二、他動詞だけある動詞（例）送る（ラ四）

殺す（サ四）招く（カ四）着る（カ上一）數ふ（ハ下二）忘る（ラ下二）

投ぐ（カ下二）

三、自他同じ活用の動詞（例）明く（カ下二）言ふ（ハ四）垂る（ラ下二）吹く（カ四）開く（カ四）閉づ（タ上二）張る（ラ四）增す（サ四）笑ふ（ハ四）

四、自他活用を異にする動詞（例）

自（出づ（ダ下二）流る（ラ下二）育つ（タ四）破る（ラ下二）盡く（カ上二）驚く（カ四）重なる（ラ四）落つ（タ上二）似る（ナ上一）見ゆ（ヤ下二）

他（出す（サ四）流す（サ四）育つ（タ下二）破る（ラ四）盡くす（サ

他（四）奪かす（サ四）重ぬ（ナ下二）落す（サ四）似す（サ下二）見る（マ上一）

第十四節　動詞の音便

すべて音便を說明するのには、成るべくローマ字を利用する方がよい。本節の例について云へば、

（一）イ音便
書きて（kakite）—書いて（kaite）（kの脫落）
漕ぎて（kogite）—漕いで（koite）（gの脫落とtの連濁）

（二）ウ音便
問ひて（toite—toite）—問うて（tout—tōte）（hの脫落と母音の轉化融合）
讀まむ（yomamu）—讀まう（yomau—yomō）（mの脫落と母音の轉化融合）

（三）撥音便
學びて（manabite）—學んで（manande）（iの脫落とbの轉化とtの連濁）
讀みて（yomite）—讀んで（yonde）（iの脫落とmの轉化とtの連濁）
死にて（shinite）—死んで（shinde）（iの脫落とtの連濁）
讀まむ（yomamu）—讀まん（yoman）（uの脫落とmの轉化）

（四）促音便
立ちて（tachite）—立つて（tatte）（chiの脫落と音の停頓）
洗ひて（arahite）—洗つて（aratte）（hiの脫落と音の停頓）
有りて（arite）—有つて（atte）（riの脫落と音の停頓）

（附言）文部省臨時國語調査會で大正十三年十二月議決した新假名遣は、大體發音的であり、「讀まう」は「讀もう」と綴つて之を長音「讀もー」と發音するのである。この假名遣を用ひると、活用形が一つ增して「未來形」又は「推量形」（助動詞のタロウやダロウの場合）の名稱を設け、「未然形」を「否定形」と改めるが宜い。例へば、

例の幹語	形否定	形連用	形止終	形體連	形定假	形令命	形來未
（讀）よ	（なぬい）ま	み	む	む	（ば）め	め	（う）も
（受）う	（なぬい）け	け	るけ	るけ	（ば）れけ	（よ）け	（うよ）け
（爲）	（ぬ）せ （いな）し	し	るす	るす	（ば）れす	（よ）せ （ろ）し	（うよ）し

第五章　形容詞附形容動詞

動詞と形容詞とを區別することは以前から國學者も說いたことで、特に鈴木朖の言語四種論に、詞の品類を「體の詞、作用の詞、形狀の詞、てにをは」の四つに分けてある。「作用の詞」とは動詞で「形狀の詞」とは形容詞である。さうして「作用の詞」と「形狀の詞」とを合して「はたらき詞」と云つてある。「形狀の詞」を二種の活用に分けて詳解したのは、東條義門の「山口の栞」に始まるのである。動詞と形容詞との關係については第四章の始にも說いておいた。形容詞の本質について次の三件を說明するを要する。

一、動詞の活用のやうに同一行に活用しないで文語の形容詞はカ行とサ行とにまたがつて活用し、口語の形容詞はカ行とア行とにまたがつて活用する。

二、活用の語形も動詞と形容詞とは相異なつて、形容詞は「高くない」「嶮しくない」「高うない」「嶮しうない」などのやうに、「ない」で打消してみれば、語尾が「く」もしくは「う」、卽ちどちらにしてもウ段である。

三、我が國語の形容詞は、そのまゝ終止して文の述語となり得るが、英語などでは is（有る）といふ動詞に形容詞を補足して述語となるのである。それは後に說く形容動詞の構成に似てゐる。しかし漢文の形容詞（卽ち靜字）は、我が形容詞に似てそのまゝ述語となり得るのである。例へば、

（國語）貴き人。彼の人は貴し。彼の人は賤しき人。
（漢文）貴人。彼人貴。賤人。
（英語）A noble man. He is noble. A humble man. He is humble.

本書は「多かり」「靜かなり」「寂寞たり」の如きもの卽ち形容動詞を、その意味によつて形容詞に附屬させておく。形容動詞の事は第二節に解說する。

第一節　形容詞の活用

形容詞の活用の說き方に、二種說と一種說とがある。

（一）二種說。本居春庭の「詞の八衢」には「し、き、くの活」と「し、しき、しくの活」とに分け、東條義門の「山口の栞」には、「く、し、きの活」と「しく、し、しきの活」とに分け、大槻博士の廣日本文典には、

第一、志幾活用（シキ）　し、き、けれ、く、
第二、志志幾活用（シシキ）　し、しき、しけれ、しく、

の二種に分けてある。

（二）一種說。權田直助の「詞の經緯圖解」には、形容詞を「く、し、きの活用」と「しく、し、しきの活用」とに分けないで、同じく「く、し、きの活用」一種であると說いてある。

兩說何れも理由があるのであるが、文語と口語との活用の連絡をわかりよくするためには、兩說を折衷して說くのがよい。本書は折衷の說き方である。

	(語幹例)	(未然形)	(連用形)	(終止形)	(連體形)	(已然形)
文語 第一種	高	く	く	し	き	けれ
文語 第二種	嶮	く	く	(し)	き	けれ
口語 二種の區別が無い	高・嶮	く	く	い	い	けれ（假定形）

（注意一）　文語の第二種の活用には通例「し」の語尾を缺いてゐる。但し、「惡しし」「勇ましし」のやうに慣例のあるものは、現代の文語では語尾の「し」をそへることが許容されてゐる。

（注意二）　文語第一種の活用を一名「く活用」といひ、その第二種の活用を一名「しく活用」といふ。口語の活用は「く活用」の一種に攝することができる。

（注意三）　形容詞の未然形を將然形、連用形を副詞形、已然形を既然形ともいふ。形容詞では寧ろ副詞形の名稱を用ひるのが適當であるが、動詞の方の名稱と共通であるやうに連用形とよぶ。

次に形容詞の諸例を文語の二種の活用にわけて掲げておく。

○第一種の活用

赤し　明らけし　淺し　暑し　厚し　淡し
甘し　善し　危し　有難し　青し　青白し
潔し　痛し　逸早し　幼し　遑なし　後め
たし　薄し　うたてし　疎し　甘し　うろ
さし　憂たし　偉し　奥深し　遲し　大き
し　多し　覺束なし　重し　面白し　重た
し　賢し　堅し　穢し　辱し　かよわし
辛し　輕し　汚し　清し　けだかし　けむ
たし　臭し　暗し　黑し　快し　濃し　こ
ちたし　剛し　細し　敏し　寒し　繁し
靜けし　しどけなし　鹽辛し　鹽はゆし
執念し　白し　少なし　凄し　酸し　鋭し
切なし　狹し　せんかたなし　高し　尊し
容易し　近し　小さし　拙し　つぶとし
冷し　露けし　強し　辛し　手近し　疾し
遠し　長し　無し　名高し　腥し　生硬し
苦し　憎し　鈍し　溫し　妬し　根强し
賑たし　のどけし　緩し　はかなし　速し
遙けし　低し　平たし　廣し　深し　太し
古臭し　古し　細し　細長し　間近し　全
し　まばゆし　圓し　短し　醜し　酷し
めでたし　面倒臭し　勿體なし　懶し　脆
し　安し　柔かし　豐けし　緩し　善し
弱し　據なし　らうたし　若し　惡賢し
惡し　ゑぐし　小暗し　幼し

○第二種の活用

愛らし　淺まし　惡し　新し　厚かまし
怪し　あら〳〵し　あわたゞし　勇まし
忙し　痛々し　痛はし　悼まし　著し　厭
はし　いま〳〵し　いまはし　未だし　い
みじ　賤し　疑はし　美し　鬱陶し　初々
し　恭し　恨めし　美し　麗し　嬉し　奥
ゆかし　長多し　恐ろし　おとなし　同じ
重々し　思はし　神々し　かうばし　悲し
かはゆらし　かひ〳〵し　喧し　輕々し
芳し　氣遣はし　嚴し　奇し　口惜し　委
し　悔し　苦し　狂ほし　けたゝまし　險
し　小賢し　事々し　こひし　騷々し　寂
し　騷がし　親し　慕はし　白々し　すさ
まじ　凉し　すばらし　せはし　逞し　猛
猛し　正し　樂し　頼もし　つき〳〵し
つゝまし　恭々し　乏し　長々し　名殘惜
し　懐かし　生々し　なまめかし　惜々し
にが〳〵し　にぎ〳〵し　賑はし　憎らし
願はし　妬まし　殘惜し　望まし　捗々し
馬鹿々々し　烈し　恥づかし　甚だし　花
花し　腹立たし　倫々し　久し　等し　美
々し　嫋々し　ふさはし　ほし　貧し　見
苦し　亂りがはし　蒸暑し　むつかし　睦
まじ　空し　宗々し　目ざまし　珍し　め
ゝし　物さびし　物々し　やかまし　優し
狹し　ゆかし　喜ばし　宜し　弱々し　律
々し　麗々し　若々し　煩はし　をかし
をこがまし　惜し　男らし　雄々し　女ら
し

第二節　形容動詞の活用

形容動詞の立てられたのは明治卅年代からの事である。大槻博士の廣日本文典（明治三十年）には、次のやうに說いてある。

○善かりは、形容詞の副詞法の「多く」と動詞の「あり」との約。
○明かなりは、副詞の「明かに」と動詞の「あり」との約。
○寂莫たりは、漢語の「寂莫」と「とあり」（助動詞の「たり」）との約。

三土忠造氏の中等國文典（明治三十一年）には右の三類の語を形容詞として說いてある。さうして芳賀博士の明治文典（明治三十七年）には、右の三類の語に「形容動詞」の名稱をつけて形容詞の中に列してある。

さて形容動詞は、その意味からいへば形容詞に屬すべきもので、その形式からいへばラ行變格の動詞「有り」の活用に等しいものである。それで文法家の中には、形容動詞を動詞の條で說く人もある。本書は、その意味の上から之を形容詞の中に屬させてある。なほ漢文でも之を形容詞として見る方が適當である。例へば、

○人多かれば賑はふ。　人多則賑。
○天氣甚だ靜かなり。　天氣甚靜。
○四邊寂莫たり。　四邊寂莫。

形容詞の活用には命令形がないけれども、文語の形容動詞の活用には、次のやうに命令形がある。

	(語幹の例)	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
文語	多	から(む)	かり	かり	かる	かれ(ば)	かれ
	靜か	なら(む)	なり	なり	なる	なれ(ば)	なれ
	寂莫	たら(む)	たり	たり	たる	たれ(ば)	たれ
口語	多	から(う)	かり(さう)	○	○	けれ(ば)	○
	靜か	だら(う)	に・で	だ	な	なら・なれ(ば)	○
	寂莫	だら(う)	と・で	だ	たる	たれ(ば)	○

次に形容動詞の三種類の諸例をあげておく。

（一）　かりの活用

前に掲げた形容詞の諸例の語幹を語幹として活用させられる。

（二）　なりの活用

稀なり　頻なり　妙なり　艶なり　明白な
り　活潑なり　寒げなり　危げなり　怪し
げなり　樂しげなり　嬉しげなり　親しげ
なり　惜しげなり　淸らなり　平らなり
のどかなり　僅かなり　誇かなり　遙かな
り　細かなり　安らかなり　珍らかなり
荒らかなり　高らかなり　なだらかなり
晴やかなり　花やかなり　若やかなり　た
をやかなり　しなやかなり　のどやかなり

こまやかなり

（三）たりの活用

確たり　燦たり　寂たり　恬たり　漠たり　渺たり　爛たり　瀋酒たり　聒たり　淡たり　淋漓たり　嘲嘵たり　玲瓏たり　鬱鬱たり　窮窕たり　燦爛たり　從容たり　縝綿たり　潑剌たり　朦朧たり　爛漫たり　連綿たり　靄々たり　赫々たり　倪々たり　諤々たり　皎々たり　颯々たり　駿々たり　正々堂々たり　默々たり　洋々たり　碌々たり　累々たり　慨然たり　欣然たり　悄然たり　欣然たり　確乎たり　突如たり　躍如たり　自若たり　蹴若たり　茫茫たり　莞爾たり　忽焉たり　炳焉たり　寂寥たり　滂沱たり　鬱陶たり

第三節　形容詞の音便

動詞の條に述べたやうに、音便の說明には成るべくローマ字を利用するがよい。本節の例について云へば、

（一）イ音便

高き（takaki）—高い（takai）〔kの脫落〕
高し（takashi）—高い（takai）〔sの脫落〕
嶮しき（kewashiki）—嶮しい（kewashii）〔kの脫落〕
嶮し（kewashi）—嶮しい（kewashii）〔iの增音〕
同じき（onaji）—同じい（onaji）〔kの脫落〕——同じ（onaji）〔iの脫落〕

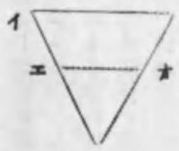
（注意）右のやうに說明したものゝ、その中で、終止形の「高し」「嶮し」が「高い」「嶮しい」と變化したのは、その連體形の音便の「高い」「嶮しい」に併合されたものと見る說の方が宜しからう。

（二）ウ音便

高く（takaku）高う（takau—takō）〔kの脫落と母音の融合〕
嶮しく（kewashiku）—嶮しう（kewashiū）〔kの脫落と母音の融合〕
あらゝしく（arararashiku）—あらゝしう（arararashiū）〔kの脫落と母音の融合〕
めでたく（medetaku）—めでたう（medetau—medetō）〔kの脫落と母音の融合〕
あやしく（ayashiku）—あやしう（ayashiū）〔kの脫落と母音の融合〕
お暑く（oatsuku）—お暑う（oatsuu—oatsū）〔kの脫落と母音の融合〕
お早く（ohayaku）—お早う（ohayau—ohayō）〔kの脫落と母音の融合〕
輕くし（karokushi）—輕んじ（karonji）〔kの脫落とuの鼻音化とshの連濁〕
重くす（omokusu）—重んず（omonzu）〔kの脫落とuの鼻音化とsの連濁〕

（三）撥音便

（注意）右の例の說明で、形容詞の語尾の音便を明らかにすることが出來る。なほ「母音三角」の圖で母音の融合を說明しておく。



（例）カウ（kau）——コー（kō），
ツウ（tsuu）——ツー（tsū），
シウ（shiu）——シュー（shū），

第六章　助動詞

第一節　助動詞の種類

我が國へ西洋文法がまだ傳はらなかつた以前において、早くから先づ研究の必要が感ぜられた國文法の甚だ重要な部分は、卽ちテニヲハ（豆爾乎波）で有つた。テニヲハとは元、漢文和讀のヲコト點から出た名稱で有つて、今いはゆる助詞と助動詞や接尾語を含めて呼んだものである。富士谷成章は、これをその職能から考へて「脚結」と稱へた。「脚結」とは「名」（名詞）や「裝」（動詞と形容詞）の下に添つて種々の意味をあらはす語としてある。後の人はこれを「助辭」とも云つてゐる。テニヲハ卽ち「助辭」の內容は頗る混雜であるので、その內から凡そ語尾の活用する諸語を區別して、これに助動詞の名稱を與へて一種の品詞とし、助動詞及び接尾語以外のテニヲハを舊名の通りに「豆爾乎波」と呼んで一種の品詞としたのは、大槻博士である。（廣日本文典を見よ）。しかしテニヲハの名稱は誤解を生じ易く、且つ品詞の名稱として異樣であり、分類にも異論が有つて、後の人が之を修正して「助詞」と呼ぶことになつた。

助動詞の名稱は英文法の "auxiliary verb" に由來したのであるが、その內容は英文法のそれとは大いに異同があり、我が助動詞は甚だ複雜なものである。我が助動詞は、主として動詞に連續するのであるが、「大臣たり」「六十一なり」「私です」のやうに名詞や數詞や代名詞にも連續し、また「それは善いだらう」「落花、雪の如し」のやうに形容詞や助詞にも連續するのである。かやうに動詞、また形容詞や名詞などに連續し、なほ「知りませぬです」のやうに助動詞が助動詞にも連續して、種々の意味をあらはす詞が助動詞である。

助動詞は複雜であり國文法の甚だ重要な部分であるから、實用文法においても成るだけ合理的に分類して了解し易くあらせたい。まづ、それ〴〵の意味により職能によつて、凡そ次の三大別十一種とし、且つ文語（上方）と口語（下方）との形式の異同を概見しようと思ふ。

相
- 使役＝す、さす、しむ
- 受身＝る、らる、
- 可能＝る、らる、
- 敬語＝す、さす、る、らる、しむ、

時
- 未來＝む、
- 過去
  - つ、ぬ、たり、り、き、けり、けむ、

法
- 打消＝ず、じ、まじ、
- 希望＝たし、
- 指定＝なり、たり、べし、
- 推量
  - けむ、めり、らむ、らし、まし、む、じ、まじ、まし、
- 比喩＝ごとし、

まづ三大別の相と時と法とを說明しよう。相とは動詞のすがたの義で、使役や受身や可能や尊敬のすがたを添へるものである。これは通例は助動詞で言ひあらはすけれども、「動かす」（使役）「見ゆ」（見られるの意で受身又は可能）のやうに動詞そのものに相を含んでゐるものもある。次に時とは動詞や形容動詞のとき（時間關係）の意で、過去や未來や完了や繼續のときを添へるものである。次に法

せる、させる、れる、られる、れる、られる、せる、させる、れる、られる、ます、う、よう、た、たらう、ぬ、ない、まい、たい、だ、です、たらう、やうだ、だらう、らしい、う、よう、まい、やうだ、

とは動詞や形容詞や形容動詞や體言のおきての義で、希望や打消や指定や推量や比喩といふおきてを添へるものである。我が國語と英語などとは組織が相異なつてゐるけれども、今英文法の用語を假りて云へば相とは"voice"であり、時とは"tense"であり、法とは"mood"であると謂つて可からう。

さて右の三大別に屬する十一種の助動詞が用言の活用形に連續するのに一定の秩序がある。いま例を「讀む」といふ動詞に採つて大要を云へば、

	(文語)	(口語)	助動詞の種類名
相	ま(未然形)す	ませる	使役
	ま(同)る	まれる	受身
	ま(同)る	まれる	可能
	ま(同)る	まれる	敬語
	ま(同)む	まう	未來
時	み(連用形)たり	ん(み)だ	過去
	ま(未然形)ず	まぬ	打消
	み(連用形)たし	みたい	希望
	む(連體形)なり	むのだ	指定
	む(終止形)らし	むらしい	推量
	む(連體形)ごとし	むやうだ	比喩

讀

(注意一)右の外に「詠歎(感動)のなり」を一種の助動詞として立てる說もある。そのなりは動詞の終止形(ラ變には連體形)に連續するのであるが、それは「指定のなり」の變用と見て一種の助動詞としない說もある。どの說にしてもその「なり」は法の助動詞とすべきである。

(注意二)「ごとし」を比喩の助動詞としないで形容詞と見なす說もある。しかし從來の普通の說き方によつて助動詞の一種とする。

つぎに文語と口語とを比較して助動詞の變遷を見るに、大體において口語の方が簡になつてゐる。中にも過去の助動詞の「つ、ぬ、たり、り、き、けり」(文語)は、「たり」の後身である「た」(口語)に併合される勢となり、推量の助動詞の如きも口語の方が減じてゐる。けれども未來の助動詞が、口語では「う、よう」の二つに分れ、打消の助動詞には二種の口語「ぬ、ない」が並び行はれ、敬語の助動詞にはの新しい發達が見えてゐる。即ち、全體としての割合は文語に對して口語は凡そ十分の六の簡である。助動詞相互の組合せの割合は更に簡になるのである。

また助動詞の活用即ち形式は次の三種類に分けられる。(實例は代表的のものを擧げる)

一、動詞の活用に似たもの　(文語に十三、口語に　四)

二、形容詞の活用に似たもの　(文語に　五、口語に　三)

三、特殊の活用をするもの　(文語に　七、口語に十一)

合計　(文語に二五、口語に十八)

右の內わけ

〔使役〕(文語)す下二　さす下二　しむ下二

(口語)せる下一　させる下一

〔受身〕(文語)る下二　らる下二　(口語)れる下一　られる下一

〔可能〕受身の轉用(文語も口語も)

〔敬語〕使役と受身との轉用(文語も口語も)

(口語)ます特殊

〔過去〕(文語)たり變ラ　つ下二　ぬ變ナ　り變ラ　き特殊　けり變ラ

(口語)た特殊

〔未來〕(文語)む特殊　(口語)う特殊　よう特殊

〔希望〕(文語)たし副詞的　(口語)たい副詞的

〔打消〕(文語)ず特殊　じ特殊　まじ副詞的　ぬ特殊　ない副詞的　まい特殊

(口語)ぬ特殊　ない副詞的

〔指定〕(文語)なり變ラ　たり變ラ　べし副詞的

(口語)だ特殊　です特殊

〔推量〕(文語)けむ特殊　めり變ラ　らむ特殊　らし副詞的　まし特殊　(口語)たらう特殊　だらう特殊　らしい副詞的

〔比喩〕(文語)ごとし副詞的(口語)やうだ特殊

第二節　使役の助動詞

使役の助動詞とは他に動作をさせる意のもので、文語には「す、さす、しむ」の三種があり、口語には「す、さす」の變じた「せる、させる」が存し「しむ」がすたれた。その活用表は本書に掲げてある。「す」は四段とナ變とラ變との未然形に、「せる」は四段の未然形に「さす」は上一と下一と上二と下二とカ變とサ變との未然形に、「させる」は上一と下一とカ變とサ變との未然形に、「しむ」は諸活用の未然形に連續する。

使役の助動詞の前に來る動詞の客語(補足語の方)につく助詞は、「に」「を」又は「を」である。例へば、

○母、子に乳を飲ます。

○母、子を(子に)早く起きさす。

○頼朝、二弟をして義仲を討たしむ。

(注意)「乳を」「義仲を」といふ客語(目的語の方)は「飲ま(飲む)」「討た(討つ)」に

助動詞と助動詞とが連續する場合には、本書第六章第十四節に示す順序が追ふのである。依つて本書の助動詞解說の順序も之に從つてある。

かゝり、「子に」「子を」「二弟をして」といふ客語(補足語の方)は「飲ます」「起きさす」「討たしむ」にかゝる。

文法上の許容と誤謬など

文語において「得しむ」といふべき場合においては許容されてある。但し「射しむ」「見しむ」といふことは、現代の文語において「得せしむ」といふことは許容されてない。

サ變の動詞から「さす」に連續して「手習せさす」「周旋せさす」といふべき場合に「せ」を略して「手習さす」「周旋さす」といふ習慣のあるものは、現代の文語においては許容されてゐる。さうして口語ではサ變の動詞「せ」を略して「手習させる」「周旋させる」といふのが正則である。

西南地方などの方言に、使役の助動詞に行四段活用のものを用ひて、

未然形	(讀ま)さ(ぬ)	
連用形	し(た)	
終止形	す(こと)	
連體形	す(こと)	
假定形	せ(ば)	
命令形	せ	

といふのは正すべきである。

四段活用の動詞は、文語は「す」に、口語は「せる」につゞけるべきのに、文語の「さす」又は口語の「させる」につゞけて、「讀まさす」又は「讀まさせる」などといふのは誤である。

上一段活用の「着る」「似る」「見る」を使役にすれば「着さす」「似さす」「見さす」である。しかし特に「着す」「似す」「見す」とも云ふ場合がある。後者は前者よりも使役の意味が强い樣である。

サ行四段活用の動詞には使役の意を含んだものがある。これを使役の助動詞をもつものと混同してはならぬ。例へば、

心を驚す。　鈴を鳴す。

國を亂す　(「亂れさす」の意)

サ行下二段活用の動詞に使役の意を含んだものがある。それが一つの動詞を構成してゐ

るか否かは、辭書によつて判斷するのが近道である。サ行下二段活用の動詞の例は、

（馬を）驍す。（文を）載す。（兵を）伏す。（事を）任す。（身を）寄す。（水を）混す。など。

受身の使役、例へば「父は、子を母に抱かれさす。」「我は、不注意にて金魚を猫に食はれしむ。」などとも言へば言はれるわけであるが、實際では受身の助動詞を省いて、「父は子を母に抱かす。」「我は不注意にて金魚を猫に食はしむ。」などと言ふのが通例である。

第三節　受身の助動詞

受身の助動詞とは他から動作をされる意のもので、文語には「る・らる」の二種があり、口語には文語から變じた「れる、られる」の二種がある。その活用表は本書に掲げてある。「る」は四段とナ變とラ變との未然形に、「れる」は四段の未然形に、「らる」は上一と下一と上二と下二とカ變とサ變との未然形に「られる」は上一と下一とカ變とサ變との未然形に連續する。

受身の助動詞の前に來る動詞の客語（補足語の方）につく助詞は「に、より、から」である。例へば、

○人、馬に蹴らる。
○善人、惡人より誹らる。
○彼は被害者から訴へられた。

（注意一）　非情の物が受身となるのは英語などに通例の事で、例へば「コロンブスはアメリカを發見した。」を「アメリカはコロンブスに發見された。」とも云ひ、「私は彼人から英語を教へられた。」「英語が私へ彼人から教へられた。」とも云ふのである。我が國語では、「私は盜人に金を取られた。」「盜人が警官に捕縛された。」などのやうに、有情の物が餘儀なく他から動作を受ける場合に受身を用ひるのが通例である。しかし非情の物の間において「木が風に吹き倒された。」などと云ふことも無いではない。現代では西洋語の感化を受けて「沙翁の劇曲が坪内博士によつて飜譯された。」「坪内博士によつて飜譯された沙翁の劇曲」などといふことが流行するに至つた。

（注意二）　受身になる動作は他動的であるから、受身の助動詞が他動詞につくのは當然の事で、英語などの他動詞の要件とする所である。しかし我が國語の受身の助動詞は、それのみならず自動詞にもつくことが出來る。例へば「母が子に泣かれる。」「親が子に死なれた。」「私は演說中に彌次馬に驚かれた。」などの類である。これは、「子が泣く。」「子が死んだ。」「彌次馬が驚いだ。」などといふ自動詞の影響の受身をあらはす習慣が我が國語には存在してゐるからである。

文法上の許容

サ變の動詞から「らる」に連續して「罪せらる」「解釋せらる」といふべき場合に、「罪さる」「解釋さる」といふ習慣のあるものは、現代の文語においては許容されてゐる。さうして口語では「せられる」を「される」と約して「罪される」「解釋される」といふのが正則である。

使役と受身との併用

「生徒、先生に書を讀ませ（使役）らる（受身）」「父の教訓によつて正行は櫻井驛より郷里の母の許へ歸らせられたり。」のやうに、使役と受身と相重なる助動詞を特に被役の助動詞といふ。

右は使役と受身と相重なるのであるが、時としては「我は不注意にて金魚を猫に食はれ（受身）しむ（使役）」のやうに、受身と使役と相重なる場合がある。かやうな場合には、前にも述べたやうに、受身の「れ」を略して「食はしむ」と單に使役に云ふのが通例である。

第四節　可能の助動詞

可能の助動詞とは有意または自然に爲し得られる意のもので、受身の助動詞と同樣に、文語には「る、らる」の二種があり、口語には「れる、られる」の二種がある。その活用表も受身の助動詞の活用表と同樣であるが、たゞその中の命令形を缺いてゐる。それは可能の助動詞の性質が然らしめるのである。

可能の助動詞は、「人類は立ちて歩まる」「行先が案じられる。」のやうに客語を要しない場合がある。これは受身の助動詞と異なる點の一つである。しかし「誰でもこの問題に答へられる。」「あの子は普通の小學校に行かれない。」のやうに客語を要する場合もある。その客語につく助詞は通例「に」である。

「昔の事が思はれる。」「新玉の年立ちかへる朝より待たるゝものは鶯のこゑ。」（素性法師）といふやうに自發の意を含むものも可能の助動詞である。別にこれを一種とするにも及ばない。

上古の可能の助動詞にヤ行下二段活用の、「ゆ」がある。例へば「昔しのばゆ。」「人に厭はゆ。」の如きで、「昔しのばる。」「人に厭はる。」と同意である。現代語にも「有らゆる。」「謂はゆる。」が殘つてゐる。その「ゆる」は連體形である。

ヤ行下二段活用の動詞には可能の意を含んだものがある。例へば、

耳聞ゆ（耳聞かゆ、耳聞かる、の意）
目見ゆ（目見らゆ、目見らる、の意）

ラ行四段活用の動詞にも可能の意を含んだものがある。例へば、

命が助かる（命が助けらるの意）
霜に染まる（霜に染めらるの意）
天より授かる（天より授けらるの意）
試驗が受かる（試驗が受けらるの意）

四段活用が下一段活用に轉じた動詞は、そのまゝ可能の意をあらはす。例へば、

注意すれば聞ける。（注意すれば聞かれるの意）
一時間に二里は走れる。（一時間に二里は走られるの意）

文字が讀めない。（文字が讀まれないの意）

その他に可能をあらはす例、

一、「讀むことを得。」（得は動詞）または「讀み得る」（英語の助動詞 be の譯語に用ひる例）
二、「得讀めぬ字を書く。」（讀むことを得ぬ字を書くの意、口語では「えう讀めぬ字を書く」と云ふ。）
三、「讀むこと能はず。」（四段活用の動詞であるが、能ふと肯定に用ひるのは古來の例に見えない。近來は西洋語の直譯に「讀み能ふ」などと用ひてゐる。）
四、「鐵をも斷つべし。」（指定の助動詞の一つであるが、こゝは「鐵でも斷たれる」と可能の意に轉用してある）。唐詩に「秋扉不レ可レ聞」とある「聞くべからず」は、「聞くに堪へず」卽ち「聞いてゐられないほど哀しい」の意で、可能の「べし」の打消である。

第五節　敬語の助動詞

敬語の助動詞とは他に對して尊敬をあらはす意のもので、使役の助動詞と可能の助動詞とを轉用したものである。使役すること又は可能なることが、轉じて尊敬となつたのである。その文語には「す」と「さす」と「る」と「らる」と「しむ」との五種が、單獨もしくは複合で用ひられ、口語には「れる」と「られる」と「せる」と「させる」との四種が、單獨もしくは複合で用ひられる。例へば、

（文語）

殿下、侍臣に宣はす。
姫君、琴を彈ぜさす。
祖父は書畫を好まる。
母上は我等を誡めらる。
二人共に政を執らしめ給ふ。
君も泣かれ給ふ。
東宮殿下、皇位を繼がしめらる。
主上、政を統べさせらる。

（口語）

殿下が侍臣に宣はれる。
姫君が琴を彈ぜられる。
祖父は書畫を好まれる。
母上は我等を誡められる。
二人が共に政を執らせられる。
君も泣かせられる。
東宮殿下が皇位を繼がせられる。
主上が政を統べさせられる。

口語では單獨に使役の助動詞を敬語の助動詞に轉用することはなくなり、たゞ複合した「せられる」「させられる」が殘存してゐる。

以上の敬語の助動詞の活用表は、使役並に可能の助動詞の活用表と同樣である。複合した敬語の活用は下部の敬語の活用と同樣である。

上古の敬語は主としてサ行四段活用の「す」で、これは後世の下二段活用の「す」に當る。

未然形	さ（ば）せ（ば）
連用形	し　せ
終止形	す　す
連體形	す　する
已然形	せ（ば）すれ（ば）
命令形	せ　せ（よ）

（上古の例）「魚乞はさば、」「國作らしし大神」、「弓を執らす」、「初國しらす天皇」、「名宣らせ」など

「卽位したまふ」「行幸せしめたまふ」などの「たまふ」は、四段活用の動詞が轉用された文語の助動詞で、口語にはその幾分かが殘存してゐる。この「たまふ」を口語では「御卽位になる」「行幸あらせられる」などといひかへるのが通例である。

口語の敬語の助動詞には、「御覽になる」「御覽なさる」「御覽くださる」「およみなさる」「およみくださる」などといふ言ひ方もある。この場合には、尊敬の接頭語の「御」又は「お」を用ひた名詞又は動詞の連用形を受ける。この三つの轉用の助動詞の活用表は本書に示す通りである。この三語を分解すれば、

になる＝に（助詞）成る（四段活用の動詞）
なさる＝爲さ（四段活用の動詞）る（受身の助動詞）
くださる＝下さ（四段活用の動詞）る（受身の助動詞）

なほ文語及び口語の助動詞の中に、「遊ばす」といふ四段活用の敬語動詞の轉用と、その轉用に文語では「る」、口語では「れる」といふ受身の助動詞の複合した「遊ばさる」「遊ばされる」もある。どれも口語の方は重に上品な婦人用の言葉となつてゐる。

「今日出發致します」などといふ「ます」は、動詞の連用形に連續し、他に對して丁寧に言ふための口語の助動詞で、次のやうに兩樣の活用があるが、（甲）の方を標準とすべきである。

未然形　連用形　終止形　連體形　已然形　命令形
（甲）ませ　まし　ます　ます　ますれ　ませ
（乙）ませ　まし　まする　まする　ますれ　ませ

（注意）未然形の用例は「有りませう」「有りませぬ」、命令形の用例は「下さいませ」「下さいまし」である。「有りましない」「有りませない」といふのは方言。

文語には、敬語の動詞の「侍り」（ラ行變格）や「候ふ」（四段活用）が敬語の助動詞に轉用されたものがある。「侍り」は中古の對話の敬語に用ひられ、「候ふ」は鎌倉時代の對話の敬語に用ひられて、その後も謂はゆる「候文體」に用ひられてゐるものである。「侍り」や「候ふ」は「居ます」又は「ございます」又は單に「ます」の意味に用ひられる。

餘說

一、名詞は「上京す」（口語では「上京する」）「行幸す」（口語では「行幸する」）のやうにサ行變格の動詞に活用させるのが通則であるのに、敬つて「上京あり」「行幸なる」（口語では「上京になる」「行幸になる」）とラ行變格の動詞又はラ行四段の「なる」に活用させるときには、その「あり」「なる」「になる」は敬語助動詞の役目をする。

二、口語では、「御機嫌よく入らせられる」などの「入らせられる」を普便で「いらつしやる」と言ひ、これをラ行四段活用とする。また「受けさせられる」などの「させられる」を普便で「さつしやる」と言ひ、これもラ行四段活用とする。なほ「仰せられる」の普便の「おつしやる」もラ行四段活用とする。

次に△印を附けた語は方言であるから、正すべきである。

○「入らつしやる」を「入らつしる」又は「入らつせる」
○「受けさつしやる」を「受けさつしる」又は「受けさつせる」
○「お出でなさる」を「お出でなされる」「お出でなはる」「お出でやはる」又は「お出でる」
○「御覽くださる」を「御覽くだされる」又は「御覽くだはる」
○「待つてください」を「待つてくだはい」「待つてくんさい」又單「待つてたも」（たまへの訛り）

第六節　時の助動詞（過去）

過去の時の助動詞とは時の過ぎ去つた意をあらはすもので、文語には「たり」、「つ」、「ぬ」、「り」、「き」、「けり」の六種があり、口語には「た」の一種がある。その活用表は本書に揭げてある。過去の助動詞は動詞の連用形に連續するのが通例だが、「り」だけは四段活用の已然形及びサ變の未然形に連續する。

過去の時を更に二種とすれば、すなはち過去と完了となる。その過去とは、昔、男ありけり。先年余は京都に遊びき。

大正十二年九月一日關東の大地震ありき。

の如く廣く時の過去つた意を表し、完了とは、

花咲きたり。今歸りつ。日暮れぬ。時機早や去れり。

の如く只今又は其の時に動作の完了した意を表す。さうして通例「き、けり」の二種は過去を表し、「たり、つ、ぬ、り」の四種は完了または過去を表す。日語の「た」は文語の「たり」の變形したもので、場合によつて過去または完了を表す。完了と過去との助動詞の相互の關係と區別とについては、本書第十五章に說く。

本節の活用表の中で（　）をつけた活用形は、現代の文語には通例用ひないけれども、古文には左の如き用例がある。

（古今集）梅が香を袖にうつしてとゞめてば、春は過ぐともかたみならまし。（「とゞめてば」は「とめておいたなら」の意で「つ」の未然形）

（古今集）久方の天の川原の渡し守、君わたりなば梶かくしてよ。（「かくしてよ」は「かくしておいてくれよ」の意で「つ」の命令形）

（源氏物語の明石）はや舟出して此の浦去りね。（「去りね」は「去つてしまへ」の意で「ぬ」の命令形）

（萬葉集）我し知れらば知らずともよし。（「知れらば」は「知つてゐるなら」の意で「り」の未然形）

（古今集の序）やまと歌は人の心をたねとして萬づの言の葉とぞなれりける。（「なれりける」は「なつたのだわい」の意で「り」の連用形）

（萬葉集）梅の花咲きたる園の青柳は、かづらにすべくなりにけらずや。（「なりにけらずや」は「なつたぢやないか」の意で「けり」の未然形）

「つ」の連用形の「て」は「言ひてき」「言ひてけり」「屋根をふかせて」などのやうに動詞または助動詞に連なるのであるが、その用ひ方が特に發達して、遂に接續の職能をする一種の助詞として用ひられてゐる。例へば、

（イ）形容詞または形容詞的活用の助動詞の連用形をうけて「色こくて」「しろくてあたらし」「かけたる如くて」「なりぬべくて」などと用ひてある。

（ロ）副詞をうけて「かくても在られけるよ」「かくては得すぐさじ」「などてその人とは知らせじ」などと用ひてある。

（ハ）助詞をうけて「京の人にてあり」「法師にてあれば」「子にてもあらず」「月を見るとて」「花見にとて」「都にして過ひける人」「二弟をして義仲を討たしむ」などと用ひてある。

次に「き、し、しか」の活用は、動詞の連用形をうける定めであるが、カ變とサ變とには例外がある。卽ち、

○カ變は「こし、こしか」「きし、きしか」の例で、「來」の未然形でも連用形でもうけられる。（「こき、きき」の例はない）

○サ變は「しき」「せし、せしか」の例で、「爲」の連用形でも未然形でもうけられる（「せき」「しし、ししか」の例はない）

さてサ行四段活用の動詞をその連用形から助動詞の「し」「しか」に連れて「暮しし時」「暮しかば」「過しし時」「過しかば」などといふべき場合を、その動詞の已然形から連れて「暮せし時」「暮せしかば」「過せし時」「暮せしかば」などといふことは、現代の文語においては許容させてゐる。なほ一二例をあげると、

唯一遍の通告を爲せしに止まれり。

攻撃開始より陷落まで僅に五箇月を費せしのみ。

次に過去の助動詞「き」の終止形の代りに連體形の「し」を用ひて、「火災は二時間に亙りて鎭火せざりし」などといふことは、現代の文語には許容されてゐる。

中古語の「たり、つ、ぬ、り、」「き、けり」

第七節　時の助動詞（未來）

未來の時の助動詞とは時のまだ來ない意をあらはすもので、文語には「む」（音便で「ん」とも書く）の一種があり、口語には「う、よう」の二種がある。その活用表は本書に揭げてある。未來の助動詞はすべて動詞または助動詞の未然形に連續する。但し「う」は四段活用の未然形に、「よう」は四段活用以外の未然形に連續する。

文語の未來の「む」は、終止形には「あとなたづれむ」、連體形には「かへらむ人」、已然語には「つらしと思ほめど」などの例がある。

未來の意の「む」は、轉じて「今は吉野山の花盛りならむ」のやうに推量の意にも用ひられる。

口語の未來の「う、よう」は「讀まう」「起きよう」「受けよう」「來よう」「しよう」の例に云ふのが標準語である。しかし西部地方の方言中には、すべて「讀まう」「起きう」「受けう」「來う」「せう」の例に云ふ所がある。

右に述べた過去や未來に對して現在の時は如何して示すかと云へば、それは「花咲く」「花を咲かす」「憂有り」「憂無し」などのやうに用言の終止形を以てあらはす。

しかしながら終止形は必ずしも現在の時をあらはすものでは無く、不定時のもの、卽ちの時の助動詞が後世になるほど單純化されて今は「た」の一助詞を以て用を辨じてゐる。しかし關東などの方言には「き、けり」の殘影を存してゐる。例へば、

（中古語）行きたりき　来たりけり　（關東方言）行ったつけ　来たつけ

第八節　希望の助動詞

希望の助動詞とは物事なれがひのぞむ意のもので、通例、文語には「たし」の一種があり、口語には「たい」の一種がある。その活用は第一種の形容詞に等しく、その活用表は本書に揭げてある。

連用形の「たく」は音便で「おめでたうござ

事物の性質や眞理や原則や理法のやうに過去にも現在にも未來にも通ずるものをも、用言の終止形を以てあらはす。例へば「雪は白し。」「生物は生死す。」「二と三との和は五なり。」などである。また歷史上の事實をも、現在の時と同じ樣に、「明治廿二年大日本帝國憲法を發布し給ふ。」のやうに、用言の終止形を以てあらはす。これを「歷史的現在」（historical present）といふ。なほ左に不定時及び歷史的現在の諸例を記す。

（一）夏は暑し、冬は寒し。
（二）帶には短し、たすきには長し。
（三）正直の頭に神やどる。
（四）地球は太陽を中心として廻る。
（五）余は毎朝早く起きる。
（六）一を三で割ればその小數は無限である。
（七）大日本は神國なり。天祖始めて基を開き、日の神永く統を垂れ給ふ。（正統記）
（八）天智天皇は大津の宮にまします。

います」の例のやうに「たう」とも云ひ、また「あり」に結びついて「行きたかつたからう」「行きたかつた」などとも云ふ。

「たし」および「たい」といふ希望の助動詞は近古以來發達したもので、中古には「まほし」といふ語が用ひられた。「まほし」は「まくほし」の變形した熟語で、第二種の形容詞の活用に等しい活用をする。「まほし」は次の例のやうに、動詞や助動詞の未然形に連續する。

人は斯く有らまほし。　早く行かせまほし。　その人ぞ尋ねきかまほし。

方言に「行きともない」「死にともない」などと云ふのは「行きたうもない」「死にたうもない」などの約されたのである。

第九節　打消の助動詞

打消の助動詞とは反面から說いて打消す意のもので、文語には「ず、じ、まじ」の三種があり、口語には「ぬ、ない、まい」の三種がある。この六種の活用形及び動詞との連續は本書に掲げてある。

文語の「ず」は動詞の「あり」と結合して「白露の消えざらば」(未然形)「知られざりけり」(連用形)「咲かざる花」(連體形)「知らざれば」(已然形)「知つて知らざれ」(命令形)の如き例がある。終止形は用ひられてない。

「じ」は「植ゑじ」「忘れじ」のやうに終止形を用ひることが通例であり、「負けじ魂」「みだりに人を寄せじものをや」のやうに連體形を用ひることもある。「じ」は「ず」と「まじ」との中間に位するから、口語では「じ」を「ぬ」又は「まい」と言ふ。

「ない」は形容詞の「無い」の發展した助動詞であり、日本アルプス山系以東で普通に行はれてゐる。東京人などの中に之を「れい」といふのは標準語とすべきでない。

「まい」は動詞の「有る」の未然形に連續する口語の動詞の活用形の標準は、

○四段は「讀む」「死ぬ」「有る」の例で終止形。
これを「讀まい」「死なまい」「有らまい」の例で未然形に言ふのは方言。

○上一段や下一段やカ變は「起きまい」「受けまい」「こまい」の例で未然形。
これを「起きるまい」「受けるまい」「くるまい」の例で終止形に言ふのは方言。

○サ變は「しまい」の例で「し」の未然形。
これを「せまい」と「せ」の未然形に言ひ、又は「するまい」と終止形に言ふのは方言。

第十節　指定の助動詞

指定の助動詞とは物事を指し定める意のもので、文語には「なり」と「たり」と「べし」の三種があり、口語には「だ」があるのみである。「だ」を丁寧にいふ場合には「です」などを用ひる。

「べし」を除く外の指定の助動詞は、「勇士なり」「大將たり」「勇士だ」「大將だ」のやうに體言に連なる特徴がある。「なり」は「天の惠みを受くるなり」のやうに用言の連體形に連なり、「この一事のみなり」のやうに助詞にも連なる。「だ」の類は「受けるのだ」「受けるのです」のやうに用言の連體形との間に助詞「の」をはさみ、また「この一事ばかりだ」「この一事ばかりです」のやうに助詞に連なる。

文語の指定の助動詞「なり」と相似た感動

(詠歎)の助動詞「なり」がある。指定の「なり」は動詞や形容詞や助動詞の連體形に連續して語尾がラ變の如く活用し、感動の「なり」は動詞や助動詞の終止形(但しラ變は連體形)に連續して語尾が活用しない。口語譯を冠らせて、指定の「なり」を「ダなり」ともいひ感動の「なり」を「ワイなり」ともいふ。「ワイなり」は蓋し「ダなり」の變じたものと考へられるから、この節に附記してある。

指定の助動詞は、「だ」の代りに「である」ともいひ、「です」を更に丁寧にいつて「でございます」ともいふ。關西地方で「だ」を「ぢや」又は「や」といひ、「です」を「どす」又は「だす」といふのは方言である。標準語の「ございます」の系統に次の諸例の方言がある。

ございます——ございやす——おざりいす
ございます——ございあす——ございえす——ございす
ございます(標準語)
ございます——ごんす——ごす
ございます——ごあんす(ごあす、がんす、がす、あんす、あす)
ございます——ごいす(げいす)——す
ございます——ございす(ございます、がいます、ざいます)——ざます

「べし」は文語の助動詞の一種である。平安朝語において「べき」の音便の「べい」は、「靜かなるべい事」「さもあべい(あるべきの音便)事」などと用ひられ、「べく」の音便の「べう」は「車より落ちぬべう惑ひたまへば」「言ひかへすべうもあらず」などと用ひられて指定の意であつたが、今も關東や東北地方の方言において、未來や推量に「讀むべい」「起きべい」「拾てべい」「こべい」「すべい」「行くべいか」「すべいもんでもない」などと用ひてゐる。標準語においては「べい」を用ひないが、時として文語の「べき」や「べく」を口語の中に慣用することがある。例へば、

斯うあるべきはずである。
死ぬべき時に、死なれば、死にまさる恥がある
成るべく早く來い。
どうぞ然るべく頼みます。

もはや斷行すべく適當と考へる。(歐文直譯的の言ひ方で、文士などの間に行はれてゐる)

「べし」は心に推し量つて指定する意の助動詞であるが、更に次の如く未來や推量や可能や適當や義務や命令などの意に轉用される。

(文　語)
(未來)余は明日出發すべし。
(推量)彼は行かざるべし。
(可能)鐵をも斷つべし。
(適當)忠臣の鑑と謂ふべし。
(義務)國民は國法を守るべし。
(命令)警察署に出頭すべし。

(口　語)
余は明日出發しよう。
彼は行かないだらう。
然でも斷たれる。
忠臣の鑑と謂つてよい。

國民は國法を守らねばならぬ。
警察署に出頭せよ。

〔注意〕「よう」は未來の助動詞。「だらう」は推量の助動詞。「れる」は可能の助動詞。「よい」は形容詞で、「謂つて」につながる連語。「ねばならぬ」は助動詞的の役をする慣用の連語。「せよ」は動詞と命令の助詞とである。

「べく」は「あり」と結合して、未然形の「べからず」「べからむ」や、連用形の「べかりき」「べかりけり」や、連體形の「べからむ」などとなる。未然形の「べからむ」は變じて「べけむ」となる。連體形の「べからむ」は用ひたことが稀である。

中古の語に「べらなり」又は「べきやうなり」といふのが有つて、例へば、

秋の夜の月の光しあかければ、くらぶの山も越えぬべらなり。（古今集）〔越えられようと思はれるの意〕

また古代の語に「べみ」といふのが有つて、「べくして」又は「べきによつて」の意を示す。例へば、

さほ山の柞のもみぢ散りぬべみ、夜さへ見よとてらす月かげ（古今集）〔散らうとするによつての意〕

第十一節　推量の助動詞

推量の助動詞とは物事をおしはかる意のもので、通例文語には「けむ、めり、らし、らむ、まし」などがあり、口語には「たらう、やうだ、らしい、だらう」などがある。その活用は、ラ變の「めり」形容詞的の「らし」「らしい」の外は特殊であり、その活用表は本書に掲げてある。なほ未來の「む」（文語）「う、よう」（口語）や指定の「べし」（文語）「う、よう」（口語）は推量に轉用され、打消の「じ、まじ」（文語）「まい」（口語）は推量を兼ねてゐる。

「けむ」（文語）と「たらう」（口語）を用ひて、

鐵砲は何時頃日本に渡りけむ。（鐵砲は何時頃日本に渡つたらう）

などといふ。これは鐵砲が過去において日本に渡つたことは事實であるか、たゞその年代の不明である場合に推量をするのである。また「けむ」を「しならむ」のいふ複合の助動詞に代へて「鐵砲は何時頃日本に渡りしならむ」とも近代には言つてゐる。

しかし過去の假定には「まし」の已然形を用ひて、

凡そ保元平治よりこの方のみだりがはしさに頼朝といふ人もなく泰時といふ者も無からましかば、日本國の人民いかゞなりなましし（神皇正統記）

もし義貞早速に下向せられたらましかば、一人も降參せぬ者はあるまじかりしを（太平記）

などといふ。なほ過去の假定を近代には、「無かりしならば……いかがなりしならむ」「たりしならば……あらざりしならむを」などと言つてゐる。

現在又は不定時の推量には「めり、らし、らむ、む、べし」（文語）、「やうだ、らしい、だらう、う、よう」（口語）などを用ひてゐるが、その間に互に意味の異同がある。

「めり」は現に物事がさう見えると推定する意で、實はさうと言ひ得るのを婉曲にひかへて言ふ古風な語である。例へば、

立田川もみぢみだれて流るめり、渡らば錦なかやたえなむ。（古今集）〔流れるやうであるの意〕

願はしかるべき事こそ多かめれ（徒然草）〔多いやうだの意〕

「らし」は物事をさういふらしいと聯想的に又は傍觀的に認める意であり、多少の疑を含むものである。例へば、

この川にもみぢば流る奥山の雪げの水ぞ今まさるらし。（古今集）

松の音に風のしらべをまかせては立田姫こそ秋はひくらし。（後撰集）

ふる雪はかつぞ消ぬらし足びきの山のたぎつせ音まさるなり。（古今集）

「らむ」は物事をさうだらうと想像的に考へる意で、前條の「らし」に似て居り、多少の疑を含むものである。例へば、

久方の光のどけき春の日に靜心なく花のちるらむ。（古今集）

ほとゝぎすの蔭にかくるらむとおもふになかし。（枕の草子）

「む」（口語では「う」又は「よう」）は未來の意から轉じて推量の意に用ひられ、「べし」は指定して推量する意に用ひられ、さうして「まし」は「む」より推量の意が強くて、通例は假定をあらはす。例へば、

少納言よ、香爐峯の雪はいかならむと仰せられければ、（枕の草子）〔どうであらうと推量して仰せられる意〕

この歌もかくの如くなるべし。（古今集の序）〔かやうなものであらうの意〕

世の中にたえて櫻のなかりせば、春の心はのどけからまし。（古今集）〔「のどけからむ」のやうな只の推量でなくて假定の推量である〕

肯定の推量と之に對する否定（打消）の推量との關係は、次の對照によつて知られる。

（肯　定）

雨ふりき。（過去）（雨ガフツタ）
雨ふりけむ。（過去の推量）（雨ガフツタラウ）
雨ふる。（現在）（雨ガフル）
雨ふらむ。（未來の推量）（雨ガフラウ）
雨ふらまし。（假定の推量）（雨ガフラウ）
雨ふるべし。（必然の推量）（雨ガフルハズダ）
雨ふるらし。（間接の推量）（雨ガフルラシイ）
雨ふるらむ。（想像の推量）（雨ガフルダラウ）
雨ふるめり。（直觀の推量）（雨ガフルヤウダ）

（否　定）

雨ふらざりき。（雨ガフラナカツタ）
雨ふらざりけむ。（雨ガフラナカツタラウ）
雨ふらず。（雨ガフラナイ）
雨ふらじ。（雨ガフルマイ）
雨ふるまじ。（雨ガフルマイ）
雨ふらさるべし。（雨ガフラナイハズダ）
雨ふらざるらし。（雨ガフラナイラシイ）
雨ふらざらむ。（雨ガフラナイダラウ）
雨ふらざるめり。（雨ガフラナイヤウダ）

（注意）中古語では「ざるめり」の音を變じて「ざんめり」又は「ざめり」といふ。

第十二節　比喩の助動詞

比喩の助動詞とは他の物事にたとへる意のもので、文語には「ごとし」の一種があり、口語には「やうだ」の一種がある。「ごとし」の活用は形容詞的で「やうだ」の活用は特殊で

ある。その活用表は本書に掲げてある。

「ごとし」も「やうだ」も、助詞「の」をはさんで間接に體言に連なり、又直接に用言の連體形に連なる。但し、「ごとし」は助詞「が」をはさんで間接に用言の連體形に連ることが多い。例へば、

彈丸雨の如し。（文語）
月日流るゝが如し。
月日流るゝが如し。
魚に水なきが如し。
莽石を並べたるが如し。
彈丸が雨のやうだ。（口語）
月日は流れるやうだ。
月日は流れるやうだ。
魚に水がないやうだ。
莽石を並べたやうだ。

「ごとし」の語幹の「ごと」は次のやうに用ひられた例がある。

秋の野の錦のごと〈く〉も見ゆるかな。（後撰集）
おほせのごと〈く〉奉らむ（源氏物語）
名のたつは、吉野の川のたぎつせのごと〈し〉（古今集）

「ごとし」が形容詞として形容詞の中に列し、これを比喩の助動詞とはしない說き方もある。本書は從來の普通の文法書の大勢に從つて、これを比喩の助動詞としてある。「比喩」は「比況」ともいひ、たとへといふことである。

第十三節　動詞と助動詞との連續の總括

動詞と助動詞との連續の二つの表、卽ち文語の表と口語の表とを比較して連續の相違ある點を次に示す。

一、文語の「む」はすべての動詞の未然形につらなり、口語の「う」は四段の動詞の未然形につらなる。「よう」はその他の動詞の未然形につらなる。

二、動詞の連用形につらなる文語の「たし」は口語の「たい」となり、文語の「けむ」は口語の「つ、ぬ、たり、き、けり」は口語では單に「た」となる。

三、文語の「まじ、べし、らし、らむ」は變

第十四節　助動詞と助動詞との連續（一）

助動詞は動詞につらなるばかりでなく他の助動詞にもつらなる。助動詞が幾つもつらなる場合には、芳賀矢一博士が曾て國語聯語一覽において說かれた所を參酌するに、およそ次の順序によるのである。

（動詞）使役、受身、可能、敬語、希望、打消、時、指定、推量、比喩

（例）
陛下大學に臨幸あらせられ（敬語）たり（時の過去）
花も咲きたる（時）らし（推量）
その事有りし（時）なる（指定）べし（推量）

なほ動詞「あり」の結合した助動詞「ざり、たかり、べかり」や指定の助動詞や比喩または推量の「らし」のやうに形容詞的語尾をもつ助動詞を用ひた場合には、前に示した順序を後に戻ることもある。

（例）
有らざら（やら）（打消）しめ（使役）たり（時）
捨つべからぬ（べく）（指定）ず（打消）
行きたかり（たく）（希望）き（時）
鯨は魚類なら（指定）ず（打消）
臣も臣たら（指定）ず（打消）
世は亂麻の如く（比喩）なる（指定）べし（推量）

動詞の活用に似た活用をする助動詞が下の助動詞につらなる活用形は、その動詞が下の助動詞につらなる場合の活用形に等しい。その詳細は本書の附錄の第六表と第五表とを參照あれ。

形容詞的活用の助動詞の「べし、たし」はその活用形「べく、たく」と動詞の「あり」と結合して後に「ず」や「む」につらなる。指定の助動詞の「なり」は、形容詞的活用の助動詞の連體形「べき、たき、まじき、ごとき」からつらなる。本書の附錄の第六表と第五表とを參照あれ。

特殊の活用をする助動詞と他の助動詞との

第十五節　助動詞と助動詞との連續（二）

時の助動詞は文語と口語との間に大差異を生じてゐるから、本節には特に文語の時の助動詞と口語のそれとを對照して說明する。但し、文語の時に過去時の助動詞の用ひ方は後世の文語では區別が不分明となつてゐることが多いから、本節に說明する所は區別を分明にしてあるものについて云ふのである。（上が文語で下が口語）

（一）單純なもの

（現在）　増す。＝増す。
（完了）
（イ）増しつ。
（ロ）増しぬ。
（ハ）増したり。
（ニ）増せり。
増した。

（ハ）（ニ）は、口語の「増してゐる」（進行的現在）、または「増してある。」（狀態的現在）の意味にも用ひられる。

（注意）「つ、ぬ、たり、り」は過去の意味にも連續について注意すべきことは、「ず」の連用形「ず」が動詞の「あり」と結合して「ざり」となり、「ざりき、ざりけり、ざりけむ、ざらしむ、ざらまし、ざるなり、ざるべし、ざるらし、ざるらむ、ざ〈る〉めり」などと連なることである。その中の古い若干の例を次にあげておく。

などか齡をゆづらざりけむ。（拾遺集）
夢と知りせばさめざらましを。（古今集）
しほみつ海はこほらざるらし。（重之集）
などか思ひにかわかざるらむ。（後撰集）
思ひさだめられざめり。（宇津保物語）

轉用される。

（過去）増しき。　増しけり。　増した。

「けり」は時として感動の意味で「増しけり」を「増すわい」の意味にも轉用される。

（未來）増さむ　＝増さう。

（注意）「増さむ」のむは普便でんとも書く。

用言の終止形は、單に現在をも云ひ、また過現未を通じても云ひ、歴史的現在をも云ふことは、前にも述べておいた。それで用言の終止形は單に現在だけに限らないことを說くべきである。

東條文門の活語指南に「明かしつ、明けぬ」「暮らしつ、暮れぬ」のやうな例をあげ、足代弘訓の「ぬるつる捷覽」に「あけぬる、あはせつる、あひぬる、ありつる」のやうな例をあげてあり、從來諸家の說が出てゐる。その多くの說は、およそつは他動詞をうけ、ぬは自動詞をうけるやうにいふのであるが、この說にも臨分例外を設かねばならぬのである。さうしてぬが自動詞をうけない例外は少くてつが他動詞に限らない例は「ありぬる、ありつる」など可なりにある。まづ概略ないへばつは故意的または活動的であり、ぬは自然的または狀態的である。例へば「水を増しつ。」「水増しぬ。」「夜を明かしつ。」「夜明けぬ」の如きである。さうして語調を强めゝ場合に「時鳥鳴きつる方をながむれば」などといひ、語調を緩める場合に「旅寢しぬべし」などといふこともあるのである。

「たり、り」は、上古には專ら進行的現在または狀態的現在の意味に用ひられ、中古に至つて漸く完了の意味にも轉用され更に近世に至つて過去の意味にも轉用されるやうになつた。

なほ進行的現在（テヰル）または狀態的現在（テアル）の意味をあらはす場合に「船を岸によせつつあり」「花咲きなり」「梅が枝に來ゐる鶯」「机の上に置きあり」などといふこともある。「雪がふりつつある」は必ずしも歐文直譯語とは限らない。

東京語ではテヰルまたはテアルは、進行的現在ばかりでなく狀態的現在をも表はすので兩者の區別が時々不明であるが、關西方言では兩者の區別が次の例のやうに明かである。

（進行的現在）

（東京）雪がふつてゐる（てゐる）。

（關西）雪がふりなる。

（東京）水が増してゐる（てゐる）。

（關西）水が増しなる。

（狀態的現在）

（東京）雪がふつてゐる（てゐる）。

（關西）雪がふつとる（てゐる）。

（東京）水が増してゐる（てゐる）。

（關西）水が増しとる（てゐる）。

（注意）日常の談話では普便で「てゐる」を「てる」、「ふりなる」「増しなる」を「ふりよる」「増しよる」といふ例である。

「き、けり」は過去時をあらはすものである。しかし元來「けり」は「きあり」の約で過去における進行又は狀態を意味したものであるから、さう云ふ場合もある。例へば、

竹を取りつゝ萬づの事につかひけり。（竹を切つては色々の事につかつてゐた）（竹取物語）

櫻花年にまれなる人も待ちけり。（櫻花は一年中にまれに來る人をさへ待つてゐたわい）（古今集）

さうして「けり」は過去時をあらはす外に感動をあらはすことが少くない。例へば、

み山には松の雪だに消えなくに都は野べの若菜つみけり。（古今集）

藤咲いて經食ふ日をかぞへけり（其角）

れさめても〳〵月の夜なりけり。（雲口）

前の歌の末は「若菜をつむわい」の意で、中の俳句の末は「月の夜であるわい」の意、後の俳句の末は「月の夜であるわい」の意である。

未來をあらはすには、文語は「む」、口語は「う」又は「よう」を用ひるのを通例とする。例へば、

月草にころもはすらむ（月草で衣を摺らう）

いざ宿かりて櫻花見む（さあ宿を借りて櫻の花を見よう）

なほ過去時をあらはすにも未來時をあらはすにも、決定的に動詞だけを用ひる方法もある。例へば、

「過ぎぬる何日」を「過ぐる何日」

「去んぬる何月」を「去る何日」

「昨日到着致し候ひき」を「昨日到着致し候」

「來む何日」を「來る何日」

「必ず行くべし」を「必ず行く」

「來べき筈無し」を「來る筈無し」

（二）複合したもの

（過去完了）増して（き、けり）。　増しに（き、けり）。　増してし（まつた）。

（イ）増したり（き、けり）。　（ロ）増せり（き、けり）。

（未來完了）（イ）増してむ。　（ロ）増してなむ。

（イ）増したらむ。　（ロ）増せらむ。

増してしまはう。

（イ）（ロ）は、口語の「増してゐた」（進行的過去）、または「増してあつた」（狀態的過去）の意味にも用ひられる。

（イ）（ロ）は、口語の「増してゐよう」（進行的未來）、または「増してあらう」（狀態的未來）の意味にも用ひられる。

□過去完了などの用例

一、我は言ひてき（我は言つてしまつた）

二、惡しう言ひてけり（わるく言つてしまつた）

三、え參らずなりにき（參られなくなつてしまつた）

四、待ちし櫻もうつろひにけり（待つた櫻も色がかはつてしまつた）

五、道に物をすてたりき（道に物をすてゝあつた）

六、海へさつとぞ散つたりける（海へさつと散つてしまつた）

七、たのめりし子（たのみとしてゐた子）

八、そこに立てりける梅の花（その所に立ち咲いてゐた梅の花）

（注意）複合においても「けり」は感動をあらはす場合が少くない。例へば、

一、西瓜太郎踊り出でよと割つてけり（西瓜太郎が踊り出よと言はぬばかりに大西瓜をまニつに割つたわい）（獨言）

二、我國は草も櫻を咲きにけり（我國は草にも櫻といふもの（櫻草）が咲いてゐるわい）（一茶）

三、やまと歌は人の心をたねとして萬づの言の葉とぞなれりける（和歌といふものは人の心がたねになつて色々の詞となつてゐるのだわい）（古今集の序）

□未來完了などの用例

一、龍あらば射殺して首の玉とりてむ（龍がゐたら射殺して首の玉を取つてしまはう）（竹取物語）

二、今日こそ櫻折らば折りてめ（今日こそはあの櫻花を折るなら折つてしまはう）

三、いざ櫻われも散りなむ（どれ櫻よおれ

も一つに散つてしまはう）

四、目さむるまで寢たらむ（目のさめるまでねてゐよう）

五、まろをこそなかしと思ひたらめ（私をこそなかしいと思つてゐよう）

六、十年の後には名ある人となれらむ（十年後には有名な人となつてゐよう）

（注意）文語の未來完了は凡そ右のやうな言ひ方で、（）の中に口語譯を附けておいたが、文語と口語とは必ずしも同一法で直譯されるものでなく、次のやうな言ひ方の相異もある）

一、櫻花今日よく見てむ（櫻花を今日はよく見ておかう）

二、我宿の花見がてらにくる人は散りなむ後ぞこひしかるべき（…散つてしまつた後にその人がしたはしからう）（古今集）

三、足の向きたらむ方へいなんず（足の向く方へ行かう）

四、御刀しばし貸したまへらむ（御刀を暫くお貸しくだされたい）

なほ一つ言ふことは、一種の推量卽ち想像の過去完了である。西洋文法には之を「過去未來」（preterite future）と呼ぶものである。例へば、

先年（大正十二年九月一日）の大震火災の時もし彼處（東京市本所區被服廠跡）に在りしならば、恐らく斃死したりけむ。

右の「たりけむ」は口語では「てしまつたらう」と言ふ。

第七章　助詞

第一節　助詞の種類

前章の第一節の參考に、富士谷成章が脚結抄に、今いはゆる助詞や助動詞や接尾語を一つにまとめて脚結と稱へたことを說いた。今いはゆる助詞に相當する所の脚結は次の如くである。

第一、五屬

（一）咏屬（何や、何よ、何な、何かな、等）

（二）疑屬（何か、何かは、何や、何やは、等）

（三）願屬（何ばや、何もがな、等）

（四）詠屬（何よ、何や、何れ、何なむ、等）

（五）禁屬（何な、な何そ、等）

第二、十九家

（一）曾家（何ぞ、何こそ、等）（二）乎家（何な、何をば、等）（三）波家（何は、等）（四）毛家（何も、何もぞ、何もこそ、等）（五）仁家（何に、何にて、等）（六）止家（何と、何とも、等）（七）志家（何し、何しぞ、何しこそ、等）（八）乃家（何の、等）（九）逸家（何へ）（十）良家（何ら）（十一）能美家（何のみ、何ばかり、何まで）（十二）陀爾家（何だに、何すら、何さへ）（十三）余利家（何より、何から、等）（十四）那牟家（何なむ）（十五）恭登家（何こと）（十六）毛天家（何もて、何して）（十七）加保家（何がほ）（十八）那加良家（何ながら、何まゝ、何まにまに）（十九）加天良家（何がてら）

右のやうに、五屬は語意で十九家（中に接尾語をも含む）は語形で分類されたのを見ても、五屬以外の助詞の分類に語意を以てすることの困難を察すべきである。その後にテニヲハの研究は諸學者によつて進められ、大槻博士の廣日本文典（明治三十年）に至つて大いに整理された。同博士は助動詞及び接尾語を除外し、富士谷氏の「五屬」なば感動詞の中に入れ、その殘りのテニヲハの大概を次の三類にわけられた。

第一類　名詞に附くもの（が、の、つ、に、を、と、へ、より、から、まで）

第二類　種々の語に附くもの（は、ば、も、ぞ、なむ、し、こそ、だに、すら、さへ、のみ、ばかり、や、か）

第三類　動詞、形容詞、助動詞に附くもの（ば、も、ど、ども、に、を、が、て、で、つゝ）

その後、山田孝雄氏の日本文法論（明治四十一年九月）においては、助詞を主としてその職能によつて、次の六つに分類された。

(1) 格助詞（名詞の格をあらはす）（の、が、か、に、と、へ、より、から、で）

(2) 副助詞（語句を受けて副詞の如くする）（だに、すら、さへ、のみ、ばかり、まで、など、やら、だけ、ぐらゐ）

(3) 接續助詞（句と句とを接續する）（ば、と、も、ど、ども、が、に、を、ところが、のに、ものを、も、し、けれど、けれども）

(4) 係助詞（係結の係をあらはす）（は、も、ぞ、なむ、こそ、や、か、な、なそ、さへ、でも、ほか、しか）

(5) 終助詞（述語の終末に用ひる）（が、がな、かな、かし、さ、え、ぜ、い、な、とも）

(6) 間投助詞（語調を整へ感動を高める）（よ、や、し、を、な、れ、ぞ）

六種の助詞の例は、同氏の日本文法講義（大正十一年）に據つて記した。いはゆる五屬をも助詞の中に入れ、職能から見て六つに分けたのは同氏の創意である。

右の山田氏から少し後に、三矢重松博士の高等日本文法（明治四十一年十二月）が出て、「てにをは」卽ち助詞は左の三類に分けられた。

第一、名詞に附くもの（が、の、つ、に、を、で、へ、と、より、から、まで、等）

第二、動詞に附くもの（ば、ど、ども、と、とも、て、つゝ、し、等）

第三、諸詞に附くもの

（イ）感歎に基づくもの（は、も、ぞ、し、なむ、こそ、や、か、よ、な、かな、れ、がな、かし、さ、等）

（ロ）感歎以外に意義をそふるもの（のみ、ばかり、だに、さへ、すら、等）

右の分類は廣日本文典と相似た趣向で、しかも富士谷氏の「五屬」を加へたものである。なほ吉岡郷甫氏の文語口語對照語法（大正九年訂正四版）には、助詞は次の五類に分けられてある。

第一、體言又は準體言に附くもの（が、の、に、を、と、へ、より、から、まで、でだの）

第二、種々の語に附くもの（は、ば、も、だに、すら、さへ、でも、ぞ、なむ、こそ、し、のみ、ばかり、だけ、ほど、どころ、ぐらゐ、ほか、しか、ぎり、なり）

第三、用言を根蔕とする語句に附くもの（ば、と、から、ので、て、と、とも、ても、も、ど、ども、けれども、に、を、が、のに、ものを、ものの、つつ、ながら、し）

第四、文の中か終に附いて疑問を表はし、文の終に附いて命令や願望を表はすもの（や、か、やら、よ、い、ろ、な、ばや、なむ、が、がも、がな）

第五、文の終か中に附いて語調を整へ餘情を添へるもの（や、も、な、れ、よ、ぞ、ぜ、さ、かし、かも、かな、は、とも）

右の諸家の分類によつて、古來テニヲハと呼ばれたものの中から、今いふ助詞といふも

のを採り出すべき大體の見當がつくのである。本書（中等新國文法）は、諸家の說を參酌し、形式と意味と職能との三方から考へて實用文法としての便利を圖り、すべての助詞をば、他の語を助ける關係によつて、およそ次の四類に大別してあるのである。

第一類、體言または準體言の下につき、主として標識をあらはす助詞（所屬の助詞は本書に記してある。以下も同じ）

（注意一）準體言とは通例の體言でなくて體言に準ずる資格のものをいふ。例へば、過ぎたるは及ばざるが如し。君に忠なるは臣の道なり。花を見るの記。よきを取りあしきを捨つ。怨に報ゆるに德を以てす。隱れたるより顯はるゝはなし。勝つと負くるとに拘らず。旅立つから歸るまで。歌軍の多きを恐れず。

（注意二）標識とは、「花が咲く」。「雪は白い」「梅の花」「花を見る」。「山に登る」。「何處へ行く」。「何よりよい」。「こゝまで來い」。「馬を鹿といふ」。「刀で斬る」の「が、は、の、を、へ、より、まで、と、で」のやうに、謂はゆる格（ばこ）をあらはすことをいふ。初學者が英語などの格に拘泥することを恐れて通俗に標識（めじるし）といふ。

第二類、種々の語の下につき、主として程度をあらはす助詞。

第三類、用言の下につき、主として接續をあらはす助詞。

第四類、語句の下につき、主として感動または命令や疑問をあらはす助詞。

以上四類を共通にして云へば、助詞は他の詞の下につき、これを助けて種々の意味をあらはす語で、助動詞と共に國語の甚だ重要なる部分を占めるものである。

助詞の別名を或は後詞又は後置詞といひ、或は關係詞などともいふけれども、廣く通用しない。後詞又は後置詞とは西洋語の前置詞から思ひついた名であるが、我が助詞は彼の前置詞よりは多種複雜で趣がちがふ。關係詞とは前後の關係をあらはすといふ意の名であるから、第四類の助詞には適合しない。

第一類の助詞は主として標識をあらはすといふ。その標識とは文中のめじるしといふことで、主語や客語を指し示すことである。

第二類の助詞は主として程度をあらはすといふ。その程度とは語句の限定または修飾を意味し、例へば「櫻こそ」「櫻さへ」「櫻ほど」などといひ、又は「人の見るこそ」「人の見るさへ」「人の見るほど」などといふ類である。

第三類の助詞は主として接續をあらはすといふ。その接續とは用言に附いて語句を接續することを意味し、例へば「急がば廻れ」。「雨ふりて地堅まる」。「諫めたけれども聽かれなかつた」。などといふ類である。

第四類の助詞は主として感動または命令や疑問をあらはすといふ。この助詞は、詳に言へば「脚結の五屬」に當る。卽ち、咏屬は感動助詞、疑屬は疑問助詞、願屬は願望助詞、誘屬及び禁屬は命令禁止の助詞である。

助詞は小さい詞のやうであるが、實は大切な詞で、一言葉にして能く機微を制し、死活も正邪も眞否も、之によつて決するほどである。次に文章や和歌や俳句や川柳や俗諺などについて助詞の例を示さう。（●は重い場合の印）

一、大日本は神國なり。（神皇正統記）

二、弘法も筆の誤、猿も木から落ちる。（俗諺）

三、目には青葉、山時鳥、初鰹。（には●があるので名句）（素堂）

四、便りあらばいかで都へ告げやらむ、けふ白河の關はこえぬと。（平兼盛）

五、やせ蛙、まけるな一茶こゝに在り。（一茶）

六、花の雲、鐘は上野か、淺草か、（芭蕉）

七、ほとゝぎす、平安城を、すぢかひに。（蕪村）

八、折節のうつりかるこそ物ごとにあはれなれ。（徒然草）

第二節　第一類の助詞

（1）が（文語・口語）

一、標準語では助詞の「が」をすべて鼻濁音にして ngag でなく gag と發音する。第三類の「が」も同樣である。

二、「鳥が鳴く」の如きは萬葉集などに見えてゐる上古よりの語である。「我が行く」「誰が言ふ」などの古例もある。しかし後世には主語を示す「が」を用ゐることが多くなり、例へば文語の「花咲く」を口語では「花が咲く」といふ。

三、「所有を示す」とは西洋語の所有格又は領格といふものに當る。この「が」の例に「君が代」「天が下」「梅が枝」「賤が家」などもある。

四、「佐渡が島」「淺間が岳」「三保が崎」「千鳥が淵」「那須野が原」の如き地名の「が」は、およそ「といふ」の意味に說かれる。

五、「茶が飲みたい」の「が」を主語を示すと見る人もあるが、「私は茶が飲みたい」といふ場合に窮するから、「を」の强めの口語で、客語を示すものとする。

六、「二二が四」「二三が六」の如き慣用語の「が」は、主語を示す「が」であり、もとなる「二の二倍が四となる」「二の三倍が六となる」の意である。

（注意）「空は晴れたるが、風は寒し」の如き接續の「が」は第三類の助詞の中に之を說く。

九、釣れますか、などと文王、そばへ寄り。（文王と大公望）（川柳）

十、敷島の大和心を人問はば、朝日に匂ふ山櫻花。（本居宣長）

十一、孝靈四年、あれを見ろ、あれを見ろ。（皇紀三七五年富士山現出）（川柳）

十二、君が代は、千代に八千代に、さゞれ石の、巖となりて、苔のむすまで。（古歌）

（2）は（文語・口語）

一、主格を示す「が」は專らに言ひ、「は」は取りわけて言ひ、從つて「が」は獨自、「は」は對他の意味をあらはす。それで「大日本は」といへば「外國は」の差別相を含み「夏」はといへば「冬は」の差別相を伴なつてゐる。

二、客語を示す場合にも「茶が飲みたい」は茶そのものだけを望み、「茶は飲むが」は後の「酒は飲まぬ」を伴なつてゐる。

三、「繩こそあいきやう無きものはあれ」（枕の草子）の如き「は」は「には」の意で客語を示し、「にあれ」よりは强く取りわけていふのである。

四、「東海道は遠州濱松」といふやうな慣用語の「は」は、特に取りわけていふ意味があり、「東海道の遠州濱松」とは趣がちがふ。

五、「來ぼ來たが」「來ることは來たが」又は「來たことは來たが」の如き慣用語の「は」も、特に取りわけていふもので、主語を示す「は」から轉じた慣用語である。「爲は爲たが」「言ふことは言ふが」「見たことは見たが」などもこの類である。

（注意）「遠くは行かじ」「稀には當る」の如き差別的程度を示す「は」は第二類の助詞の中に之を說き、「誰も知りて侍るは」の如き感動の「は」は第四類の助詞の中に之を說く。

（3）**の**（文語・口語）

一、所有（西洋語の所有格）の「の」の例、「私の家」「父の手紙」「師の敎」「誰の說」「春の曙」「夏の夜」「秋の夕暮」「冬の夜の月」など。

二、性質の「の」の例、「孝子の孟宗」「紅の蓮」「善良の少年」「田舍者の私」「金の茶釜」「錦の直垂」など。

三、所在の「の」の例、「長白山の雪」「鴨綠江の橋」「掌の中」「頭の毛」「目の上の瘤」「宇治川の先陣」「日本海の海戰」など。

四、由來の「の」の例、「山家育ちの義仲」「新歸朝の兄」「無二の親友」「前科三犯の盜賊」「未來の總理大臣」「第二の國民」など。

五、比喩の「の」の例、「金枝玉葉（の如き尊い皇族）の御身」「花の都」「紅蓮の焰」「妲己のお萬」「花の顏、月の眉」など。

六、「といふ」の意の「の」の例、「奈良の都」「難波の津」「近江の國」「澁賀の郡」「勝所、の町」など。

七、「きのふこそ早苗とりしか、いつのまに稻葉そよぎて秋風の吹く」は古今集に出てゐる。なほ主語を示す「の」の例は、君が代は千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苔のむすまで（古歌）

久方の光のどけき春の日に靜ごゝろなく花の散るらむ（紀友則）

八、所有の「の」の下の名詞を省いた例は、土佐日記にも「前の守も今のも諸共に」とある。「今の守も」の略である。

九、所有の「が」の下に名詞に代る「の」を添へた例は、「誰がのなるらむ」「人妻と我がのと」のやうに古代にもあるが、後世はこの「の」を用言の連體形の下に用ひることが行はれて、今の口語に多くあることである。例へば、

早く起きる（事）は衞生によい。

あの大きいの（獸）は象だ。

私は來月歸鄕するの（豫定）です。

君は何時上京するの（豫定）か。（この「か」を省くこともある）

十、用言の連體形を「の」で受けて下の名詞に連れることは、現代の文語に許容されてゐる。例へば、

花を見るの記。

學齡兒童を就學せしむるの義務を負ふ

右のやうな場合には、「の」の上方を一つの名詞として見るのである。「の」の上方を一つの名詞として見る例は、古歌や古文にもある。

忘れじの行末（儀同三司の母）。多くの人。遠くの海。

一目見えもし奉り見もしまゐらせばやの志（源平盛衰記）

十一、「源の義家」「平の淸盛」「藤原の道長」の如き「の」は、所屬の姓氏をあらはすから、所有の「の」の一種である。「厩戸の皇子」「後鳥羽の院」「小督の局」の如き「の」は、「といふ」の意である。しかし何れも複合した固有名詞となつてゐる。

十二、客語を示す「を」を音便で「の」と言ひ、それから音便でないものまで及ぼした例がある。例へば、

先陣の（「を」の音便）仕うまつる。

訥辯な口上の（「を」）以て申上げます。

十三、所有などの「の」に似て、しかも二つの名詞をつらねて熟語とする特質ある助詞の「つ」がある。これは上古からの語であるが、今も幾らか殘つてゐる。「つ」を用ひた例は、

末つ方。上つ方。天つ神。天つ日嗣。天つ風。天つ星。島つ鳥。上つ繼（音便かづさ）。上つ毛野（音便かうづけ）。遠つ淡海（音便とほたふみ）

（4）**を**（文語・口語）

一、他動詞には「を」の助詞が附くのが常であるが、誤解を生じない場合には之を省いても可い。例へば、

筆（を）執りて字（を）書く。

茶（を）は飲めど酒（を）は飲まず。

花（を）ちらす風の宿り（を）は誰か知る

我に敎へよ、行きて恨みむ。（古今集）

二、自動詞にも「を」の助詞の附くことがあるが、誤解を生じない場合には之を省いてもよい。例へば、

空（を）とぶ鳥。道（を）歩く人。海（を）行かば水づくかばね。

（注意）「この海渡らむと思ふを、波風やまず」の如き接續の「を」は、第三類の助詞の中に之を說く。

（5）**に**（文語・口語）

一、相手の「に」の例、「人に對する心得」「鯉に麩をやる」「兄弟に友」など。

二、目標の「に」の例、「月見によし」「試驗に及第す」「病に藥」など。

三、場所の「に」の例、「海に臨む」「山に遠し」「天に昇る」「門に入る」など。

四、時限の「に」の例、「七日目に休み」「一年に二度」「期に先だつ」など。

五、比較の「に」の例、「人の右に出づ」「帶に短く、たすきに長し」など。

六、資格の「に」の例、「敎員に養成す」「商人に仕込む」「代理に立つ」など。

七、轉化の「に」の例、「水が氷になる」「赤色が紫色に變ず」など。

八、原因の「に」の例、「學問に誤られたり」「黃白に目がくらむ」など。

九、尊敬すべき主語を示す「に」の例、「皆々樣には」「母上にも喜びたまふ」など。

（注意一）なほ擧げて見れば幾らもあるけれども、本書には概要を擧げてあるのである。「梅に鶯」「鬼に金棒」の如きは「配合のに」とよび、「心に喜ぶ」「胸に浮ぶ」の如きは「意識のに」とよばれよう。

（注意二）「日くれかゝるに、人は未だ歸らす」の如き接續の「に」は、第三類の助詞の中に之を說く。

（6）**へ**（文語・口語）

一、方向の「へ」の例、「東から西へ」「上を下へ」「江戸から長崎へ」など。

二、場所の「へ」の例、「日本から日本へ」「天へ昇る」など。

（注意）文語では、或場所に定着したときは「に」を用ひ、或場所へ進行するときは「へ」を用ひる例である。口語で兩者の混同されてゐるのは、成るべく改める方がよい。次に二三の古例を擧げて見る。

わが宿に鳴きし雁がね、雲の上に今宵鳴くなり、國へかも行く。（萬葉集）

あづまの方へ、友とする人ひとりふたり誘ひていきけり。三河の國八橋といふ所にいたれりけるに、その川のほとりに、かきつばたいとおもしろく咲けりけるを見て、（伊勢物語）

右の例によつて、口語でも「東京へ向ふ」「東京に着いた」と言ひわける方がよい。但し、文語において「へ」は方向に限つてゐるが、「に」は場所にも方向にも用ひた例があるのである。

(7) **より**（文語・口語）

一、起點の「より」の例、「地上より昇る」「北極より南極まで」「ロンドンよりの通信」など。

二、經由の「より」の例、「病は口より入り、禍は口より出づ」「窓より忍び入る」など。

三、時限の「より」の例、「朝より晩まで」「今日より三日間休業」など。

四、由來の「より」の例、「不品行より起る病」「それと聞くより大騒ぎ」など。

五、制限の「より」の例、「泣くより外の事なし」「十人より外は許されず」など。

六、比較の「より」の例、「氏より育ち」「人よりまさる」「習ふより慣れよ」など。

（注意）なほ擧げて見れば幾らもあるけれども、本書には概要を擧げてあるのである。「徒より行く」「馬より通ふ」の如きは「方法のより」とよび、「天子より庶人に至るまで」の如きは「範圍のより」とよばれよう。

七、上古には「より」を「よ」とも「ゆり」とも「ゆ」とも言つた例がある。卽ち「松原よ」「明日ゆり」「田子の浦ゆ」など。

八、「何より善き」「何より大いなる」などの意で「より善き」「より大いなる」などといふのは西洋文法の比較級の better, greater などから起つた形容詞及び形容動詞。

(8) **から**（文語・口語）

前條の「制限のより」及び「比較のより」の外の「より」は、本條の「から」と取りかへられる。この「から」も古くから用ひられて、源氏物語などにも「今から」「心から」「わが身から」「かちからまゐりて」などと言つてある。

(9) **まで**（文語・口語）

一、終點の「まで」の例、「江戸から長崎まで」「ローマまで行きて歸りき」など。

二、時限の「まで」の例、「昔から今まで」「二十世紀の今日まで」など。

（注意）終點又は時限の「まで」から轉じて程度をあらはす「まで」は、第二類の助詞の中に之を說く。

(10) **と**（文語・口語）

一、共同の「と」の例、「人と樂しむ」「世と推し移る」「外國と條約を結ぶ」など。

二、轉化の「と」の例、「湯が水となる」「追々春暖の頃となる」など。

三、標準の「と」の例、「敵と戰ふ」「人を馬鹿といふ」「會員十人と無し」など。

四、比喩の「と」の例、「落花を雪と思ふ」「月日は流るゝ水と速し」など。

五、引用又は指定の「と」の例、「諺に曰く『醫は仁術なり』と」「讀めと言はれる」「やあと呼びかけた」「六時までとする」など。

（注意）この「と」が動詞、使役の助動詞、受身の助動詞及び時の助動詞の連體形に連續する習慣のあるものは、現代の動詞において許容されてゐる。（正則は終止形）例へば、

月出づると見えて（正則は、月出づと見えて）

終日藥務を取扱はしむるといふ。（正則は、終日藥務を取扱はしむといふ）

嘲弄せらるゝと思ひて（正則は、嘲弄せらると思ひて）

萬人皆その德を稱へけるとぞ。（正則は、萬人皆その德を稱へけりとぞ）

六、列擧の「と」の例、「智育と德育と體育」「天下の英雄は君と余とのみ」「赤と青と黃と白と黑とを五色と（標準のと）云ふ」など。

（注意一）列擧の「と」は誤解を生じない場合には最終の語句の下の「と」を省くことは、現代の文章において許容されてゐる。例へば、

宗教と道德との關係。（正則は、宗教と道德との關係）

京都と神戸と長崎へ行く。（正則は、京都と神戸と長崎とへ行く）

最終の「と」を省くときは誤解を生ずべき例。

史記と漢書（と）の列傳を讀むべし。

史記と漢書の列傳（と）を讀むべし。

（注意二）「神とも神ときこえくる」「生きとし生ける物」「ありとあらゆるもの」のやうな連語的の疊語の間に入れる「と」は、意味を强めるためのものである。

（注意三）用言の下に附いて接續をあらはす「と」は、第三類の助詞の中に之を說く。

11) **にて**（文語）**で**（口語）

文語の「にて」の音の約まつたのが口語の「で」である。第一類の助詞の外に形容動詞及び指定の助動詞の場合の「にて」又は「で」があることを先づ參照しておく。

形容動詞の「にて」「で」の例、「春は暖かにて、夏は暑し」「春は暖かである」など。指定の助動詞の「にて」「で」の例、「孔子は聖人にて、孟子は賢人なり」「秀吉は武人で政治家である」など。

次に第一類の助詞の「にて」（口語の「で」）を擧げる。

一、場所の「にて」の例、「ドイツにて學ぶ」「裁判所にて判決す」など。

二、時限の「にて」の例、「一週間にて歸る」「一日にて整ふ」など。

第三節　第二類の助詞

(12) **は**（文語・口語）

一、本書は「は」を第一、第二、第四の三類に分けて說いてある。第二類の「は」は差別した程度を示すもので、「彼とは異なり」といへば「此とは同じ」などと暗示し、「遠くは行かじ」といへば「近くは行きつゝあらむ」などと暗示し、「稀には當る」といへば「多くは當らず」などと暗示示し、「昔は男も髮を結びけり」といへば「今は男は髮を結ばず」などと暗示してゐるのである。

二、次にあげてある古文の中の「は」は、第一類の「は」でなくて第二類の「は」であり、第一類の「に」を省いた「は」であるから、「には」と解すべきである。

蠅こそあいぎやう無きものはあれ。（枕の草子）

此の道こそ世の末にかはらぬものはあれ。（新古今集、西行法師詞書）

三、原因の「にて」の例、「職務にて働く」「病氣にて缺席す」「大雪にて困る」など。

四、方法の「にて」の例、「水にて清む」「電氣にて動かす」「飛行機にて行く」など。

（注意）「犬でも猫でも」の如き或程度を示す「でも」は、第二類の中に之を說き、「風も吹かで」の如き打消の接續の「で」、及び「風が吹くので」の如き接續の「ので」は、第三類の助詞の中に之を說く。

(13) **も**（文語・口語）

一、並列の「も」の例、「茶もコーヒーも飲料品なり」「鯨も蝙蝠も狸々も獸類なり」など。

（注意）「酒も飲まず、煙草も吸はず」は「酒をも飲まず、煙草をも吸はず」の第一類の「を」を省いたものである。

二、添加の「も」の例、前に他の部にあることを云ひ、更に「東部にもあり」と添加して云ふのである。なほ「彼は甚だ學問を好み、又運動をも好む」などとも云ふ。

三、强めの「も」の例、「思ひも寄らず」「れてもれられず」「聞いてもくれ」「何よりも好きなり」など。

四、第三類の假定の接續の「とも」の略である「も」もあり、第四類中の感動の「も」もある。それ〴〵の條に之を說く。

(14) **ぞ**（文語）

一、大いに强める意をあらはす「ぞ」の例、「見渡せば柳櫻をこきまぜて、都ぞ春の錦なりける」（素性法師）「秋きぬと目にはさやかに見えねども、風の音にぞ驚かれぬる」（藤原敏行）など。

二、口語には「誰ぞ頼まう」「何ぞあるか」「どこぞ痛むか」「これぞいふ程のこともない」のやうに、多くは疑問（不定稱）の代名詞につく「ぞ」が殘つてゐる。これは若干の慣用語に過ぎない。

三、「雨がふるぞ。」「道は遠いぞ。」の如き第四類の感動的の「ぞ」もある。

(15) **なむ**（文語）

一、大いに强める意をあらはす「なむ」の例、「柿本の人麻呂なむ歌のひじりなりける」（古今集の序）「いとあはれとなむ思ふべき」など。

二、「花も咲かなむ」の如き第四類の願望の「なむ」及び「花も咲きなむ」の如き過去の「ぬ」の推量の助動詞の「なむ」もある。

（注意）「ぞ・なむ・や・か」の係結に就いての詳細は、附錄の「係結法大要」に記す。

(16) **こそ**（文語・口語）

一、「こそ」は最上の强めをあらはす助詞である。その文語の係結の法は口語ではすたれてゐる。

二、軍記物などでは「こそあるなれ」の係結を音便で「こざんなれ」といつてある。八犬傳に之を誤用して「好き敵にこそござんなれ」と書いてあるのは、馬琴が「こそ御座あるなれ」の意に誤解したのであらう。

三、中古に「こそ」を呼掛の「よ」のやうに用ひた例がある。

わが君こそ、まづ物聞えむ。（枕の草子）など。

四、上古に「こそ」を希望の意に用ひた例がある。

敷島のやまとの國は、言靈のたすくる國ぞ、まさきくありこそ。（柿本人麻呂）など。

（注意）「こそ」の係結に就いての詳細は、附錄の「係結法大要」に記す。

(17) **し**（文語）

一、「し」は「ぞ」よりは輕いが、頗る强める意をあらはす。例へば、

年ふれば齡は老いぬしかはあれど花を見れば物思ひもなし（藤原良房公が染殿の后の御前の瓶なる櫻の花を見てよまれた歌）

花になく鶯、水にすむ蛙の聲たきけば生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける（古今集の序）

二、口語ではこの「し」はすたれたけれども、たゞ「定めし御よろこびでせう」「いつしか過ぎ去つた」「必ずしもさうではない」の如き慣用語には殘つてゐる。

(18) **だに・すら**（文語）

およそ「だに」「すら」には、(甲)輕い方をあげて重い方を推察させる意味がある。(乙)しかし時としては重い方をあげる場合もある。

一文字だに知らぬ者（土佐日記）
はかなき事だに斯くこそ侍れ（源氏物語）
禽獸すら恩を知れり。
行方すらもわからず。
命だにあらば（新古今集）
都すら物あはれなる頃にはあらずや（御堂集）
（甲）日語では「さへ」または「でも」
（乙）日語では「さへ」

(19) **さへ**（文語・口語）

一、およそ「さへ」には、(甲)重い方をあげて輕い方を推察させる意味がある。(乙)しかし時としては輕い方をあげる場合もないではない。

涙をさへなむ落し侍りし。（源氏物語）
親の名さへ出づべし。
我が見すてむ後をさへ（源氏物語）
夢にさへ人目を守る（古今集）
（甲）日語では「さへ」または「まで」
（乙）日語では「さへ」または「も」「でも」

二、「さへ」は積極で、「だに」と「すら」は消極と見られるのであるが、見樣によつて兩方の極端をどちらにも取られる場合に(乙)の現象が起るのである。

(20) **でも**（口語）

一、消極の意の「でも」の例、「せめて一問題でも」「何か腰掛の職業でも」「番茶でも飲んで四方山話でもしよう」など。

二、無選擇の意の「でも」の例、「茶でも湯でもよい」「誰でも來い」など。

(21) **まで**（文語・口語）

一、火限度を示す「まで」の例、「火臣まで臨場したり」「寶物まで賣つた」「大地震ばかりでなく、大火事まで起つた」など。

（注意）中古には「まで」を「ほど」の意味にも用ひてある。例へば、「苔のむすまで」「花と見るまで雪ぞふりける」など。

二、ホ限度を示す「まで」の例、「見るまでもない」「御禮の印しまでに」「運がつきればそれまでだ」など。

(22) **なり**（口語）

一、「なり」は指定の助動詞から轉じた助詞で、無選擇の「でも」に等しい。例へば「山へなり海へなり行かう」「使でなり電報でなり知らせよう」など。

二、「そのまゝ」の意の「なり」の例、「梨の皮なりたべる」「行つたなり歸らない」など。

三、「でも」の意の「なり」に第三類の「とも」の附いた「なりとも」「なりと」（「なとも」）がある。例へば、「代人なりともよこせばいゝ」「何なりとめしあがれ」（「どこからなと攻めよ」）など。

(23) **や**（文語・口語）

一、並列の「や」の例、「梅や桃や櫻や色々の花」「一つや二つのまちがひではない」「あれやこれやで御無沙汰致しました」など。

二、並列の「や」は、取りきめないで大概にいふ助詞で、中古にも用例がある。

柚や梨などをなつかしげに持たりて後見や何やとかれて思しかはす（源氏物語）

（注意）第二類の「や」は第四類の疑問の「や」から分出したものである。

(24) **やら**（口語）

一、並列の「やら」の例、「泣くやら叫ぶや

ら、さんざんでした」「アメリカからやらヨーロッパからやら西洋人が大勢來た」など。

二、不定や推量を示す「やら」の例、「午前中やら午後までやら分らない」「誰やらがさう言つた」「どれくらゐあることやら」など。

(25) **など**（文語・口語）

一、等類を示す「など」の例、「會社などの役員が集る」「梅や桃や李などの實がなつてゐる」など。（これに内等と外等とある、第四項を見よ）

二、大概を示す「など」の例、「この村などは逸早く開けた所です」「猫に取られるなどとは手ぬかりだ」「負けるなどといふ事があるか」など。

三、複數を示す「など」の例、「君など（君ら）二三人行くのか」「あれなど（あれら）が五六人で引受けた」など。

四、「など」は一體に不明確な語であり、謂はゆる内等と外等との差がある。例へば「會社など」といふのに、幾つかの會社（内等）をさすのか、又は會社外の團體（外等）をも含むのかの差がある。又「君など」といふのに、君ら幾人か（外等）の場合と、單にその人（内等）をおぼろげに言ふ場合とある。だから、この例の不明確性は適所に利用すべきもので、誤解を生ずる不都合は避けるべきである。

(26) **のみ**（文語）

一、文語の「のみ」は、口語では通例「だけ」または「ばかり」といふ。「ばかり」は文語にも口語にも共通である。例へば要點のみ＝要點ばかり＝要點だけ誤りしのみ＝誤りしばかり＝まちがへたばかり＝まちがへただけ

二、口語では「のみ」はすたれてゐるが、「さのみ」「のみならず」の如き熟語の副詞や接續詞には殘つてゐる。

三、中古には「のみ」を熟語の中間にはさんだ例がある。卽ち、「神つ浪荒れのみまさる」（古今集）「おぼしのみだるゝに」「泣きにのみ泣きたまへば」（源氏物語）など。

(27) **ばかり**（文語・口語）

一、「ばかり」は「のみ」と相似て、しかも意味のちがふ場合もある。「曉ばかりうきものはなし」「今來むといひしばかりに」には「のみ」を用ひられない。

二、「我を知る者は君のみ」の如く「のみ」は文を結ぶことができるが、「ばかり」又は「だけ」には下に指定の助動詞「なり」又は「だ」などを附けて結ぶ。

(28) **だけ**（口語）

一、限度を示す「だけ」の例、「小學校だけを卒業した」「一人分だけを渡す」「殘つたのはこれだけだ」など。

二、比例を示す「だけ」の例、「稻がよく實るだけ穗がさがる」「抑へれば抑へるだけはねあがる」「近ければ近いだけ、よく聞える」など。

三、相當する意の「だけに」の例、「身分がよいだけに身持もよい」「財產家だけに稅金も多額だ」など。

(29) **ほど**（文語・口語）

一、程度を示す「ほど」の例、「物が見えぬほど暗くなつた」「人が驚くほど出世した」

二、比例を示す「ほど」の例、「交りが深いほど親しくなる」「ほめられるほど恥かしくなる」「善ければ善いほど結構だ」など。

三、「後ほど來ませう」「今朝ほど來ました」

の如き「ほど」は、副詞に合成されたもので、「頃に」の意をあらはす。

四、「手のとゞくほどになつた」の如き「ほど」は名詞である。「手のとゞくほど近くなつた」といへば、その「ほど」は程度を示す助詞である。

(30) **くらゐ**（ぐらゐ）（口語）

一、「くらゐ」と「ぐらゐ」とは、どちらを用ひても差支ないが、關東は清む方が多く關西は濁る方が多い。しかし一定の標準を立てがたい。（「きり」と「ぎり」とも同樣）

二、この助詞は、「位」といふ名詞から分出したもので、程度を示す。例へば「讀まれぬくらゐ字が小さい」「十里までぐらゐは歩かれよう」など。

(31) **どころ**（どこ）（口語）

「どころ」は「所」といふ名詞から分出した助詞で、略して「どこ」とも言ひ、下は「か」「で」「の」につらなり意外の程度を示すものである。例へば、

「返さないどころか、ことわりも言はない。」「聞いたどこか見たのだ。」

「それだけどころでない。」「安心するどこでない。」

「行くどころの騒ぎではない。」「かれこれ言ふどころの場合ではない。」

(32) **ほか・しか**（口語）

一、「ほか」は「外」といふ名詞から分出した助詞であり、「しか」の語原はまだ明かでないが、兩者は同じ意味に用ひられるから、一つ所にあげたのである。「しか」を「しきや」といふのは正すべきである。

二、「ほか」または「しか」は、「外には」の意で下を打消す助詞である。例へば、

「しか」と言ひかへられる場合、「私ほかしか知らない」「五人ほか（しか）居ない」「南へほか（しか）行かぬ」「これぐらゐほか（しか）できぬ」など。

「しか」と言ひかへられぬ場合、「取られるほかない」「見せないほか仕方がない」「あやまらせるほか好い工夫はあるまい」など。

(33) **きり**（ぎり）（口語）

一、「きり」又は「ぎり」は、「限」（きり）といふ名詞から分出した助詞で打切の意を示す。清濁の事は(30)の條を見よ。

二、「きり」又は「ぎり」は、「だけ」「ばかり」と相似て、しかも意味は强い。例へば、

「これきりで何もない。」

「去年逢つたきりだ。」

「見に來たのは六人きりだつた。」

「それぎりとは少い。」

なほ次に附記する諸語の如きも、第二類の助詞に準ぜられるものである。

（通り）「見たとほり話す。」「手本のとほり書く。」

（邊り）「明日あたり歸らう。」「今年あたりかたづかう。」

（始め）「御兩親はじめ皆々樣には。」「校長をはじめ職員一同。」

（次第）「出來しだい持つて參ります。」「この手紙着しだい御返事を。」

（共）「皮とも食ふ。」「入れ物とも捨てた。」

（儘）「出すまゝ受取る。」「行つたまゝ歸らない。」

第四節　第三類の助詞

(34) **て**（文語・口語）

一、「て」はタ行下二段活用の過去の助動詞「つ」の連用形「て」から分出して發達した助詞である。それで「て」は、一面には今でも過去助動詞の連用形の餘影を存し、他面には特別の發達をして或は形容詞に連なり、或は「と」又は「に」の助詞と結合するなどの特色をもつてゐる。さうして用言の連用形に附く。

二、經過を示す「て」の例、「壘をすつて字を書く」「馬に乘つて運動した」「雨ふつて地かたまる」「雷をまねて腹掛やつとさせ」（川柳）

三、他と對比または並列する「て」の例、「太くて短い」「損して得とれ」「夜明が早くて、日暮が遲い」など。

四、連語の動詞を作る場合の「て」の例、「似て居る」「立てゝある」「飛んで行く」「讀んでしまふ」「考へて見る」など。

(35) **て**（文語）

一、この「で」は「すて」の約で、打消の接續をあらはし、動詞や助動詞や形容動詞の未然形に附く助詞である。これを口語では「なくて」または「ないで」と言ひかへて打消の助動詞と接續の助詞とを用ひる。

二、この「で」は中古からの文語である。例へば、

えあはでかへりけり。（伊勢物語）

物もものしたまはでひそまりぬ。（土佐日記）

櫻ちる木の下風は寒からで空にしられぬ雪ぞふりける。（古今集）

三、用言の接續をあらはし、用言の連體形に附く助詞である。文語の「を」なども口語では「ものを」といふ。

二、不順當の接續を示す「を」の例、「夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらむ」（古今集）「海を渡らむと思ふを波風やまず」など。

三、不順當の接續を示す「ものを」の例、「直き木に曲れる枝もあるものを毛をふき疵を言ふがわりなき」（古歌）「行くはずで有つたものを行かなかつた」など。

四、「ものを」に類似した助詞の例。「ものの」「ものながら」は文日共通、他は文語。（ものの）物なれどの意、「とは言ふものの一概に然るにはあらず」など。（ものから）物ながらの意、「心には思ふものから（ものながら）言ひ出づる折もなし」など。（ものゆゑ）物故にの意、「かなはぬものゆゑ、敵にうしろを見られむ事こそうたてく候へ」（平家物語）など。

(36) **が**（文語・口語）

一、この「が」は接續をあらはし、用言の連體形に附く助詞である。但し、口語の形容動詞などにはその終止形に附く。

二、不順當の接續を示す「が」の例、「花は美しいが、實はならぬ」「空は晴れたが、風が寒い」など。

三、順當の接續を示す「が」の例、「親も善い親だが、子も善い子だ」「今日もラヂオを聞いたが、中々おもしろい」など。

四、假定の接續を示す「が」の例、「誰が何と言はうが、すてておけ」「聞かうが聞くまいが、こちらのまゝだ」など。

(37) **を**（文語）**ものを**（文語・口語）

一、この「を」と「ものを」とは、不順當の接續をあらはし、用言の連體形に附く助詞である。文語の「を」なども口語では「ものを」といふ。

二、不順當の接續を示す「を」の例、「夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらむ」（古今集）「海を渡らむと思ふを波風やまず」など。

三、不順當の接續を示す「ものを」の例、「直き木に曲れる枝もあるものを毛をふき疵を言ふがわりなき」（古歌）「行くはずで有つたものを行かなかつた」など。

四、「ものを」に類似した助詞の例。「ものの」「ものながら」は文日共通、他は文語。（ものの）物なれどの意、「とは言ふものの一概に然るにはあらず」など。（ものから）物ながらの意、「心には思ふものから（ものながら）言ひ出づる折もなし」など。（ものゆゑ）物故にの意、「かなはぬものゆゑ、敵にうしろを見られむ事こそうたてく候へ」（平家物語）など。

(38) **に**（文語・口語）

一、この「に」は、接續をあらはして用言の連體形に附く。日語では不順當の接續の「に」の代りに「のに」を用ひ、順當の接續の「に」の代りに「から」「が」などをも用ひる。

二、不順當の接續の「に」の例、「日くれたるに（日語、日がくれたのに）登山者は未だ歸らず」「日照るに（日語、日がてるのに）雨ふる」など。

三、順當の接續の「に」の例、「まだ時も早きに（日語、早いに、早いから）かの社に參りたまへ」「嵐山に遊びしに（日語、遊んだが）花は滿開なりき。」など。

四、同じ動詞の間にはさむ强めの「に」の例「言ふに言はれず」「かくなればかくなるものと知りながら、止むに止まれぬ大和魂」（吉田松陰）など。

(39) **ながら**（文語・口語）

一、「ながら」は接續を示す助詞で、動詞と助動詞とには連用形に附き、形容詞には連體形に附く。

二、物事の並行を示す「ながら」の例、「涙をながしながら話す」「苦しいながらも忍ぶ」「京都に居りながら奥州白川の歌をよむ」など。

三、物事の不一致を示す「ながら」の例、「とは言ひながら決しかれる」「心には思ひながら無沙汰に打過ぎたり」など。

(40) **つつ**（文語・口語）

一、「つつ」は物事の並行又は斷續を示す動詞で動詞や助動詞の連用形に附く。例へば、「かしこまりつつぞなる」（源氏物語）「かきなでつつゐたり」（同上）「ひきかくしつつあり」（枕の草子）「わが衣手に雪はふりつつ」（光孝天皇）「花見つつ人まつときは」（古今集）など。

二、「つつあり」といふ語は、近世の西洋語の飜譯にはじまつたのではなく、古くからあるものである。但し近來は目立つて多く用ひる觀がある。

(41) **たり**（**だり**）（文語・口語）

一、この「たり」は、過去の助動詞から轉じた助詞で、動作の並列を示し、動詞や助動詞や形容動詞の連用形に附く。普便の場合には「だり」と濁ることがある。

二、動作の並列を示す「たり」の例、「れたり起きたりしてゐる」「その邊に立つたりうろついたりしてはいけない」「泣いたり叫んだりする」など。

三、狀態の並列を示す「たり」の例、「長かつたり短かつたり不揃だ」「言ふことが本當だつたりうそだつたり、とりとめがない」など。（酷つきは形容動詞）

四、右の並列を示すのを稱して一つだけをあげると、「その邊に立つたりしてはいけない」「人に笑はれたりすると、外聞がわるい」など。

(42) **し**（口語）

一、この「し」は動詞の「爲」の連用形「し」を中止として用ひるものから轉じた助詞で、並列の接續をあらはし、用言の終止形につく。

二、並列を示す「し」の例、「花も咲くし、鳥も鳴く」「帶には短いし、たすきには長い」「酒ものまないし、煙草もすはない」など。

三、原因を並列して結果に及ぶ「し」の例、「山は高いし、道は苦しいし、大層つかれる」「家は倒れたし、火事は起つたし、にげるよりほか仕方がなかつた」など。

四、一種の前提を示す「し」の例、「討論ではあるまいし、さう理窟ばるにも及ぶまい」「惡意でしたのではあるまいし、そんなに叱らなくても可からう」など。

（注意）文語では同趣の物事を並列するのに、中間に中止形を用ひる場合と終止形とを用ひる場合とがある。例へば、
（中止形）花もさき、鳥もなく。帶には短く、たすきには長し。
（終止形）花もさく、鳥もなく。帶には短し、たすきには長し。

（43）**ば**（文語・口語）
一、「ば」は、上の動作や事情が下の事の起りとなる條件を示す助詞で、文語には二種の別がある。その一つは假定又は未定の「ば」であり、一つは既定の「ば」である。例へば、
雨ふらば順延とせむ。
天氣よくば舉行せむ。
右は用言の未然形に附く假定の「ば」
雨ふれば順延とす。
天氣よければ舉行す。
右は用言の已然形に附く既定の「ば」
二、口語では、多くは假定の意味を文語の已然形に附けてあらはし、これを假定形といひ、しかも場合によつては、その假定形で既定の意味をあらはす。例へば、
雨がふれば順延としよう。
天氣が、よければ舉行しよう。
右は用言の假定形に附く假定の「ば」
よく考へればさうでもない。
あちらがよければこちらがわるい。
右は用言の假定形に附く既定の「ば」
（注意）口語にもまだ幾らか文語の未然形や已然形の用ひ方が殘つてゐる。例へば、
（未然形）
○急がばまはれ。
○殺さば殺せ。
○言はば狂氣の沙汰だ。
○長くば切らう。
○見たくば見よ。
○行かずばなるまい。
○見たれば、話せるのだ。
（已然形）
（通例見たから話せるのだ）
○長ければこそ、切るのだ。
（通例長いから切るのだ）
三、假定形に「ば」の附いたのなば、普便で次の例のやうに拗音にも言ふ。
書けば＝書きや（カ行）　押せば＝押しや（サ行）　打てば＝打ちや（タ行）　死ねば＝死にや（ナ行）　讀めば＝讀みや（マ行）　降れば＝降りや（ラ行）
四、口語では假定形を用ひて並列をあらはすことがある。例へば、
英語も學べばドイツ語も學ぶ。（英語もまなぶしドイツ語もまなぶの意）
見もしなければ聞きもしない。（見もしないし聞きもしないの意）
智もあれば德もあれば勇もある。（智もあるし德もあるし勇もあるの意）

（44）**と**（口語）
一、この「と」は、條件などを示す助詞で用言の連體形につく。
二、條件を示す「と」の例、「見るといけない」「落すとこはれよう」「珍らしいともてはやされる」「早く行かぬと間にあはぬ」など。
三、同時を示す「と」の例、（やはり條件の一種）「行くと給つた」「聞くとそのまゝ立ちあがり」など。

（45）**たら**（**だら**）（口語）
一、「たら」は、文語の「たらば」（過去助動詞と助詞）から轉じた助詞で、假定または既定の條件を示す。語調の都合で「ば」をつけて言ふこともある。普便の場合には「だら」と濁ることがある。
二、假定の條件を示す「たら」の例、「雨が降つたら順延にする」「讀んだら分らう」「逢うたら話さう」など。
三、既定の條件を示す「たら」の例、「相談したら得心した」「讀んだら分つた」など。

（46）**なら**（口語）
一、「なら」は、文語の「ならば」（指定助動詞と助詞）から轉じた助詞で、用言の連體形につき、假定の條件を示す。語調の都合で「ば」をつけて言ふこともある。
二、假定の條件を示す「なら」の例、「雨が降るなら止めよう」「天氣がよいなら舉行する」「見るなら見せよう」「讀んだなら分るはずだ」など。
三、「なら」は體言などにも附く。例へば、「雨天なら止めよう」「初雪やこれが鹽なら火まうけ」「いやならよせ」「僅かなら有りませう」「君となら行かう」など。

（47）**から**（口語）
一、この「から」は既定の條件を示す助詞で、用言の連體形につく。例へば「天氣がよいから舉行した」「少しでもよいから送つてくれ」「それだから、行けと云つたのだ」など。
二、古代の文語に多少この助詞の起源と見るべきものがある。例へば、
吹くからに秋の草木のしをるれば、むべ山風を嵐といふらむ。（文屋康秀）
惜しむからこひしきものを白雲の立ちなむ後は何ここちせむ。（紀貫之）

（48）**ので**（口語）
一、「ので」は既定の條件を示す助詞で、用言の連體形につく。例へば「雨がふるので困る」「日が長いので仕事がはかどる」「時がおくれたので助からなかつた」
二、この助詞は、助詞の「の」と指定の助動詞「だ」の連用形「で」との合成が助詞に轉じたものと見るべきである。

（49）**とも**（文語）
一、この「とも」は、假定の條件を以て下に不順當を豫想する助詞であり、動詞と助動詞と形容動詞には終止形につき、形容詞には未然形につく。例へば、
給にかくとも筆も及ばじ。（動詞につく）
如何に批評せらるとも可なり。（形容動詞につく）
波靜かなりとも油斷すべからず。（助動詞につく）
苦しくとも忍耐すべし。（形容詞につく）
二、この「とも」が動詞・使役の助動詞及び受身の助動詞の連體形に連續する習慣のあるものは、現代の文語に許容されてゐる。（正則は終止形）例へば、
數百年を經るとも（正則は、數百年を經とも）
强ひて之を邊奉せしむるとも（正則は强ひて之を邊奉せしむとも）
如何に批評せらるとも（正則は、如何に批評せらるとも）
（注意）右第二項の許容に加へて「とも」の代りに「も」を用ひることの許容については、（51）「ど・ども」の條の第三項に記す。
三、この文語の「とも」は、次號の口語の「ても」に相當する。しかし、文語の「とも」が、いくらか口語の中に殘つてゐるが、次の下の例のやうに言ひかへられる。
少くとも百圓はかゝる。（少くても百圓はかゝる）
おそくとも間にあはう。（おそくても間にあはう）

見ずとも宜しい。（見なくても宜しい）
金はなくとも、智慧があればよい。（金はなくても、智慧があればよい）
何なりとも取れ（何でもにてもの音便）取れ）

四、古文には「繪にかくと筆も及ばじ」といふやうに、動詞の終止形を「と」でうける例もあるが、現代の口語では未來または推量の助動詞の終止形を「と」でうけて次のやうにいふ。（この「と」は、大概「が」と言ひかへられる）

繪にかかうと、筆も及ぶまい。
何をしようと勝手次第だ。
打たれようと斬られようとかまはぬ。
鬼が出ようと何が出ようと、恐れない。

（50）**ても**（**でも**）（口語）

一、「ても」は前條の文語の「とも」の意味に等しい口語の助詞であり、次のやうに口語の動詞や形容詞や使役と受身と希望との助動詞の連用形につく。「讀みても」の如きは、音便で「讀んでも」と濁る。

繪にかいても筆も及ぶまい。
無いと云つても少しは有らう。

之を省略しても妨ない。

後から訂正しても差支へない。
讀ませても分らぬ。
如何に批評されてもよい。
行きたくても行かれまい。
苦しくても忍耐するがよい。
いくら長くてもそのまゝつかふ。
讀んでも分るまい。
死んでも魂は殘らう。

二、「ても」は、口語の「だ」活用の形容動詞の語幹を受ける場合には「でも」となる。例へば「波は靜かでも油斷するな」の如きである。それは「靜かに」といふ連用形の語尾「に」と「ても」とが融合した音韻變化の結果である。なほ、その例をあげておく。

空氣は清らかでも大層つめたい。
都會の生活は華やかでも、苦勞が多い。
世は泰平でも、亂世の事を忘れるな。

（51）**ども**（文語）

一、「ど」「ども」は、既定の條件を以て下に不順當の事を示す助詞であり、用言の已然形につく。例へば、

相手はかはれど、ぬしはかはらず。
鶴の脚は長けれど、切るべからず。

度々召せども、參りたまはず。
物は薄けれども、志は厚し。

（注意）この文語の「ど」「ども」は、次條の口語の「けれども」に相當する。

二、次のやうに文語の假定と既定とは思想において相對する。（片假名がきは口語）

（假　定）
動　詞（讀まば（未然形）ヨメバ、ヨムナラ　讀むとも（終止形）ヨンデモ）
形容詞（善くば（未然形）ヨケレバ、ヨイナラ　善くとも（形然形）ヨクテモ）

（既　定）
動　詞（讀めば（已然形）ヨメバ、ヨムカラ　讀めど（ども）（已然形）ヨムケレドモ）
形容詞（善ければ（已然形）ヨケレバ、ヨイカラ　善けれど（ども）（已然形）ヨイケレドモ）

三、誤解を生じない限りにおいて、假定の「とも」或は既定の「ども」の代りに、「も」を用ひることは、現代の文語において許容されてゐる。例へば、

何等の事由あるも（正則、ありとも）議場に入ることを許さず。
期限は今日に迫りたるも（正則、たれども）準備は未だ成らず。

經過は頗る良好なりしも（しかども）昨日より聊か疲勞の狀あり。

誤解を生ずべき例は、

請願書は會議に付するも（すとも、すれども）之を朗讀せず。
給金は低きも（低くとも、低けれども）應募者は多かるべし。

四、「善ケレバ」「惡ケレバ」「無ケレバ」などの「善ケレ」「惡ケレ」「無ケレ」などは、形容詞の一活用形で、バが助詞である。さうだのに、「ケレバ」を一種の助詞のやうに思ひ誤つて、之を用言の終止形につけて「センケレバナラン」又は「センケリヤナラン」などといふのは、正すべきである。この連語は、次のやうに關東風と關西風と兩樣に言ふことが是認されてゐる。

（關東風）シ（動詞）ナケレ（助動詞）」バ
（關西風）セ（動詞）ネ（助動詞）
（助詞）ナラ（動詞）ナイ（助動詞）
（助詞）ヌ（ン）（助動詞）

（52）**けれども**（**けれど**）（口語）

一、「けれども」は、前條の文語の「ど」「ども」の意に等しい助詞であり、用言の連體形（ある助動詞の終止形）につく。「けれど」とも言ふのは、許して可いけれども、「けども」「けど」「けんど」などと言ふのは、矯正すべきである。正則の用例は、

物はよいけれども、値は高い。
いそがしいけれども、手傳つてやる。
痛かつたけども、こらへてゐる。
辭はするけれども、委は見えない。
聞いたけれども、忘れてしまつた。
それは惡くはなからう（「う」は終止形）けれども、やめる方がよい。

二、この接續の助詞の「けれども」は、切りはなされて獨立するときは接續詞に轉ずる。例へば「物はよい。けれども値は高い。」「それは惡くはなからう。けれども止める方がよい。」の如きである。

なほ次に附記する諸例の如きも、第三類の助詞に準ぜられるものである。

○**ところが・ところで**（口語）

一、「ところが」「ところで」は、前提を設けて接續をする語であり、下は不順當の意になる。例へば、

多く來たところが（ところで）、五十人ぐらゐだ。
金をためたところが（ところで）、冥土へのみやげにはならない。

二、また「ところが」は、事實を述べて接續をする語であり、下は順當の意になる。例へば、

駈けつけたところが、まにあつた。
いろ〳〵考へて見たところが、かういふ決心になつた。

（注意）「ところが」又は「ところで」を切りはなすと、それは接續詞に轉ずる。

○**して**（口語）

「して」は、由來を示して接續する語である。例へば、

「それからして、かうなつた」「憂つたからして、見えないのだ。」「心がかはつたかして、脫會した。」

（注意）「五人して持ちはこぶ」「兄弟して出かける」などの「して」は、第一類の「で」に似た意味のものである。

○**とても・とて**（文語・口語）

「とても」は「と云つても」などといふ連語の略であり、「とて」は「と云つて」又は「と云つて」などの略であり、前提を設

けていふ接續を示す複合の助詞である。例へば、

かまはぬとても程がある。
一寸出るとても車に乗る。
誰だとて勝たれない。
苦しいとて我慢をしろ。
見せるとて只は見せない。
敵が強いとて恐れはせぬ。

古くは、源氏物語に、「いかでか見奉るべきとても泣きたまひぬ」などと用ひ、「竹取物語」に「かたときのまとてかの國よりまうでこしかども」、今昔物語に「今は昔、袴垂とて、いみじき盗人の大將軍ありけり」などと用ひてある。

○だつても・たつて（口語）

この二語は、意味は前條と同じで語形のちがふものである。即ち「たつても」は「と云つても」の略であり、「たつて」は「と云つても」又は「と云つて」の略である。例へば、

行くたつても此の姿では行かれない。
あそぶたつて程のあるものだ。

○だつたら・だつたり（口語）

「だつたら」は「で有つたら」の約まり、「だつたり」は「で有つたり」の約まりである。「だつたら」は假に設けた接續であり「だつたり」は一つに定められない場合の前提をいふものである。例へば、

今秋は豐年だつたら、お祝祭をしよう。
けふまで父が存命だつたら、さぞ喜ぶだらう。
晴れだつたり、降りだつたり、かはりやすい天氣だ。
報知が本當だつたり、うそだつたり、とりとめがない。

第五節　第四類の助詞

(53) **や**（文語、口語）

一、感動及び呼掛の「や」は、動詞または助動詞には命令形または終止形につく。例へば、「祝へや祝へ」「うれしや〳〵」「太郎や梅子や」「蝶や花やともてはやす」「そんな事は止めろや」「なんにもならないや」など

（注意）俳句にはこの助詞などを大事な切字としてゐる。例へば、

元朝や神代の事もおもはるゝ。守武
古池やかはづとびこむ水の音。芭蕉
行々子鳴くや櫓の音馬の鈴。露川
（行々子はよしきりともいふ鳥）

容詞には終止形につく。

眞夜中やふりかはりたる天の川。嵐雪
春めかぬ言葉づかひや年の内。千代

（注意二）「や」の一類に「やい」があり呼掛である。例へば、

太郎冠者居るかやい。（狂言記）
一太郎やい。（現代語）

二、疑問の「や」は、用言の終止形につき、文語だけに用ひる。口語には「か」を用ひる。例へば、

外國語の試驗ありや。（文）
外國語の試驗があるか。（口）
故障有りや無しや。（文）
故障が有るか無いか。（口）

右のやうに疑問の「や」は用言の終止形につくのが正則であるけれども、現代の文語においては、之を用言の連體形につけることが許容されてゐる。

正則 面白しや。 有りや。
許容 面白きや。 有るや。

父に似たりや、母に似たりや。
父に似たるや、母に似たるや。

（注意）なほ「や」の許容については(54)**か**の條の第四項に記す。

三、反語の「や」または「やは」は多くは推量の助動詞の終止形につき、文語だけに用ひる。口語には「か」を用ひる。例へば、

徒らに死すべけむや。（文）
徒らに死なれようか。（口）
招くとも行くべしやは。（文）
招いても行かれるものか。（口）
人にやは劣るべき。（文）
人に劣つてなるものか。（口）

四、「や」の係結の詳細については、附錄の「係結法大要」の中に記す。

(54) **か**（文語・口語）

一、疑問の「か」は、用言には連體形につく。口語では「か」は、用言には連體形が推量の助動詞「う」「よう」につく。例へば、

この河はよほど深きか。（文）
この河はよほど深いか。（口）
如何なる故にか。（文）
どういふわけでか。（口）
誰にか問はむ。（文）
誰に問はうか。（口）

二、反語の「か」または「かは」は用言には連體形につく。口語では「か」だけが多くは名詞か推量の助動詞「う」「よう」につく。例へば、

斯くてやむべきものか。（文）
かうしやめられるものか。（口）
明日ありと頼むべき身かは。（文）
明日があると頼まれる身か。（口）
何かはうれしからざらむ。（文）
どうしてうれしくないことがあらうか。（口）

三、未決定の並列の「か」は、用言には通例連體形または終止形につく。例へば、

東京か大阪か京都の中。
向ふに見えるのは雲か山か。
筆か墨かを買はう。
あれかこれかどちらかにしよう。
來るか來ないか分らない。
重いか輕いか量つて見よ。

四、上に疑問の語があるときには、下に疑問の助詞「か」を置くのが正則である。しかし現代の文語では、かやうの場合に「や」を置くことが許されてゐる。例へば、

誰にか問はむ。
誰にや問はむ。
如何なるか。
如何なるや。
如何なる故にか。
如何なる故にや。
如何にすべきか。
如何にすべきや。

正則 許容

五、「か」の係結の詳細については、附錄の「係結法大要」の中に記す。

(55) **よ**（文語・口語）**ろ**（口語）**い**（口語）

一、感動と呼掛と命令との「よ」は、用言には終止形にも命令形にも連體形にもつく。例へば、

鳴けよ鶯。（命令形）
亡からむ後の思出にせよ。（命令形）
大勢居るよ。（連體形）
月日の立つが速きよ。（連體形）
さうだよ。（終止形）
早く行かうよ。（終止形）

「養和の頃かとよ」「安元三年四月二十八日かとよ」の如き感動的叙述は、方丈記などに見えてゐる。

二、文語の命令は、四段とナ變とラ變との外の用言には、命令形に「よ」をつける。口語の命令は、上一段と下一段とには、

その命令形に「よ」または「ろ」をつけ、カ變には、命令形に「い」をつけ、サ變には、命令形に二樣あつて、「せ」には「よ」をつけ、「し」には「ろ」をつける。

（注意）附錄の第三表や第四表を參照あれ

（附）「よ」に似た感動の「な」があり、動詞などの命令形や連體形にも、體言にも動詞などにもつく古語である。例へば、

渡し守船渡せなとよぶ聲の至られば かも梶の音せぬ（萬葉集）

つひにゆく道とはかねて聞きしかど昨日けふとはおもはざりしを（古今集）

秋の菊にほふかぎりはかざしてむ花より先としらぬわが身を（同）

露をなどあだなる物とおもひむわが身も草におかぬばかりを（同）

なほ「てな」とつゞけて願望をあらはすことがあり、また「なや」とつゞけて强く感動をあらはすことがある。例へば、

こよひは盃など心してな（源氏物語）

やつれはてたまへる御有樣、かれては思ひよらざりしなや（平家物語）

（56）**な**（文語、口語）**ね**（口語）

一、「な」は、古來體言またはすべて文の終止の所に附ける感動の助詞であり、後世の口語（重に關東の方）では之を「れ」といふ。例へば、

彼ぞこの當陸の守のむこの少將な（源氏物語）

興ある事いふ老者たちよな（大鏡）

花の色はうつりにけりな（小野小町）

空模樣があやしくなつたな

これをこゝに置いて（下さい）な　口語

また雨がふりますれ

これを持つていくかれ

二、口語では「な」「れ」を長音にして「いそがしくなりましたなあ」「雪がふるねい」などといふ。

（57）**ね**（文語）

一、諭示の「ね」は、動詞または助動詞の連用形につく。

あひ奉りたまひね（竹取物語）

船出してこの浦去りね（源氏物語）

まづ女房出でね（同）

春風は花のなき間にふきはてね、咲きなば思なくて見るべく（拾遺集）

二、上古においては、用言の未然形に附いて諭示する「ね」または「な」があつた。

例へば、

榮えいまされ、尊きわが君（萬葉集）

あまをとめども汝が名のらさね（同）

名におへる森に風祭せな（同）

もろ〳〵濟ひわたしたまはな救ひたまはな（佛足石の歌）

（58）**な**（文語、口語）**な——そ**（口語）

一、「な」は禁止をあらはし、用言の終止形につく。但し、ラ變には連體形につく。

例へば、

玉とり得ずばかへりくな（竹取物語）

あるじなしとて春をわするな（菅公）

御油斷あるな

二、この禁止の「な—そ」の「な」は種々の語をうけ、下の「そ」は動詞の連用形につく。但し、カ變とサ變とは「なこそ」「なぜそ」のやうに未然形につく。

その筆なつかひたまひそ（枕の草子）

きりぎりすいたくな鳴きそ秋の夜の長き思ひは我ぞまされる（古今集）

こひしくは見てもしのばむもみぢばを吹きな散らしそ山おろしの風（同）

ふく風をなこその關と思ひしを道もせにちる山ざくらかな（源義家）

こゝに人あまた聲なせそ（源氏物語）

（59）**ばや**（文語）

一、「ばや」は、我が動作などについての希望をあらはし、動詞や助動詞の未然形につく。例へば、

ほととぎすの聲たづねありかばや（枕の草子）

早月こば鳴きも古りなむ時鳥まだしきほどの聲をきかばや（古今集）

二、前項の「ばや」は、未然形につく「ば」に感動の「や」が合成して一種の助詞となつたものであるが、次のやうな「ばや」は未合成のものである。

心あてに折らばや折らむ初霜のおきまどせばはる白菊の花（古今集）

古今集遠鏡にも「白イ菊ノ花ハタイガイ推量デチラバ折リモセカガ」云々と云つてある。今一例を、

草の葉にかゝれる露の身なればや心うごくに涙おつらむ（大和物語）

（60）**なむ**（文語）

一、「なむ」は、他の動作などについての願望をあらはし、動詞及び助動詞の未然形につく、例へば、

はや御馬にて二條の院へおはしまさなむ（源氏物語）

小倉山峯のもみぢば心あらば今一たびのみゆき待たなむ（藤原忠平）

二、（一）希望の「なむ」と（二）第二類の助詞卽ち係の「なむ」と、（三）過去の助動詞「ぬ」の未來の「なむ」とを區別する必要がある。例へば、

（二）柿本の人麿なむ歌のひじりなりける（古今集の序）

いとあはれとなむおもふべき（源氏物語）

（三）一め見し君もや來ると櫻花けふは待ちえて散らば散りなむ（古今集）

わがやどの花見がてらに來る人は散りなむ後ぞこひしかるべき（同）

（一）と（二）とは同源と見られるのであるが、意味によつて第二類の助詞と第四類の助詞とに分けてあるのである。

三、（一）の「なむ」は動詞及び助詞詞の未然形につき（三）の「なむ」は「散りなむ」「待ちなむ」「おはしましなむ」のやうにその連用形につく。これは四段や變格の活用のやうに未然形と連用形との區別があれば分明であるが、上一段と下一段と上二段と下二段とのやうに兩段が同じであるものは前後の意味によつて之を察するよりほかない。例へば、

（一）早や夜も明けなむと思ひつつぬたり（伊勢物語）

けはしき路を無事に過ぎなむ

いざ櫻われも散りなむ、ひとさかり有りなば人にうきめ見えなむ（古今集）

（二）今二十日へば夏は過ぎなむ

（附）「ばや」や「なむ」の外に古くは「が」「がも」「がな」といふ願望の助詞もあつた。例へば、

老いず死なずの藥もがな、君が八千代を

わかえつゝ見む（古今集の長歌の句）

甲斐が嶺をさやにも見しがけけれ（心）

なく嶺をり臥せる佐夜の中山（古今集）

世の中は常にもがもな渚こぐ海人の小舟の綱手かなしも（金槐集）

甲斐が嶺を嶺こし山こし吹く風を人にもがもや言づてやらむ（古今集）

朽木になしはてずもがな（源氏物語）

まことにて名にきく所はれならば飛ぶがごとくに都へもがな。（土佐日記）

(61) **かな**（文語）

「かな」は強き感動をあらはし、體言及び用言の連體形につく。例へば、

たちこちのたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな。（古今集）

かなしきかなや無常の春の風。（平家物語）

さてもうれしく對面したるかな。（大鏡）

つれなきいのちにも侍るかな。（源氏物語）

（注意）俳句にはこの助詞などを大事な切字として用ひる。例へば、

長松が親の名で來る御慶かな。（野坡）

木のもとに汁もなますも櫻かな。（芭蕉）

手をついて歌申上ぐる蛙かな。（宗鑑）

名月を取つてくれろと泣く子哉。（一茶）

唐草に牡丹めでたき蒲團哉。（燕村）

（附）「かな」と同樣に用ひられた古語の「かも」「か」「も」がある。

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも。（安倍仲麿）

年月のつもり行くまに〳〵さびしき事のいよゝまさるべきかも。（光仁天皇の宣命）

よる浪のすゞしくもあるか敷妙の袖御の浦の秋の初風。（新勅撰集）

淺みどり絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か。（古今集）

こもりくの初瀬の山は色づきぬしぐれの雨はふりにけらしも。（萬葉集）

(62) **かし**（文語）

「かし」は強めて餘情をあらはすもので用言には通例は終止形または命令形につく。例へば、

なほやんごとなき如來の御光なりかし。（拾鏡の序）

神もうれしとおぼしめすらむかし。（枕の草子）

來ても見よかし。（伊勢物語）

時々はあそべかし。（源氏物語）

とめ來かし梅さかりなる我がやどなうときも人は折にこそよれ。（新古今集）

御こゝろざしのあやにくなりしぞかし。（源氏物語）

こゝは故常陸の宮ぞかしな。（同）

二、「かし」を口語に言ひかへるのに適當な語がない。「來ても見よがし」「早く行けがし」などと濁つて言ふ方言が殘つてゐるが、標準語とはされない。

(63) **は**（文語、口語）

一、「は」は念をおして餘情をあらはすもので、用言の連體形につく。これを口語では「わい」もと言ふ。例へば、

近き皇胤なたづねば融（嵯峨源氏）らも侍るは。（大鏡）

君がすむ宿のこずゑを行く行くも經るまでにかへりみしはや。（菅公）

身にも笠にもつくやうにいやがるは。（狂言記）

學校が年々ふえるは。

腹がへるは、身はひえるは。

遊べばとて、程があるわな。

これ、やかましいわい。

二、「わい」は下品にきこえる詞であり、「わ」も上品にはきこえない詞である。

(64) **さ**（口語）

一、「さ」は、輕く言ひ放つて餘情をあらはすもので、多くは終止に用ひ、念をおすため時としては中間にも用ひられる。例へば、

昔々浦島太郎といふ人がゐたさ。

これから嵐山へ花見に行くのさ。

まあ、それくらゐでいいさ。

君がさ請合つたのだらう。

二、「さ」は輕い調子のことばで、おとぎばなし、落語などによく用ひられ、輕快ではあるが莊重ではない。

(65) **ぞ・ぜ**（口語）

一、「ぞ」や「ぜ」は、強めて餘情をあらはすもので、用言の終止形につく。例へば、

○行くのは明日だぞ。

早く起きようぞ。

空が晴れるらしいぞ。

行かなければならないぞ。

○もう花がさくぞ。

明日は行かうぜ。

これから行きますぜ。

何もないらしいぜ。

二、この終止の「ぞ」に似たものに、古くは「逢ふを限りと思ふばかりぞ」（古今集）などがある。狂言記には「何と思しめすぞ」のやうな例がいくらもあり、江戸時代の俗歌にも用例がいくらもある。

三、「ぞ」も「ぜ」も、親密な間柄に用ひるかまたは横柄な言ひ方である。「ぜ」は「ぞえ」の約まつたものだらうと云ふが、「ぞ」にくらべると「ぜ」には輕快味をふくむ。

(66) **とも**（口語）

一、「とも」は、答の叙述のたしかめ、又は叙述のつよめをあらはすもので、用言の終止形につく。例へば、

(甲) うれしいとも。

(乙) あるか。

(甲) あるとも、あるとも。

(乙) 見たか。

(甲) 見たとも、たしかに見た。

(乙) 君らも、きつと行くか。

(甲) 行くとも、行くとも、きつと行く。

(乙) 明日は君と行かうよ。

(甲) 行かうとも。

○所澤の飛行場へ行つて見たら、飛んだとも、飛んだとも、澤山の飛行機が。

（叙述のつよめ）

○大地震のあとに火事が起つて、燒けたとも、燒けたとも、東京の半分以上が。（同前）

二、この「とも」の用ひ方は、古くは狂言記などから用ひられてきたものである。例へば、

（宗論）「芋といふものをうるか。おゝうるとも。」

（附子）「今日は頼うだ人の御留守ぢやに因つて、ゆるりと居て話さうよ。何がさて、ゆるりと居て話さうとも。」

なほ次に附記する諸語の如きも、第四類の助詞に準ぜらるものである。

○**ものか**（文語・口語）**もんか**（口語）

「ものか」は文語の「ものかは」の略だといはれる。古くは源氏物語にも、

かゝる夜の月に、心やすく夢みる人はあるものか。

と見えて、反語である。「もんか」は「ものか」の音便である。例へば、

そんな事があるものか（もんか）。

どうして、これで短いもんか。

○**の**（口語）

この「の」は、「何をするの」などと言つて、問ひかける語であり、もと下に「か」がついてゐたのが略されたのである。例へば、「どうなさつたの」「なぜ早く來なかつたの」

「ほしくないの。」など。

○**のう・の**（日語）

人に物言ふときに餘情をあらはす「のう」または「の」は、謠曲や狂言記や浮瑠璃や小說などにも見えてゐる質朴または親密な語である。例へば、

（謠曲）「通はうよのう。」など。

（狂言記）「ちと見たいの。」「おのれは憎いやつの」など。

（浮世床）「何をするのだの」「お早いの。」「おつな事があるの。」など。

（現代の例）よい元氣だのう。よかつたのう。よくできたのう。

おぼえがよいの。私が行くからの。人が來てゐての、話ができなかつた。

○**え**（日語）

「え」は念をおす意があつて、多くは問ひかける語であり、江戸時代には「へ」と記して「え」と言つたものである。現代の例は、

それは何だえ。さうかえ。行くのかえ。

お達者かえ。

田中さんえ。（この「え」は呼びかけの方言）

（注意）右の例の「だえ」を「だい」「かえ」を「かい」ともいふ。

○**て**（日語）

この「て」は、おだやかに言ひ立てる意味をもち、終止にいふ。例へば、

花は櫻にかぎるて。

この方が新しいて。

第六節　用言と助詞との連續

本書の表は、文語の用言と助詞との連續について注意すべき諸例を示してあるのである。本表を教授するときには、附錄の第五表と第六表とを參照すべきである。本表については、次の例のやうに生徒をして讀み慣れさせるがよい。

動詞の例（未然形）
- 〃　〃　讀まば
- 〃　〃　で
- 〃　〃　ばや
- 〃　〃　なむ

形容詞の例（未然形）
- 〃　善くば
- 〃　〃　とも

助動詞の例（未然形）
- 〃　〃　（有ら）しめば
- 〃　〃　で
- 〃　〃　ばや
- 〃　〃　なむ

それが本當だらうて。

どんなにでも言はれるて。

それは格別だて。

何も出來まいて。

助動詞の例（未然形）
- 〃　（有る）べくば　とも

助動詞の例（未然形）
- 〃　（有ら）すば　とも

（注意一）助動詞には（一）動詞に似た活用と（二）形容詞に似た活用と（三）特殊の活用とがあるから、本表にはその三例をあげてある。

（注意二）文語の形容動詞の活用は、動詞「有り」の活用に等しい。しかしその連用形は、動詞の連用形が助詞に連なると同樣に助詞に連なることができない。

（注意三）「有り」及びすべてラ變關係の用言は、その連體形から禁止の助詞「な」に連なる。

（注意四）注意すべき文語の助詞について次に說明しておく。

〔未然形につらなる助詞〕ば（假定）で（打消の接續）ばや（希望）なむ（希望）

〔連用形等につらなる助詞〕て（接續）つつ（並行又は斷續）な…そ（禁止）

〔終止形等につらなる助詞〕と（指定）とも（假定）や（疑問）な（禁止）

〔連體形につらなる助詞〕が（接續）を（接續）に（接續）も（接續）か（疑問）かな（感動）かは（反語）

〔已然形につらなる助詞〕ば（既定）ど（既定）ども（既定）

〔命令形につらなる助詞〕よ（命令）

（注意五）文法の許容事項はこの參考書の各所に記述し、本書の本節にも助詞に關するものを記してあるけれども、なほこの參考書の末部に文部省から公表された全文を載せておく。

第八章　副詞

本書上篇には、先づ節より入るために「動詞や形容副詞などの意味を限定する詞を副詞といふ」と云つてある。今や繁に進まればならぬので、本書は、副詞をその限定する詞から見て次の三種類に分けてある。

一、（イ）動詞や（ロ）形容詞や（ハ）形容動詞を限定するもの

（イ）しばし〳〵來る。　早く來れ。
　　きつとなほる。　どれほどあるか。
　　もう來るだらう。　おだやかに治まる。

（ロ）最も善し。　甚だ惡し。
　　なか〳〵多い。　さつぱり無い。
　　誠にめでたい。　どうも怪しい。

（ハ）頗る多かりき。　實に寂莫たり。
　　極めて稀だ。

二、他の副詞を限定するもの

非常に強くなれり。　いと好く晴れたり。
もつとゆつくりあける。　少し靜かにしろ。
よほどよく出來た。　大層親切に答へた。

三、文句（文や節）を限定するもの

一體、これは何だ。
いかにも、あの人は立派な紳士だ。
無論、（それは）優勝の勝なるべし。
果寛、己を靈して天命を俟つの外はない。

副詞は客語又は、主語をはさんで動詞や形容詞などの意味を限定することがある。例へば、（客語をはさむ）

かの國は顏る金力に富む。

この青年は善く職務をはげむ。

子供が毎日鯉に餌をやる。

（主語をはさむ）

大層開會の時刻がおくれた。

斷じてさやうな事は無い。

（主語と客語とをはさむ）

決して余はこれを語らず。

副詞は、（一）動詞や（二）形容詞や（三）副詞の用をなす語を限定することがある。その語は、連語の連語や數詞や方角を示す名詞などである。例へば、

（一）ほとんど滅亡だ。（ほろぶの意）
　　やがて滿開なり。（さきそろふの意）

（二）たゞ一人の兄。

（三）わづか五里の道。
　　やゝ北にある。
　　少し右をむけ。

副詞の中には一定の呼應をするものがある。呼應とは前の語に對して後の詞が照應することである。例へば、

（打消）未だ到着せず。
　　ゆめ〳〵怠るべからず。

なさ〳〵劣らず。
よもや知るまい。
豈それ然らむや。

（反語）何ぞこの理をわきまへざる。
え（得）やは言ふべき。
どうして彼に劣るものか。
蓋し彼は賛成せざらむ。

（推測）恐らくは大事を誤るならむ。
おもふにこの事なからむ。
おそらく人ちがひであらう。

（確信）須らく國憲を重んずべし。
宜しく聖賢の言に從ふべし。
當に義務を果すべし。

（譬喩）恰も扇の倒に懸るに似たり。
譬へば麻につるゝ蓬の如し。
さながら神代のごとし。
ちやうど富士山の形のやうだ。

（願望）願はくは年來の志をとげむ。
冀はくは同心協力して事に當らむ。

（疑問）何故に彼の國は亡びたるか。
なぜこんな事をしたのか。

（假定）若し我を尋ぬる人あらば……
たとひ如何なる事ありとも……
よしや意外な事が起つても……

さて從來、多くの西洋文法や日本文法は、副詞を意味から分けてゐる。例へば、

（場所）遠く、近く、傍に、遙かに、斜に、眞直に、外に、こゝに、など。

（時間）既に、曾て、未だ、常に、早く、遲く、先づ、やがて、俄かに、暫く、遂に、など。

（程度）最も、極めて、甚だ、悉く、專ら、すべて、凡そ、殆ど、皆、益々、稍、聊か、少し、僅かに、など。

（確否）必ず、慥に、眞に、强ひて、猶、もし、蓋し、恐らく、定めて、多分、隨分、勿論、など。

（心情）恭しく、謹んで、願はくは、宜しく、いかで、豈、況んや、苟も、流石に、など。

（狀態）厚く、疾く、高く、美しく、善く、面白く、徐ろに、嚴かに、靜かに、寂寞と、など。

（擬聲）ばら〳〵、がら〳〵、がん〳〵、ごろ〳〵、そよ〳〵、ひし〳〵、どうどう、どん〳〵、はつし、はた〳〵、から〳〵、こん〳〵、など（各の下に通例、助詞の「と」をつける）

（擬態）ぴか〳〵、きら〳〵、なよ〳〵、つら〳〵、とぼ〳〵、とろ〳〵、はしはし、のろ〳〵、のたり〳〵、けろり、すらり、ちらり、など（各の下に通例、助詞の「と」をつける）

といふやうに分けて見るのである。その分類にはいろ〳〵ある。けれどもその意味を簡明に數種にわけることは爲しがたいし、また文法上には、さういふ分類をする必要がないのである。それよりも副詞の成立を說明することが利益である。なぜなれば、副詞の多くは他の品詞から轉成したものであるからである。例へば、

一、（名詞から）昔、今、年々、時々、日日、朝夕、昨日、今日、明日、先月、今月、來月、今年、去年、明年、樣々、態態、幸、大變、自然、誠（に）、別（に）、次第（に）、など。

二、（數詞から）一一、一二、再三、一つ、萬づ、三つ四つ、第一、一番、一等、一日、ひとり、ふたたび、一體、三三五五、萬（が）一、第二（に）、など。

三、（代名詞から）これ〳〵、それ〳〵、おの〳〵、こゝ（に）、あちこち（に）、何、いづれ、いつ、いづこ、何（ぞ）、いづく（にぞ）、など。

四、（動詞及び助動詞から）あへて、かねて、却つて、すべて、從つて、强ひて、定めて、たえて、果して、まして、成るべく、おぼえず、たえず、のこらず、おひ〳〵、泣く泣く、ます〳〵、あまり、たとひ、つまり、恐らく、願る（に）、しきり（に）、みだり（に）、たとへ（ば）、思へ（ば）、とり〳〵（に）、願はく（は）、など。

五、（形容詞や形容動詞から）（形容詞の連用形は多く副詞を成す）多く、少しく、早く、疾く、厚く、重く、深く、長く、善く、痛く、烈しく、久しく、恭しく、著しく、珍らしく、あら〳〵、うす〳〵、こま〳〵、長々、事々しく、にがにがしく、いまいましく、ゆたけく、のどけく、明かに、宏らかに、こまかに、詳かに、のどかに、遙かに、稀に、華やかに、確實に、明細に、など。

六、（副詞にもとづいた形容詞から）甚だしく、未だしく、いとどしく、うべうべしく、など。

七、（種々の品詞から成立つもの）物思ひげに。聞くならく、殘惜しく、徹頭徹尾、無理無體に、漠として、恬として、洋々として、得々として、欣然として、猛然として、斷乎として、確乎として、突如として、など。

〔餘說〕副詞について

剩へ（「餘りさへ」の音便の「あまつさへ」）

悉に（生强ひに、口語では「なまじつかに」といふ）

爾（「爾云ふ」は「しかいふ」で、口語の「さういふ」に等しい）

得（「得言はず」の「え」は副詞であり、口語では「えう」ともいふ）

假令、縱令（これを「たとひ」とよむのは漢文の用語の和讀である。後世は「たとふ」をハ行下二段にいふが、古語ではハ行四段に活用した。で、今は「たとへ」ともいふ人がある）

勿論、畢竟、到底、徹頭徹尾、（これらは漢文の用語の音讀から來た）

一日づつ、僅ながら、路すがら、我から、手づから、年ごとに、然ばかり、風のむた、（これらは體言などに接尾語の合成し副詞）

我が國語には擬聲や擬態の副詞を多く用ひるので、大いに實景や實情をうつすのに有効である。次に俳句について例を示す。

梅が香にのつと日の出る山路かな。　芭蕉
春の海ひねもすのたり〳〵かな。　蕪村
けろりくわんとして鳥と柳かな。　一茶
一僕とぼく〳〵ありく花見かな。　季吟
ちい〳〵と絕え入る聲や練雲雀。　子規
ひうと鳴く鵙に麥の夜あけかな。　諷竹
地車のとどろとひびく牡丹かな。　蕪村
下駄からりころり被奴らが夕涼み。　一茶
つや〳〵と林檎涼しき木の間かな。　尙白
とろ〳〵と寢入りしあとの暑さ哉。　通甫
つく〳〵と繪かゝる秋の扇かな。　小春
にょつぽりと秋の空なる富士の山。　鬼貫
ひい〳〵と鳴く尻ごゑかなし夜の鹿。　芭蕉
ばら〳〵と度々さむき木の葉かな。　曰人
笹竹にさや〳〵とふる時雨かな。　士朗
水鳥や向ふの岸へつい〳〵。　惟然
うか〳〵と年よる人や古ごよみ。　芭蕉

第九章　接續詞

本書上篇には、先づ節より入るために「語や文などをつなぐ詞を接續詞といふ」と云つてゐる。今詳かに言へば、接續詞は語と文との中間に位する連語や節（下篇に詳述するもの）をもつなぐのである。例へば、

（單語）　山また山。東部並に西部。奈良もしくは京都。

（連語）　霞か雲かはた雪か。春の花または秋の紅葉。

松には鶴、竹には雀、さうして梅には鶯。

（節）　風吹き、かつ雨降る。

雨が降るか、または雪が降るだらう。

春はきたが、しかし鶯はまだ鳴かない。

（文）　交際が廣い。從つて費用もかさむ。

彼は仁人なり。然れども災難に遭へり。

鐘が鳴つた。それに授業は始まらぬ。

さて接續詞はその意味によつて次の四種類に分けられる。

一、並列または累加を意味するもの。

源氏並に平氏。

松島・厳島及び天ノ橋立。

最澄卽ち傳教大師。

地震が襲ひ來り、かつ火災が起つた。

山また山、水また水を越え渡る。

二、分或または未決を意味するもの。

陸軍又は海軍。

英語もしくはドイツ語。

新築或は修繕。

賛成かただしは（それとも）不賛成か。

晴か曇かはた（或は）雨か。

三、前後の關係の順當を意味するもの。

交際が廣い。從つて費用もかさむ。

準備が整つた。それでは（我等は）出かけよう。

象を船にのせ、さうしてその目方を量つた。

雨が降つた。だから人が多くは來なかつた。

風が吹く。するとほこりがたつ。

四、前後の關係の不順當を意味するもの。

彼は仁人なり。然れども（彼は）災難に遭へり。

要害は固より好い。ところが（城主は）油斷をした。

明日は運動會（が行はれるはずだ）。但し（運動會は）雨天（ならば）順延（になるはずだ）。

鐘が鳴つた。それに授業は始まらぬ。

智慧はある。けれども學問はない。

右の四種類の諸例に示したやうに、接續詞には（甲）語句の中間にあるものと（乙）文句の始にあるものとがある。何れにしても接續詞は、單に下にある語や文などを修飾するばかりでなく、必ず上にあるものと下にあるものと間に立つて特に接續の職能を成すものである。この職能の有無は、實に接續詞と副詞との分れるところである。次に兩者に共通する語の例を以て之を判別しよう。

○山又山をこゆ。（又の位置をかへて「又山山をこゆ」「山山をこゆ、又」としては、この場合の意味を成さない）

風が又ふき出した。（又の位置をかへて「又風がふき出した」。「風がふき出した、又」としても、この場合の意味を失はない）

○晴か或は雨か。（接續詞は、その位置をかへてはその場合の意味を成さない。例へば「或は晴か雨か」。「晴か雨か或は」）

それ或は然らむ。（副詞は、よし位置をかへても、必ずしもその場合の意味を失はない。例へば、「或はそれ然らむ。」「それ然らむ、或は」。）

接續詞と副詞と相似た場合の若干の例を次に示す。

（接）　甲來り、乙も來る。

（副）　甲來り、乙も來る。

（接）　風ふき、かつ雨ふる。

（副）　風寒く、木の葉かつ散る。

（接）　地震並に火事の災害起り來る。

（副）　地震と火事との災害並に起り來る。

（接）　使者來れり。さて何用の起れるか。

（副）　使者は來れども、それはさて（そのまゝ）置くべし。

接續詞には、副詞から轉じたものが隨分多く、しかも接續と共に副詞の用をも兼ねてゐる所があるから、山田孝雄氏の日本文法論には「接續副詞」の名を設けて副詞の一種とされてゐるほどである。次に接續詞の成立について說く。（　）の中は助詞。

（名詞から）　間（あひだ）（候文などの用語）、故（に）所（で）、など。

（代名詞から）　それ（に）、それ（とも）、それ（でも）、それ（でも）、など。

（動詞から）　及び、並（に）、然れ（ども）、されば（ども）、然ら（ば）、さら（ば）、まして（ば）、併せ（て）、因つ（て）、尋い（で）、從つ（て）、併せ（て）、就い（ては）、など。

（副詞から）　また、かつ、且又、尙、はた、はたまた、尤も、但し、しかも、或は、卽ち、もしくは、さて、そも〳〵、かたく〳〵、など。

（助詞から）　で、が、して、けれども、では、でも、など。

（種々複合したもの）　しかのみならず（加之）、なかんづく（中に就くの音便、就中）しかして（而して）、さうして、しかしながら（併しながら）、いはんや（言はむや、況や）、別しては、さうだけれども、さうすると、それだけれども、など。

接續詞には、次のやうに略した例がある。中でも右の「助詞から」の成立のものの如きは、特にさうである。

大雪が降つた。（それ）で汽車がおくれた。

人が集つた。（さう）して演說が始まつた。

發車の時刻がきた。（それ）では失禮します。

風が吹く。（さう）するとほこりがたつ。

彼は遂にその發明を成就した。しかし（ながら）彼は非常な苦心をしたのである。

あの人は、智もあり、勇もあり、（しか）のみならず德もある。

（餘說）　接續詞と副詞とについて

我が國語の接續詞は、古くは漢文の和讀の感化をうけて發達し、近くは西洋文の和讀の感化をうけて發達しつつある。

文章の發頭において「夫（それ）藤原氏の遠祖は」云々、「それつら〳〵惟みるに」云々、「これ時大正十二年九月一日」云々などの「それ」「これ」は、その指し示すものは何もなくて、一種の修飾語となつてゐるのである。卽ち下の文句を修飾するもので、副詞と見なさるべきものである。

そも〳〵（抑）壇の浦にて生捕にせられける二十餘人の人々、或は首をはねて大路を渡され、或は妻子にわかれて遠流せらる。（平家物語）

の「そも〳〵」の如きも、やはり下の語句全體の修飾語で、一つの副詞と見なすべきである。なほ二つの「或は」もこゝでは副詞である。

第十章　感動詞

本書上篇には、先づ節より入るために、「物事に感動した時に發する詞を感動詞といふ」と云つてある。今詳かに言へば、感動詞は、次の二種類に分けられる。

（一）喜怒・哀樂・怖れ・驚きなどの感激によつて發するもの。例へば、

あ、いたい。
あ、しまつた。
あ、うれしや。
あ、くたびれた。
あら、たふとや。
あれ、あぶない。
あな、いさましや。
あはや、船くつがへらむとす。
あはれ、はかない事よ。
あつぱれ、日本一の剛の者よ。
いや、とんだ目にあうたわい。
えい、口惜しい。
おう、こはい。
おや、大變だ。
や、これはしたり。
やあ、お珍しい。
やれ、殘念至極。

（二）應答・呼びかけ・誘ひ・注意などの意志の傾向をあらはすもの。例へば、

あ、さうか。
あ、いいとも。
いえ、まだです。
いえ、存じませぬ。
いや、承知ならぬ。
いや、何もない。
いざ、行かむ。
いで、物見せむ。
うん、よし。
えい、よろしい。
おい、林君。
おう、おい、船頭さん。
おう、さう〳〵。
おつと、待つた。
こら、ちよつと待て。
これ、土手にのぼるな。
さあ、參らう。
すば、敵寄せきたれり。
そら、こゝにある。
それ、出よ。
それ、見よう。
どれ、心配はない。
なに、さうだらう。
なあ、よからう。
ね、さうでせう。
ねい、よろしいでせう。
はあ、さうですか。
はばあ、ごもつともで。
はい、今すぐに。
へい、有りがたう存じます。
はて、どうしようか。
どうも、はや、困りました。
まあ、何でせう。
それは、もう、にぎやかでした。
もし、あなた。
や、おのれは何するぞ。
やい、太郎冠者。
よ、待て、しばし。

右のやうに、大體二種類に分けて見られるが、しかし「ああ、うれしい」「ああ、いいとも」「えい、口惜しい」「えい、よろしい」「おう、こはい」「おう、さう〳〵」などのやうに兩方に用ひられるものがある。けれども種類によつてその發音がちがふ。例へば、

心情	高低	强弱	緩急
ああ、うれしや。	高	中	中急
ああ、かなしや。	低	混合	緩
ああ、いいとも。	中低	軟	中
えい、口惜しい。	中	强	急
えい、よろしい。	中低	軟	中
おう、こはい。	高	中	急
おう、さう〳〵。	中	軟	中緩

感動詞には、次のやうに同語または異語の複合したものもある。例へば、

やれ〳〵、お悼ましいことです。
あれ〳〵、あぶない。
おう〳〵、いたからう。
さあ〳〵、參りませう。
はい〳〵、かしこまりました。
まあ〳〵、よかつた。
もし〳〵、亀よ。
あらまあ、そんなひどい事を。
えいや、（かけごゑ）
おやまあ、ようお出でくださいました。
はてな、これは不思議だ。

以上の諸例を考へてみると、感動詞には、それに固有なものと、他の品詞から轉じたものとある。例へば、

（固有のもの）　あ、ああ、あら、あな、あはれ、いや、えい、おう、おや、おつと、さあ、なあ、れい、はあ、へい、やあ、やれ、等。

（代名詞から）　あれ、これ、こら、そら、それ、どれ、なに、等。

（副詞から）　はて、もし、まあ、もう、等。なほ名詞であるものが、別に感動詞として用ひられてゐるものもある。例へば、「ちくしやう（畜生）、しまつた」は「えい、しまつた」といふと同じである。「物のあはれを知る」といふ「あはれ」は、感動詞が名詞に轉用されたものである。

感動詞もまた副詞に似た所があり、山田孝雄氏の日本文法論には、これを副詞の一種として「感應副詞」とされてゐるほどである。しかし心情を感動的にあらはし、よし下の語句を省いても感動詞だけで獨立して意味を成し得る所にその特色がある。例へば漢文の結尾に「噫」の一語を以てし、又「これは〳〵、何と言ひやうもない花盛りよ」を「これは〳〵」とばかりと言つて啞然とした古人もある。序ながら感動詞を用ひた俳句の例を次にのせておく。

これは〳〵とばかり花のよしの山。　貞室
やあしばらく、花に對して鐘つくこと。　重頼
あらたふと、青葉若葉の日の光。　芭蕉
あなかまと鳥の巣見せぬ庵主かな。　太祇
あれ月が月がと雁のさわぎかな。　一茶
やい〳〵と醉人のいふや鉢叩き。　而后

第十一章　品詞の轉用

第十章までの中において所々に品詞の轉用を說いておいたが、今十品詞を解說し終へた際に、一まとめにその大要を說くのである。之を要するに、各品詞は必ずしも固定したものではなく、他に轉用されるものが少くないのである。例へば、

□名詞へ

（動詞の連用形から）　おもむき（趣）　つぎ（次）　かし（貸）　かち（勝）　つかひ（使）　かすみ（霞）　たゝみ（疊）　くみ（組）　こ

ほり（氷）　ひかり（光）　たより（便）　まもり（守）　をり（折）〔以上四段活用〕こゝろみ（試）〔上一段活用〕　ねぢ（捻）　はぢ（恥）　わび（詫）　おい（老）〔以上二段活用〕　たすけ（助）　はげ（禿）　あはせ（合）　おほせ（仰）　こたへ（答）　きよめ（清）　とめ（留）　みえ（見）　おぼえ（覺）　ながれ（流）　きれ（切）　あれ（荒）〔以上下二段活用〕等。（そのほか人名に「明、咲、行、持、滿、澄、笑、足、守、成、助、秀、兼、東、染、榮、」などがある。）

（動詞の終止形から）（人名）きそふ（渡邊競）　したがふ（源、順）　まなぶ（三好、學）　いさむ（近藤、勇）　すすむ（佐藤、進）　しげる（林、茂）　まもる（山田、守）　ひかる（源、光）　みのる（太田、實）　まさる（鈴木、勝）　ゆづる（遠藤、讓）　なさむ（宮田、修）〔以上四段活用〕たすく（佐藤、佐）つとむ（田中、務）〔以下二段活用〕等。

（動詞の語幹から）（普通名詞または人名）うた（歌）　まだ（定）　やす（休）　なさ（治）等。

（形容詞の連體形から）善きを取り惡しきを捨つ。弱きを助け强きを挫く。故きを溫ねて新しきを知る。遠きも近きも、危きをのがる。正しきに順ふ。等。

（形容詞の連用形から）遠くを見る。近くに居る。多くを望まず。等。

（形容詞の終止形から）　からし（辛、芥子）　あかし（明し、燈）すし（酸し、鮨）　おもし（重し、重錘）　おなじ（同じ、同一）　よしあし（善惡）等。（そのほか人名に「厚、敏、清、廣、靖、猛、忠、久、等、」などがある。）

（形容詞の語幹から）　あか（赤）　あを（青）　くろ（黑）　しろ（白）　たか（高）　なが（長）　わか（若）　わる（惡）　あまから（甘辛）等。（そのほか人名に「厚、篤、淳、清、重、繁、近、親、遠、長、蓮、安、泰、寧、正、直、久、廣、弘、武、健、猛、」などがある。）

□代名詞へ

（名詞から）對稱の「貴君、貴兄、貴殿、貴下、尊君、尊兄、尊公、諸君、諸子」などや、自稱の「小生、野生、迂生、拙者、不肖、わらは（妾）」など。

□動詞へ

（名詞から）　こじく（乞食をカ行四段に）　さうぞく（裝束をカ行四段に）　ひとりごつ（獨言をタ行四段に）　もんだふ（問答をハ行四段に）　てきたふ（敵對をハ行四段に）　れうる（料理をラ行四段に）　はいかる（ハイカラをラ行四段に）　やじる（野次をラ行四段に）　りきむ（力にマ行四段の語尾をそへて）等。

（形容詞から）（語尾を動詞的にかへて）　赤む（赤し）　危む（危し）　青む（青し）　疎む（疎し）　清む（清し）　晴む（晴し）　黑む（黑し）　白む（白し）　狹む（狹し）　憎む（憎し）　速む（速し）　圓む（圓し）　緩む（緩し）　安む（安し）　重る（重し）　茂る（茂し）　鈍る（鈍し）　逸る（逸し）　細る（細し）　弱る（弱し）等。

□副詞へ

（名詞から）昔男ありけり。私は今來た。昨日兄が歸つた。今日運動會がある。彼は平生善く働く。等。

（數詞から）柿が一つある。一日郊外に散歩す。再三友を訪ふ。等。

（形容詞から）（形容詞の連用形は副詞となる）速く、遲く、重く、輕く、深く、淺く、多く、少く、赤く、白く、古く、新しく、恭しく、輕々しく、久しく、睦じく、男らしく、雄々しく、等。

（動詞から）餘り、人情がない。詰り、結果はわるくなかちう。等。

□接續詞へ

（動詞から）東京および横濱。金・銀・銅・鐵および錫。等。

（副詞から）山また山を越ゆ。賛成あるひは不賛成。等。

□感動詞へ

（代名詞から）これ、待て。それ、出よ。どれ、始めよう。あれ、あぶない。等。

□助詞へ

（名詞から）人の驚くほど出世した。讀まれぬくらゐ字が小さい。五人ほか來ませぬ。等。

（助動詞から）僕なり君なり、だれか行かう。夏は、晝が長くて夜が短い。等。

附説

以上に説いて中で、形容詞の語尾を動詞の語尾にとりかへる例は、或は次の章の「語の構成」の第二條「接尾語をそへたもの」の所で附説してもよいのであるが、本章で説いても混雜を生ずる恐れはないと認められるのである。

第十二章　語の構成

語の要素を吟味すると、その要素の單一なものと複合の要素で構成されたものとあり、更に後者を分類して見ると、

（一）接頭語をそへたもの、
（二）接尾語をそへたもの、
（三）疊語、
（四）熟語、

の四種となる。以下にこれを説く。

（一）接頭語をそへたもの＝名詞や動詞や形容詞などの上に不獨立の語（接辭）をそへたもの。例へば、

名詞

（お）　御社、御話、御手紙、御伺、等
（おん）御時、御涙、御腹、御契、等
（み）　御位、御門、御代、深山、深雪、等
（ご）　御覽、御門、御殿、御用、御馳走、等
（さ）　小夜、狹衣、小牡鹿、早蕨、等
（す）　素足、素手、素顏、素饒、等
（うひ）初陣、初學、初産、初孫、等
（いや）彌榮、彌高、彌增、等
（もろ）諸人、諸鳥、諸手、等
（しよ）諸人、諸國、諸君、諸官廳、等
（ふ）　不便、不利、不平、不孝、不都合、等
（を）　小川、小田、小山田、小雀、等
（ま）　眞心、眞白、眞直、眞夜中、等
（き）　生酒、生絲、生藥、生醬麥、等
（にひ）新年、新田、新月、等
（えせ）似而非法師、似而非笑、等

數詞

（だい）第一、第百、第百二十五、等
（すう）數人、數十年、數百尺、等

動詞

（た）　たなびく、たばしる、たくらぶ、等
（さ）　さまよふ、さわたる、等
（いや）いやます、いやさかゆ、等
（とり）とりしまる、とりあつかふ、等
（うち）うちみる、うちきく、うちすつ、等
（け）　けをさる、けおとる、等

形容詞

（た）　たやすし、たよわし、等
（け）　けだかし、けぢかし、けうとし、等
（か）　かよわし、かぐろし、かぼそし、等

（こ）　こだかし、こにくし、等
（もの）ものさびし、ものすごし、等
（を）　をぐらし、等

（二）接尾語をそへたもの＝名詞や代名詞や動詞や形容詞や副詞などの下に不獨立の語（接辭）をそへたもの。例へば、

名　詞

（たち）親達、老人達、役員達、等
（ら）　子等、子供等、商人ら、等
（ども）家來共、役員共、女共、等
（がた）宮樣方、殿方、先生方、等
（ばら）若殿原、法師原、奴原、等
（み）　重み、厚み、深み、等
（さ）　高さ、廣さ、重さ、長さ、嬉しさ、等
（げ）　嬉しげ、哀しげ、にくげ、物憂げ、等
（め）　控へ目、境目、分け目、等
（け）　寒け、暗け、おぢけ、等
（さま）神樣、宮樣、奥樣、等
（て）　讀み手、書き手、技手、乘手、等

數　詞

（がう）一號、二萬號、等
（ばん）二番、三十三番、等
（め）　五つ目、三日目、五丁目、等

代名詞

（ら）　君等、私等、こゝら、これら、等
（たち）僕達、自分達、等
（がた）あなた方、お前方、君方、等
（ども）私共、自分共、我々共、等

動　詞

（めく）春めく、時めく、唐めく、等
（まる）高まる、强まる、弱まる、等
（びる）古びる、大人びる、鄙びる、等
（ぶる）利口ぶる、才子ぶる、學者ぶる、等
（がる）嬉しがる、哀れがる、むづかしがる、おぼつかながる、等
（ばむ）黄ばむ、由ばむ、氣色ばむ、等
（だつ）重だつ、頭だつ、氣色だつ、等
（めかす）今まかす、我物めかす、等
（ぶ）　おとなぶ、ことさらぶ、等

形容詞

（けし）露けし、豐けし、等
（たし）眠たし、けぶたし、めでたし、等
（らし）男らし、女らし、子供らし、等
（がまし）へだてがまし、あつがまし、こがまし、等
（し）　大人し、毒々し、顧はし、甚だし、等

形容動詞

（さう）悲しさうなり、嬉しさうなり、痛さうなり、泣きさうなり、等

副　詞

（ながら）憚ながら、恐ながら、後れながら、等
（すがら）道すがら、夜もすがら、等
（がてら）花見がてら、散歩がてら、等
（ごとに）年毎に、人毎に、咲くごとに、等
（づつ）少しづつ、一人づつ、十錢づつ、等

（三）疊語＝同じ語を重ねたもの。例へば、

名　詞

人々、村々、島々、山々、川々、家々、品々、木々、草々、面々、事々物々、津々浦々、等

代名詞

我々、此々、誰々、何々、等

形容詞

重々し、花々し、慣れ慣れし、麗々し、美々し、等

副　詞

各々、折々、追々、長々、益々、又々、尙々、一々、段々、度々、日々、月々、時々、夫々、樣々、萬々、必ず必ず、三々五々、年々歲々、等

感動詞

さあ〳〵、これ〳〵、やれ〳〵、あはれ〳〵、
さて〳〵、おう〳〵、いや〳〵、まあ〳〵、
もし〳〵、おや〳〵、はい〳〵、等

（四）熟語＝相異なる語をいくつか熟合させたもの。例へば、

名　詞

（名・名）春風、松山、夕日、池水、草木、海陸、山川、父母、西東、春秋、等
（名・動）花見、雨乞、水呑、田植、車引、草刈、船乘、野分、雨降、等
（名・形）手近、足弱、面長、年若、日永、夜寒、鹽辛、裏白、目高、等
（形・名）白波、淺瀨、黑船、遠山、近村、若松、老木、青雲、細道、長刀、等
（動・名）綴り方、讀物、挿畫、屋人、飼犬、痩馬、枯草、埋火、燒鹽、釣魚、等
（動・動）書取、讀み書き、受取、起臥、飲食、賣渡、買受、貰泣、等
（形・形）善し惡し、高低、白黑、遠淺、細長、薄赤、青白、等
（形・動）嬉し泣き、苦笑ひ、高飛、遠乘、甘煮、淺漬け、深入、等
（副・名）又いとこ、又家來、等
（名・名・名）夕月夜、月雪花、天地人、等
（名・助・名）木の葉、梅が枝、沖つ鳥、等
（名・動・名）鮫遣火、犬追物、水汲桶、手づけ金、鵜飼舟、磯馴松、等
（名・動・助動）命知らず、向見ず、顔見せ（役者の）、猫いらず、等
（動・助動・名）したり顔、知らぬ顔、負けじ魂、等
（動・助動・動）食はず嫌ひ、附けたり書き、等
（形・名・名）高瀨舟、若主人、赤襟巾、等
（動・動・名）見取圖、受取證、出入口、等
その他種々

動　詞

（名・動）名付く、物語る、手傳ふ、心掛く、等
（形・動）近寄る、遠のく、薄がすむ、强張る、等
（動・動）折合ふ、舞上る、引張る、駈出す、等
（副・動）しばなく（屢鳴）かつちる（且散）等

形容詞

（名・形）心淋し、名高し、氣强し、目ばゆし、等
（形・形）細長し、青白し、惡賢し、暑苦し、等
（動・形）長多し、有難し、持遠し、開苦し、等

副　詞

（名・助）元より、誠に、態と、幸に、先に、等
（動・助）總べて、極めて、みだりに（妄に等）、餘りに、あまつさへ（剩さへ）、等
（副・助）斯くばかり、斯くまで、さまで、さのみ、斯くて、等
（形・名）おほむね（大旨）おほかた（大方）等
その他種々

接續詞

（副・助）又は、且は、然も（しかも）、尙も（なほも）、等
（副・動・助）然るに（しか有るにの約）、而して（しか爲て）、等
（副・副）なほかつ（尙且）、はたまた（將又）、等
その他種々

助　詞

（助・助）なも、までも、さへも、だにも、には、こそは、なば、等

以上に語の構成について說いた所を統合して注意すべきことを次に述べる。

□（一）接頭語をそへたものは元の語と同じ品詞である。（二）その以下の三種のものは接尾語の性質または各語の事情によつて、或は元の語と同じ品詞であり、或は他の品詞にかはる。

□語の構成上には（イ）「國々、島々、小高し輕々し、花々し、名付く」のやうに、音を連濁するものもあり、（ロ）「木の葉、白波」のやうに音を轉ずるものもあり、（ハ）「然るに」（しかるに）のやうに、音を約めるものもある。次にこの音韻變化をローマ字で說明しておく。

（イ）國々（kunigumi）　島々（shimajima）　小高し（kodakashi）　輕々し（karo-karoshi）　花々し（hanabana-shi）　名付く（nazuku）

第十三章　敬語

敬語とは、談話や文章において（イ）對者の方を尊敬する言ひ方と、（ロ）自分の方を謙遜する言ひ方とを總稱するものである。さうして（イ）の言ひ方を尊敬語といひ、（ロ）の言ひ方を謙遜語と言ひわけてもよい。さらに敬語を次の四種として見られる。

敬語
- （イ）尊敬語
  - （一）對者の方を直接に尊敬する言ひ方
  - （二）對者の方を間接に尊敬する言ひ方
- （ロ）謙遜語
  - （三）自分の方を直接に謙遜する言ひ方
  - （四）物事を丁寧に述べ間接に謙遜する言ひ方

例へば、先方からの返事を「御返事」といふのは（一）であり、自分から先方へ送る返事を「御返事」といふのは（二）であり、自分が先方の宅に行くことを「參上仕ります」といふのは（三）であり、對話などで「弟が外國へ參りまして」などといふのは（四）である。

敬語については、右の四種の言ひ方をわきまへ、とりわけ名詞と動詞と助動詞とに注意すべきである。

谷川（tanigawa）　山櫻（yamazakura）　酒樽（sake-dari）　雨乞（amagoi）　目映し（mabayushi）

（ロ）木の葉（konoha）　白波（shi ranami）　船歌（funauta）　酒樽（sakadaru）　雨乞（amagoi）　目映し（mabayushi）

（ハ）然るに（shika-aru-ni=shikurumi）　片足（kata-ashi=hatashi）　見ざる（すある）なり（mi-zu-aru nari=mizaru nari）　況んや（iwa-mu-ya=iwan'ya）

第一、敬語名詞

對者の方をいふ例

貴君、貴殿、貴兄、貴下、尊君、尊兄、尊臺　○尊父、尊母、令兄、令弟、令姉、令妹、令閨、令夫人、令息、賢息、令嬢、令婿、令孫　○尊宅、尊家、貴家、貴邸、貴社、貴店　○貴地、錦地、貴國、貴郷　○佳品、珍菓　○尊簡、尊書、貴翰、貴書、○高著、貴著、玉稿、玉詠　○高見、高說、貴慮、貴意、芳情、厚志　○御察、賢察　○惠贈、惠與　○高覽、貴覽、笑覽、など。

自分の方をいふ例

小生、拙者、野生、迂生、不肖、愚生　○野父、拙母、舍兄、愚弟、拙姉、愚妹、愚妻、荊妻、愚息、愚女、愚婿、愚孫　○拙宅、弊宅、弊居、弊社、弊店　○弊地、弊國、弊郷　○粗品、粗菓　○拙簡、愚翰、愚書　○拙著、拙稿、拙吟　○愚說、愚見、微志、微衷　○恐察、愚察　○謹呈、拜呈　○拜見、拜讀、敬誦、など。

（注意）右の諸詞は從來の書簡文などに用ひられ、「貴君、貴殿、小生、拙者」の類は、對稱および自稱の代名詞に轉用されてゐる。

また聖上陛下・東宮殿下・大統領閣下・西郷殿・二宮樣・福澤先生・森氏・田中君・中村翁・瓜生刀自（刀自は主婦の敬稱）などと呼んで、名詞につける敬稱がある。

特に「み・おん・お・ご」といふ接頭語は、名詞か始として動詞や形容詞や副詞などにもそへられる敬語である。例へば、

（み）　御代、御位、御門、御手づから。

（おん）　御有樣、御事、御船出、御玉章。

（お）　御話、御言葉、お上手、お氣の毒、おめでたい、おいたはしい、おあいにくです。

（ご）　御用、御下賜、御返事、御火切に、御尤もに存じます。

「ご」は接尾語として「母御、弟御、妹御」などともいふ。

「ぎょ」は主として陛下の御事にいふ接頭語または接尾語である。例へば、

御名、御璽、御製、御物、御集、御覽、御宸、臨御、還御、通御、崩御、など。

但し、新年の「御慶」の如きは一般に用ひられてゐるものである。

第二、口語の敬語動詞

對者または他者をいふ例（括弧内の言ひかへは常語）「　」の内は用例。

いらつしやる（居る、來る、行く）「内にいらつしやる」「こちらへいらつしやい」

見える（居る、來る）「内に見える」「こちらへ見える」

あがる（飲む、食ふ）「お茶をあがる」

召しあがる（「あがる」より郷重）「どうぞこれを召しあがれ」

なさる（爲る）「御勉强をなさる」

「なさる」より郷重）「御勉强をなさる」

「御勉强を遊ばす」

召す（呼ぶ、着る、乘る、買ふ）「あちらから召す」「お羽織を召せ」

「お召しになつた」

思し召す（思ふ）「さうと思し召せ」

下さる（與へる）「重等のを下さい」

おつしやる（言ふ）「そのやうにおつしやつて下さい」

自分をいふ例

參る（行く、來る）「只今參ります」

あがる（行く、訪問する）「お宅へあがります」

あげる（與へる）「これをあげます」

差上げる（「あげる」より郷重）「これが差上げます」

いたゞく（もらう、食ふ、飲む）「お手紙をいたゞきました」「御飯をいたゞきます」

たべる（食ふ）「御飯をたべます」

申す（言ふ）「さやうに申します」

申し上げる（「申す」より郷重）「さやうに申し上げます」

承る（聞く）「承りました」

かしこまる（「承る」より郷重）「かしこまりました」

伺ふ（尋ねる、聞く）「御機嫌を伺ひます」

「お兄樣から伺ひました」

存ずる（思ふ、知る）「適當と存じます」「それは存じませぬ」

致す（爲る）「拜見致します」

仕る（「致す」より郷重）「拜見仕ります」

願ふ（賴む）「よろしく願ひます」

ございます（ある）「それは事實でございます」

（注意一）「ございます」の外の敬語動詞は敬語助動詞の「ます」をそへないでも用ひられけれども「ます」をそへる方が郷重である。

（注意二）次のやうに敬語動詞が敬語助動詞に轉用されることがある。

お呼びなさる（「呼ぶ」の尊敬）、および、になる（同上）、御覧下さる（「見る」の尊敬）、お讀み遊ばす（「讀む」の尊敬）、お受取申す（「受取る」の尊敬）

第三、文語の敬語動詞

（口語には通例用ひないもの）

對者または他者をいふ例

しらす、しろしめす（治める、知る）「御（い）まし」皇孫就きてしらせ」

「天の下をしろしめす」「世をしろしめす」

「みな人のしろしめしたらむ」

ます、ます（ある、居る）「大君は神にてませば」「曾孫にます」

「近江の大津の宮にます」

おはす（ある、居る、行く、來る）「四人の子おはしき」「なかしと聞きおはす」

「かしこにおはして」

おはします（「おはす」より鄭重）「皇子幼くおはします」「文德天皇と申す御門おはしまし」「筑紫におはしましつきて」

います（居る、ある、行く、來る）「四の宮こゝにいます」「二十五六ばかりのをのこにてこそはいませしか」

おもほす、おぼす（思ふ）「過ぎにし方おもほし出づるに」「まつりごと大事と思す」

みそなはす（見る）「政をみそなはす（觀す）」

ごらんす（見る）「あまの釣舟かと御覽するほどに」

のたまふ（言ふ）「宣ふこととては『熱し熱し』とばかりなり」

まゐる（食ふ、飲む）「御食（みけ）まゐる」「御酒まゐる」

きこす（聞く）「いとあはれにきこす」

きこしめす（「きこす」より鄭重）「天皇きこしめし悲しみ給ふこと限りなし」

たまふ（與へる）「祿をたまふ」「平の姓をたまふ」

たまはる（與へる）「軍人に賜はれる勅諭」

自分をいふ例

はべり（ある、居る）「めでたく侍り」「近く侍る人々」「ひがぎきにや侍らむ」

さぶらふ、さふらふ（ある、居る）「その事にさふらふ（候ふ）」「殿上にさぶらふ」

まゐらす（與へる）「御文（おんふみ）まゐらす」

たてまつる（「まゐらす」より鄭重）「御返事たてまつる」

きこゆ（言ふ）「事新しく聞えなすこそ老のひがごとならめ」

まかる（退出する、行く）「内裏よりまかる」「日本武尊伊勢の神宮に詣でて火倭姫尊にまかり申したまふ」

（注意一）　古文の敬語動詞が敬語助動詞に轉用された例。

鎌足、中大兄（なかのおほえの）皇子に親しみ奉る（口語…お親しみ申す）

刀を抜きかけて守り申しけり（口語…守りました）

いとうれしきことに思ひ侍り（口語…思ひます）

祝賀式を擧行致し候（口語…致します）

（注意二）　前にあげた口語の敬語は、多くは文語の敬語に由來したものであり、また特別の場合には右にあげた文語の敬語を口語の中に混用する事もある。なほ右にあげた口語および文語の敬語動詞は、その大概をあげてあるものである。

第四、敬語助動詞

◎文語の敬語助動詞には、

（一）　第六章第五節に述べた「す・さす・る・らる・しむ」を用ひる。例へば、

（す）　殿下、侍臣に宣はす。（口語…宣はれる、仰せられる）

（さす）　よく琵琶を彈ぜさす。（口語…彈ぜられる）

（る）　かなしくおぼさる。（口語、かなしく思はれる）

（らる）　よう答へたりとおほせらる。（口語…おほせられる）

（しむ）　行幸せしめ給ふ。（口語、行幸あらせられます）

（しめらる）　東宮殿下、皇位を繼がしめらる。（口語…繼がせられる）

（させらる）　主上、政を統べさせらる。（口語…統べさせられる）

右の末の三つの例は特別な敬語であり、口語ではおもに皇室の御事に用ひる。

（二）　文語の敬語動詞を轉用する。（その例は前出）

◎口語の敬語助動詞には、

（一）　第六章第五節に述べた「れる・られる・せられる・させられる・ます」を用ひる。

（二）　文語の敬語動詞を轉用する。例へば、

（なさる）　お歸りなさる。御覽なさる。

（になる）　お讀みになる。御出席になる。

（くださる）　御出でくださる。御出席下さる。

（まうす）　お親しみ申す。お立たせ申します。

（つかまつる）　お受けつかまつる。承知仕りました。

下篇　文の解說

文の解說は、文の成立、文の組立の種類、文の常態と變態、文の叙述の種類、などを說くのを本旨とする。これを一言でいへば、文中の諸語の位置を整へる方法を說くことを本旨とするもので、卽ち文章篇であり、或は措辭論とも呼ばれてゐる。

左に從來の文法書に就いて回顧し、國文法の文章篇の由來する所と諸說の異同のある所との大略を揭げて參考とする。

措辭に關する研究は、明治時代の前にもあつたのであるが、しかし文法における文章篇の研究の發達は、西洋の文法學の傳來後、程經て明治二十年前後からの事である。明治二十四年刊行の高津鍬三郎氏の日本中文典の如きは、その初期における出色のものである。

同書は、文の成分を主部（主詞並に處置詞）と屬部（限定詞）とに分け、文の種類を單文と重文と複文とに分けてある。その單文といふ名は、今もいふ單文と同樣であるが、その重文と複文といふ名は、今いふ重文と複文とはあべこべになつてゐる。卽ち、その重文とは「冬來れば雪ふる」の如き complex sentence なをして云ひ、その複文とは「雨ふり風ふく」の如き compound sentence をさして云ふのである。同書はその當時の中等教育にも用ひられた。

さて明治三十年に刊行された文法の名著は大槻博士の廣日本文典である。同書は、思想の完結したものを文または文章とよび、思想の未だ完結しないものを句とよび、文の成分を主語と說明語と客語と修飾語とに分け、主語にその修飾語を加へて主部とよび、說明語にその修飾語を加へて說明部とよび、客語にその修飾語を加へて客部とよび、今いふ單文をたゞ文と稱へ、その他の文をすべて聯構文（二文または二文以上を聯絡する文）と稱へてある。さうして聯構文の中には、（イ）「忠孝は國體の精華なり。」（ロ）「仁義禮智信は、五常の德なり。」（ハ）「東京の都は、面積廣く、人口多し。」の如き例をもあげてある。（イ）の如きを聯構文とするのは、「忠は國體の精華なり、孝は國體の精華なり。」を合はせた文と見ての事である。同書の文の種類の說き方は今普通には用ひられないけれども、その文の成分の說き方の要領は廣く行はれてある。

廣日本文典の翌年に出た白鳥菊治氏の新撰日本文典は、左のやうに文の種類を二種三類に分けてある。

- 文
  - 單文
  - 複文
    - 重行複文（各文節が對立する）
    - 關係複文（主眼文に附屬文がそふ）

なほ右の文典と同年に出た三土忠造氏の中等國文典は、文の種類を今いふ名のとほり、單文と複文と重文とに分けてある。同書の文の成分は凡そ廣日本文典の說き方を用ひ、たゞ客語（何をといふ語）の外に補足語（何にといふ語）の名目をも設けてある。

明治三十三年に出た岡田正美氏の新式日本文典には、英語にいはゆる word を言といひ phrase を句といひ clause を節といひ sentence を文といつてある。同三十四年に出た草野清民氏の日本文法には、「何が、何に、何より、何

まで」といふ類の語をすべて客語といひ、「忠臣なり、大將たり、雪の如し」といふ類の語を補語といひ、且つ特に總主語の名目を設けて、つぎのやうに總主語をもつ文のあることを唱へてある。

（總主語）象は（主語）體（說語）大なり。（總主語）熊は（主語）力（說語）强し。

同年に出た岡倉由三郎氏の「文及文の解剖」はジュエル氏の解文圖式によつて工夫されたもので、つぎの例のやうに說き示されてある。

○例題「烈しき寒氣は、いつも瓶の水を堅き氷となす。」

（屬部）烈しき（主詞）（寒氣。は）（主部）（屬部）瓶。の（目的詞）〈水。を〉（目的部）（屬部）堅き（補足詞）〈氷。と〉（補足部）（述詞）いつも（述詞）（なす）（述部）

因みに云ふことは、「中等新國文法」のやうに「目的部」と「補足部」とをすべて「客部」とし、その他の用語をもかへた場合には、つぎのやうに圖式を變更すべきである。

（修飾語）烈しき（主語）（寒氣。は）（主部）（修飾語）瓶。の（客語）〈水。を…氷。と〉（客部）（修飾語）堅き（客語）（なす）（述部）（修飾語）いつも（述語）

また同年に出た松平圓次郎氏の新式日本文典には、つぎのやうな解文圖式を用ひてある。

- 係屬語……
- 係屬語……
- 係屬語……
- 係屬語……
- 係屬部……
- 主語
- 補充語—目的語又客語—動語

右にいふ係屬語の係屬語は修飾語の修飾語のこと、補充語は補足語のこと、動語は述語のことである。なほその書には、phrase を連語、sentence を句と云つてある。

明治卅七年に出た芳賀博士の明治文典には文の成分のうち、「兄、字を弟に敎ふ」の「字を「弟に」の如きを客語といひ、「その都は東京といふ」「予は東京へ行く」の「東京と「東京へ」の如きを補語といひ、また單語や連語などの名をも用ひ、文の種類を三土氏と同じく單文と複文と重文とに分けてある。三土氏の文典と芳賀博士の文典とは、その前後に廣く用ひられたものである。

明治四十一年に出た三矢博士の高等日本文法には、文の成分を主語と叙述語と客語（何を、何に、何へ、何より、何まで、何にて、何と、の類）と修飾語との四部とし、その外に獨立語（太郎や、君よ、はい、あはれ、の類）の名目を設け、文の組織上の種類をつぎの四種に分けてある。

- 單文（例へば、「花さく」。「太郎と次郎とは兄弟なり。」「象は體大なり。」など）
- 複文（例へば、「我は牧笛のかける虎を見たり。」「月明なれば星稀なり。」など）
- 重文（例へば、「花さき、鳥うたふ。」「月明に、星稀に、鳥鵲南に飛ぶ。」など）
- 混交文（例へば、「花さき鳥なく春の景こそをかしけれ。」（重文を含む複文）「先生の德、山高く水長し。」（重文を含む單文）「雨ふれば我讀書し、天晴るれば彼耕作す。」など）

明治卅九年に出た吉岡郷甫氏の日本口語法には、文を單文（說明節より外の節をふくまぬ文）と複文（說明節より外の附屬節をふくむ文）と合文（二つ以上の獨立節から成る文）と混文（複文と合文と混成した文）との四種に分けてあつたが、同四十五年に出た同氏の文語口語對照語法には、文を單文（節をふくまぬ文）と複文（並立節とふくまずして從屬文をふくむ文）と重文（二つ以上の並立節をふくむ文）との三種に分けて、しかも「文の種類の混合」を說いてある。

大正十一年に出た山田孝雄氏の日本文法講

義には、明治四十一年に出た同氏の日本文法論のやうに、連語をば主語と述語との關係がない語の集合とし、句なぼ

喩體の句（「うるはしき月かな。」「月の影のさやけさ。」のやうに體言を對象として呼び掛けるもの）

述體の句（「花咲く。」「花は紅なり。」のやうに主語と述語との關係のあるもの）

さて述體の一つの句とは、主語と述語との一回關係のあるものとし、さうして文の種類をつぎのとほりに分けてある。

- 文
  - 單文（「花咲く。」「鳥鳴く。」「花は紅なり。」のやうに一つの句）
  - 複文
    - 重文（「花咲き、鳥鳴く。」のやうに前の句と後の句と對等で成立つもの）
    - 合文（「春來れば、鳥鳴く。」のやうに伴句と主句とで成立つもの）
    - 有屬文（「德高き人は敬はる。」「かの花紅なるは椿なり。」「象は體大なり。」のやうに附屬句をもつ文）

右のほか文章論に關する諸說もあるが、あまり長くなるから、參考としてこれ位に止めておく。本書は現今普通の說き方に從つて、文の成分を主語と述語と客語と修飾語とに分け、文の種類を單文と複文と重文とに分けてある。以下次第にこれを解說する。

第一章　文の成立

第一節　語と連語と節と文

この題目の名を英語の名にくらべて云へば語はワード（word）に當り、節はクローズ（clause）に當る。文はセンテンス（sentence）に當る。

語には單語があり熟語があつて、それ〴〵觀念（idea）をあらはしてゐる。中篇第十二章語の構成に說いた（一）接頭語をそへた語と（二）接尾語をそへた語と（三）疊語とは熟語に準じて可いのである。しかし接頭語や接尾語は小辭であるから之を輕く見なして（一）と（二）とを單語に準じても可い。

つぎに二つ以上の單語または熟語が意味のあるやうに連なつて複雜な觀念をあらはすもの（文を成してはゐないもの）を連語といふのである。連語は英語のフレースに似てはゐるが、フレースほど緊密に連結されてゐないものまでも包含させて呼ぶのである。

文は、上篇に說いたやうに、少くとも主語と述語とを持つて一つのまとまつた思想をあらはすものである。文には

花咲く。　鳥鳴く。　春はのどかなり。

のやうに、主語と述語との關係が一回で成立つ簡單なものもあり、また

（花咲く）（春はのどかなり。）　主節

のやうに、主語と述語との關係が二回で成立ち、しかもその二つは主從の關係をもつてゐるものもある。かやうな場合に、その部分となつてゐる文を特に節といふ。その主となる節を主節（principal clause）といひ、主節に從屬する節を從節（subordinate clause）といふ。主節の「春は」といふ主語からいへば、從節の「花咲く」はその修飾語である。また

（花咲き、鳥鳴く。）　並立節　第一節　第二節

櫻花は五瓣で、望月は眞圓く、白雪は六角だ　並立節　第一節　第二節　第三節

のやうに、それは主節と從節との關係から成立つてゐるのではなく、各節が對等に並び立つてゐるものを並立節（coordinate clause）といひ、その順序によつて第一節、第二節などといふ。また

（花咲き、鳥鳴く。）　並立節　第一節　第二節
（春はのどかなり。）　主節

のやうに上部の第一節と第二節とは並立節であるが、主節に對しては從節であるものもある。卽ち、主節の「春は」といふ主語からいへば、從節の「花咲き鳥鳴く」はその修飾語である。また

（春來れば、花咲き、鳥鳴く。）　從節　第一節　第二節　並立節
（花咲く春はのどけく、日照る夏は暑く、風そよぐ秋は涼しく、雪ふる冬は寒し）　從節　主節　第一節　從節　主節　第二節　從節　主節　第三節　從節　主節　第四節

のやうに、並立節が主節となつて之に從節のそふものもある。また

のやうに、四つの並立節のおの〳〵が主節と從節とから成立つものもある。

すべて種々の語句文章は、或は連語であり、或は節をふくみ、或は文であり、また文は、或は節をふくまない。さうして「足引の山鳥の尾のしだり尾の」といふやうに、長くても連語であることもあり、また「山高し。」「尾長し」といふやうに。短くても文であることもある。また「花さく山見ゆ」「雪のふる夜は寒し」といふやうに、短い文でも節をふくむことがあり、「鏡の如き黃海は、時の間に曇りそめたり。」「世界大戰の講和會議は、西曆一千九百二十年にパリで開かれた。」といふやうに、長い文でも節をふくまないこともある。

第二節　連語の種類

連語の四種類

一、名詞的連語とは名詞の資格をもつ連語をいひ、名詞連語とも呼ぶ。例へば、人に惠む（連語の主語）は、人に惠まるゝ（連語の客語）より幸なり。惠むの（連語の主語）は、惠まれるの（連語の客語）より幸である。

二、形容詞的連語とは形容詞の資格をもつ連語をいひ、形容連語とも呼ぶ。例へば、吉野の（主語の修飾語）櫻咲けり。始皇帝は不老不死の（客語の修飾語）藥を求めしめたり。

我等は奈良の東にある（客語の修飾語）三笠山に登りたり。

三、副詞的連語とは副詞の資格をもつ連語をいひ、副詞連語とも呼ぶ。例へば、未練は露ほども（連語の修飾語）なし。夕烏三つ四つ二つなど（連語の修飾語）とび呼く。飛行機が自由に（連語の修飾語）鳥の如く（同上）飛ぶ。

四、述語的連語とは述語の資格をもつ連語をいひ、述語連語とも呼ぶ。例へば、大空澄み渡れり。（連語の述語）螢とびちがひたり。（連語の述語）

東宮殿下、臺灣に行啓あらせられたり。
（連語の述語）

（附言）英語でよべば、名詞的連語を noun phrase, 形容詞的連語を adjective phrase, 副詞的連語を adverbial phrase, 述語的連語を假に predicative phrase といふ。

第三節　節の種類

前に述べたやうに、まづ節は、

（イ）並立節　例へば「柳は緑に、花は紅なり。」の如く、一文の中に對等にならび立つ節。

（ロ）主節　例へば「春來れば、百花開く。」の後半の如く、一文の中の主となる節。

（ハ）從節　例へば「春來れば、百花開く。」の前半の如く、一文の中の主節に從屬する節。

の三種類となり、更に從節はつぎの四種類となる。

一、名詞的節とは名詞の資格をもつ節をいひ、名詞節とも呼ぶ。例へば、

櫻の咲く（節の主語）は、三月よりなり。
我等は、時節の到來する（節の客語）を待つ。
往來する人、犬の吠えつく（節の客語）に迷惑す。

二、形容詞的節とは形容詞の資格をもつ節をいひ、形容節とも呼ぶ。例へば、

雪の降る（節の修飾語）夜は寒し。
櫻花匂ふ（節の修飾語）時こそのどかなれ。
我等は、寺ありて（節の修飾語）見ばらしのよき（同上）山に登れり。

三、副詞的節とは副詞の資格をもつ節をいひ、副詞節とも呼ぶ。例へば、

風吹けば（節の修飾語）花散る。
雨ふらば（節の修飾語）明日の遠足延び

む。
百雜起るとも（節の修飾語）志は屈せられず。

四、述語的とは、述語の資格をもつ節をいひ、述語節とも呼ぶ。例へば、

象は體大いなり（節の述語）。
桃は花美しく（節の述語）、實うまし（同上）。
日本は風景もよく（節の述語）、氣候もよし（同上）。

（附言）英語でよべば、名詞的節を noun clause, 形容詞的節を adjective clause, 副詞的節を adverbial clause, 述語的節を假に predicative clause といふ。

第四節　文の主部と述部と客部

文の四成分である主語と述語と客語と修飾語とは、それぞれ一語の場合もあり、節の場合もある。それで最も簡單な文は、「花咲く」のやうに、一語の主部と一語の述部とから成立つけれども、複雜な文は、本書の例の「我等の一行は（主部）、郵船會社の汽船にて、風景よき瀬戸内海を（客部）、おもしろく航海せり（述部）。」のやうに、

修飾語と主語＝主部
修飾語と客語＝客部
修飾語と述語＝述部

とから成立つのである。また客部と述部とを一括して叙述部とする說き方もある。さうして一語の中に、主語でも、客語でも、述語でも、おの〳〵いくつも並ぶことがある。例へば、

櫻も
藤も
菊も
観賞植物なり。

この文には、主語が三つあるけれども、主部と述部との關係は一回だけである。

五色は
青と赤と黄と白と黑と
なり。

この文には、客語が五つあるけれども、主部と述部との關係は一回だけである。

火の光
忽ち見え
忽ち消えたり

この文には、述語が二つあるけれども、主部と述部との關係は一回だけである。

また主語や客語や述語のそれ〴〵の修飾語がいくつも並ぶことがあり、また修飾語に修飾語がつくこともある。例へば、

大いなる
珍らしき
（主語の修飾語二つ）木あり。

甚だ（修飾語の修飾語）大いなる木あり。

我等は
二つの
大いなる
（客語の修飾語二つ）飛行船を見たり。

富士山は
けだかく
美しく
（述語の修飾語二つ）聳ゆ。

富士山は、いと（修飾語の修飾語）けだかく聳ゆ。

第二章　文の組立の種類

文の組立の種類には、前に掲げた所だけでも諸說の異同があつて、例へば單一の文と聯構の文とに分けるのもあり、或は單文と複文と重文と混文とに分けるのもあり、或は單文と複文とに分けて更にその複文を二種または三種に分けるのなどもある。しかし現今普通に多く行はれてゐるのは、英文法などでも普通に行はれてゐる分け方のやうに、

單文（simple sentence）
複文（complex sentence）
重文（compound sentence）

の三種類に分けることである。本書はこの三分類を用ひてある。

第一節　單文

（イ）花（主部）、咲く（述部）。
（ロ）さし昇る朝日（主部）、淺緑のみ空に（客部）、輝く（述部）。
（ハ）兵庫に出征せむとする忠臣楠木正成は（主部）、長子正行を攝津の櫻井驛より故郷の母の許へ（客部）、歸らしめたり（述部）。

右のやうに、主部と述部との關係が單に一回だけ成立つ文を單文といふ。（いひかへると單文とは、節をもたない文である。）

（注意一）すべての文において客語は必要がなければ（イ）の例のやうに之を用ひるに及ばないし、必要があれば（ロ）や（ハ）の例のやうに之をいくつ用ひてもよい。

（注意二）前節に示した例のやうに、一つの主部にいくつかの主語があり、また一つの述部にいくつかの述語があつても、文の組立において主部と述部との關係が單に一回だけ成立つものは、やはり單文である。

（注意三）（ハ）の例の中の「忠臣楠木正成」「長子正行」のやうな場合に、「忠臣」は主語の「正成」と同格であり、「長子」は客語の「正行」と同格である。しかし「忠臣

の正成」、「長子の正行を」といへば、「忠臣の」は「正成」の修飾語であり、「長子の」は「正行」の修飾語である。

（注意四）「象は體大いなり。」のやうな文を單文と見なす說き方もあるが、本書はこの類の文をも複文と見なすのである。その理由はつぎの複文の條に說く。

第二節　複文

（イ）能ある（形容詞的節一つ）、鷹は爪をかくす（主節一つ）。

（ロ）花咲き鳥鳴く（形容詞的節二つ）、春はのどかなり（主節一つ）。

（ハ）百雷起るとも（副詞節一つ）、志は屈せられず（主節一つ）。

（ニ）雨降れども風吹けども（副詞的節二つ）、休みたること更になし（主節一つ）。

右のやうに、一つの主節と一つまたはいくつかの從節とをもつ文を複文といふ。（いひかへると、複文とは、唯一つの主節の外に、少くとも一つの從節、多きは無制限の從節をもつ文である。）

（注意一）「象は體大いなり。」「日本は風景もよく、氣候もよし。」のやうに、述語的節をふくむ文も、複文の一種と見る。ただこの場合には從節が主節の述語の地位にあるので、主節の述語が空位のやうになつてゐる。それで「象は體大いなり。」のやうに一つの述語節をもつ文を單文の一種と見る說き方もあるけれども、「日本は風景もよく、氣候もよし。」のやうにいくつかの述語節をもつ文であると、之を單文と見るのは不合理になる。それで本書は、一つでもいくつでも述語的節をもつ文を、すべて複文と見るのである。

しかし、かやうな文は、他の複文とは趣を異にする所があるので、落着きのわるい所があるから、「象は」を「體大いなり」の總主語または文主とし、「日本は」を「風景もよく氣候もよし」の總主語または文主とし、之を總主語をもつ文または文主をもつ文といふ說き方もある。

（注意二）「學校は校長これを管理す。」のやうな文は、「學校は」が主語であり、「校長これを管理す」は述語的節のやうになつてゐるから、複文の一種と見る。

御高名は（余）風にこれを聞けり。

春と夏と秋と冬とは（我等）これを四季と總稱す。

林子平・蒲生君平・高山彦九郎（世の人）

この三人を寛政の三奇士といふ。

のやうな文も、省略の語を補充して之を複文の一種と見る。

しかし、かやうな文は他の複文とは趣を異にしてゐる所があるので、「學校は」は「これ」の內容を先づ提示する語であるとし、提示語をもつ文といふ說き方もある。

第三節　重文

（イ）山高く、水清し。（單文二つの並立節）

（ロ）水は方圓の器に從ひ、人は善惡の友による。（單文二つの並立節）

（ハ）櫻は笑ひ、雲雀は歌ひ、蝶々は舞ふ。（單文三つの並立節）

（ニ）彼の舞舌は獅子の吼ゆるが如く、彼の盤度は大鵬の翔くるが如し。（複文二つの並立節）

右のやうに、文の本幹に二つまたは三つ以上の並立節をもつ文を重文といふ。（いひかへると、重文とはその本幹が二つ以上の並立節から成立つ文である。）

（注意一）なぜ「文の本幹に」と言ひそへたかといふに、「花咲き鳥鳴く（並立節）であるが、下にある主節につく從節であるから、これは「文の枝條に」もつ並立節）春はのどかなり。」のやうな複文を誤つて重文であるかのやうに見ることを防ぐためである。つぎの例の中の並立節も、文の本幹にもつてゐるものではない。

彼は、山美しく水清き處に住めり。

象は、體大きく目小さく牙長し。

學もあり才もあれども、殘念ながら體弱し。

（注意二）重文には、（イ）（ロ）（ハ）の例のやうに、いくつかの單文と單文とが並立することもあり、また（ニ）の例のやうに、いくつかの複文と複文とが並立することもあり、また

梅の花は芳しく開き（單文）、鶯の音は天女が樂をかなづる如く聞ゆ（複文）。

のやうに、いくつかの單文と複文とが並立することもある。

それでは、いくつかの重文と重文とが並立することがないかと云ふに、例へば、

春は暖かに、夏は暑し。

秋は冷かに、冬は寒し。

を合併して、「春は暖に、夏は暑く、秋は冷かに、冬は寒し。」と云へば、重文と重文とが並立するといふ理窟も立たないではないが、之をいくつかの單文と單文との並立と說けば足りるのである。あまりに理窟ばると、却つて難解に陷ることを恐れて、いくつかの重文と重文との並立といふことは云つてないのである。

（注意三）重文または複文における並立節には、「志は堅く、かつ望は遠し。」「智もあり、仁もあり、また勇もあり。」「かの人は、智もあり、仁もあり、また勇もある名將なり。」のやうに、接續詞の加はることがある。

第三章　文の常態と變態

文の常態と變態といふことは、思想を發表する言語の順序卽ち語序（word-order）を說くのである。その語序には、絕對の定めはなくて、それ〴〵の國語によつて異同がある。しかもそれ〴〵の國語の語序が凡そ定まるまでには、その祖先の人々が漸次同じ樣なならべ方に落ち合つてくるやう、幾代も幾代も鍛錬したのである。その餘い心理作用の結果が、その國語の語序である。例へば、

日本語では、

「猫が（主語）鼠を（客語）捕る（述語）。」

漢文（古代支那語）では、

「猫（主語）捕（述語）鼠（客語）。」

英語では、

"The Cat（主語）catches（述語）the mouse（客語）."

聾啞の手語では、

「鼠（客語）猫（主語）捕（述語）。」

といふのが文の常態である。漢文や手語の如きは謂はゆる孤立語であるから、最も語序が大切である。ラテン語やドイツ語の如きは語尾の屈曲に富んでゐるから、語序を變じても了解し得る便利が多いのであるが、英語の如きは語尾の屈曲が漸次減少してきたから、漢

文に近似した所があり、從つて語序の大切さを增したのである。我が日本語の如きは「てになをは」の助けがあるので、語序を變じても了解し得る便利が多いのである。しかし我が日本語には日本語としての普通一般の語序即ち文の常態があり、さうしてその文の變態も、了解し得る程度において認められるのである。それで本章には特に文の常態と變態とに就いて說くのである。

第一節　文の常態

（イ）美しき（修飾語）花（主語）咲く（述語）。

（ロ）燕（主語）は　遠く（修飾語）飛ぶ（述語）。

（ハ）余（主語）は　珍らしき（修飾語）鳥（客語）を　見（述語）たり。

我が國語の文の組立は、主語は前にあり、述語は後にあり、客語はその中間にあり、修飾語はそれ〴〵修飾される語の直上あるを常態とする。

梅も藤も菊も（季節の順）觀賞植物なり。

動物は發生し成長し而して死す（因果の順）。

この美しき犬いなる（意味の輕重と語路の流暢との順）鳥は孔雀なり。

富士山はけだかく美しく（同前の順）聳ゆ。

正成はその子正行を櫻井驛より故鄕の母の許へ（時と所との順）歸らしめたり。

さうして主語や述語や客語や修飾語が、それぞれいくつも並ぶ場合には、その順序は、或は時や所や因果の關係の前後に從ひ、或は意味の重い方を前にし、或は語路が流暢であるやうに並べ、またはその二つ又は三つの事情を兼ねて定めるのである。もしこれらの事情を考へないで順序を變ずれば、その文は不自然なものとなる。

修飾語はそれ〴〵修飾される語の直上にあるを通例とするけれども、述語の修飾語の位置だけには、次の三樣式がある。

一、述語の直上にある場合。例へば、

雪はいよ〳〵降りしきる。

櫻花吹雪の如く亂れ散る。

二、客語またはその修飾語の上に隔たつてある場合。例へば、

日は已に西山に傾きぬ。

余は獨り洛北の紅葉狩に行けり。

三、主語またはその修飾語の上に隔たつてある場合。例へば、

昔源義家といふ武將ありけり。

或時名將の義家は飛雁の列を亂すを見て、敵の伏兵あるを知り、これを擊ち破りたり。

○參考

つぎに漢文及び英語の語序を我が國語の語序と大略比較して見よう。漢文の說明は、清の馬建忠の「馬氏文通」等に據り、英語の說明はヘイン氏（A. Bain）の高等英文法（Higher English Grammar）などに據る。

一、主語は述語に先だつ。（國、漢、英、同じ）

○星は閃く。　星閃。The stars twinkle.

○晝は明るい。晝明。The day is clear.

二、客語は主語と述語との中間に位する。（國）

他動詞の述語は客語に先だつ。（漢、英）

但し、客語を先にするのもある。（漢）

○我等は勝を獲た。

我等獲勝。

We gained a victory.

○余は東京に來た。

余來於東京。

I came to Tōkyō.

○この山はあの山より高い。

此山高於彼山。

This mountain is higher than that mountain.

○彼は刀で人を殺した。

彼以刀殺人。

He killed a man with a sword.

三、修飾語は修飾される語に先だつ（國、漢）

修飾語は修飾される語に先だつ。但し、述語を修飾するものは述語の後または中間に位する。（英）

○賢い人。　賢人。　A wise man.

○甚だ善い人。甚善人。A very good man.

○彼は善く走る。彼善走。He run well.

○余は突然君に遇うた。余突然遇君。

I met you unexpectedly.

（注意）なほ次項の例をも見よ。

四、客語のある場合に、述語の修飾語は客語の先に位する。（國）。同じ場合に、述語の修飾語は述語または客語の先に位する（漢）。同じ場合に、述語の修飾語は述語の中間または客語の後に位する。（英）

○彼は毒かに此の事件を取調べた。

彼毒究此事件。

He has carefully studied the case.

○余は決して君の親切を忘れまい。

余決不忘汝厚情。

I shall never forget your kindness.

○我等は昨日この市に來た。

余等昨日來於此市。

We came to this city, yesterday.

○彼は昨日刀で人を殺した。

彼昨日以刀殺人。　He killed a man with a sword, yesterday.

五、助詞または助動詞は、助けられる語の後に位する。（國）

助詞または助動詞は、助けられる語の先に位する。（英）

助詞は助けられる語の後または先に位し助動詞は動詞の先に位する。（漢）

○イギリスの王。英國之王。The king of England.

○甲は乙より大きい。　甲大於乙。

A is larger than B.

○余は行かう。　余可行。　I will go.

○汝は行かれよう。汝可得行。I may go.

（注意）その他の詳細については、前に掲げた書物などを參考されたい。

第二節　文の變態

文の常態とは語序の通常なものを云つたのであるから、文の變態とは語序の通常でないものを云ふのである。文の變態に次に列擧する種類がある。

（一）倒置　とは、英語に之をハイパーバトン（hyperbaton）と云ひ、特に或語句の意味を强め、または語調を整へるために、文の成分の位置を顚倒させるのである。

例へば、（括弧の内のは常態）

なつかしや、我が故鄕。（我が故鄕なつかしや）

我聞く、敵國に內亂ありと。（我、敵國に內亂ありと聞く）

圖らざりき、今日また源氏の興るを見むとは。（今日また源氏の興るを見むとは圖らざりき）

歌書よりも軍書にかなし、吉野山。（支考）（吉野山、歌書より軍書にかなし）

誰に聞きしか、その事を、君は。（君はその事を誰に聞きしか）

かゝる時さこそ命の惜しからめ、かれて亡き身と思ひ知らずば。（太田道灌が暗殺される時の歌）（かれて亡きみと思ひ知らずば、かゝる時さこそ命の惜しからめ）

棹はうがつ、波の底の月を。舟はおそふ、海のうちの空を。（棹は波のそこの月をうがつ。舟は海のうちの空をおそふ）

漁隱叢話に、高麗の使が「水鳥浮遊沒、山雲斷復連」と詠じたのに、唐の賈島がその下句を聯れて「棹穿波底月、舡壓水中天」と詠じ、使臣を感歎させたと云つてある。土佐日記には「棹はうがつ、波のうへの月を。」と譯してある。

餘例一

死にのこれ一つばかりは秋の蟬。（也有）

（秋の蟬一つばかりは死にのこれ）

春雨のふるは涙か、櫻花ちるを惜しまぬ人しなければ。（大伴黑主）（櫻花ちるを惜しまぬ人しなければ、春雨のふるは涙か）

請ふ、君が詳細に說明せられんことを。（君が詳細に說明せられむことを請ふ）

（二）省略　とは、英語に之をエリプシス（ellipsis）と云ひ、用語を簡潔にし、または餘韻を存するために、文中の語を省略するものである。例へば、

油斷大敵。（「油斷は大敵なり」を省略した詞）

これこそ敵の運の盡くる所の死にぐるひ（なれ）よ。（太平記卷七の文で、こその結詞なれを省略したもの）

餘例一二

博愛を仁と云ふ。（韓退之の原道の語）（人博愛を仁と云ふ）

目には青葉、山ほとゝぎす、初がつを。（素堂）（目には青葉を見、耳には山時鳥を聞き、口にはかつをを味ふ、好き季節なるかなの意）

春雨のふるは涙か、櫻花ちるを惜しまぬ人しなければ。（大伴黑主）（春雨のふるは櫻花の散るを惜しむ人の涙なるか云々の意）

（三）感動と呼掛と命令。「あら、ありがたや」「あゝ熱し。あゝ苦し。」のやうに、感動卽ちエキスクラメーション（exclamation）は感情の發露であるから、思想の樣式に拘らないで、主語と述語との具備を必要としないのである。また「少納言よ、云々」「やあ、正綱、云々」のやうに、呼掛は對者を名ざして呼ぶもので、多くは文の上に獨立する。また「前へ進め。」のやうに、命令においては、主語などに當るものが當然分つてゐる場合には、之をいふ必要がなく、直ちに述語などを云へばよい。すは、城の中より打出でたるは。（太平記卷七の文で、すはには素破の當て字をしたのもある所の感動詞。はは感動をあらはす助詞）

少納言よ、香爐峯の雪はいかならむ。（枕の草子）（一條天皇の皇后定子が清少納言に仰せられた御詞で、少納言は白樂天の「香爐峯雪撥簾看」といふ詩句を應用して奉答に代へたのである）

やあ、正綱、頼將が十四歲に遇ふこと、再びやあるべき。（藩翰譜の紀伊德川家の條）（大阪夏陣の時に、大河內正綱に向つて、紀伊德川家の祖頼將が慨嘆して言つた語）

前へ進め。（練兵の用語）

この土手に登るべからず。警視廳。（東京府下で公衆に注意してある立札の語）

餘例一二

嗚呼忠臣楠子之墓。（湊河八字の碑で、感歎の詞藻を用ひたもの）

判官（はうがん）いかに、與一、あの扇のまんなか射て敵に見物させよかし」と宣へば、（平家物語卷十一の文で、屋島の戰の時に判官義經が那須與一に向つての語、いかには感動詞、與一は呼掛の語）

此の處塵芥棄つべからず。（誰人も此の處に塵芥を棄つべからずの意）

（四）掛詞　とは、和歌や美文において、一語を同時に二樣の意味に用ひて、上下の意味をかけあひにすることを云ふ。例へば、

これは〳〵とばかり花のよしのやま。（貞室）（花の好しに吉野山とを掛合にした詞）

いつか我がみのをばり（身の終、美濃尾張）なる、熱田の八劔伏し拜み、汐干に今やなる（爲る）みがた（鳴海潟）（太平記）

餘例一二

立ちわかれいなば（往なば、因幡）の山の峯に生ふるまつ（松、待つ）とし聞かば今歸りこむ。（在原行平が因幡守となりて行くときに京なる家族に詠みて與へた歌）

七重八重花は咲けども山吹のみの（實の、簑）一つだになきぞかなしき。（この山吹の古歌を以て少女が、夕立にあうた太田道灌に對して雨具のないのを詫びたと言ひ傳へられてゐる）

その手はくはな（食はぬ、桑名）の燒きはまぐり。（地口）

第四章　文の敍述の種類

「修辭法は文法の最上なものである」卽ち "Rhetoric is the best of grammar." といふことがある。文法において從來說く文の敍述の種類は修辭法的分類の一である。その種類は、つぎの四種類に分けられてゐる。

一、平敍文（the descriptive sentence）
二、疑問文（the interrogative sentence）
三、命令文（the imperative sentence）
四、感動文（the exclamative sentence）

一、平敍文

平敍文は、物事を有りのまゝに敍述する文である。例へば、

富士の峯かすかに見ゆ。（奥の細道）

物のあはれは秋こそまされ。（徒然草）

かれは勇義忠孝の士なり。（「奥の細道」に和泉三郎忠衡を評した語）

餘例一二

驕れる者久しからず、たゞ春の夜の夢の如し。（平家物語）

行く川の流れは絶えずして、しかも本の水にあらず。（方丈記）

松の響、波の音、いづれと聞き分きがたし。湖に渡せる橋を瀋名と名づく。（東關紀行）

二、疑問文

疑問文、疑問をあらはし、または反語を用ひる文である。例へば、

榮枯は夢か幻か。（新體詩「城山」）

花は盛りに月は隈なきをのみ見るものかは。（徒然草）

餘例一二

峯の嵐か、松風か、尋ぬる人（小督局）の琴の音か。（平家物語）

佛はいかなるものにか候ふらむ。（徒然草）
造化の天工、いづれの人か筆をふるひ詞を盡くさむ。（「奥の細道」松島の條）

三、命令文

命令文は、命令や願望や勸誡をあらはす文である。例へば、

各員一層奮勵努力せよ。（日本海海戰の時の（東郷大將の訓示の話）

かの扇のかなめぎは射させでたばせたまへ。（平家物語の那須與一の話による）

東風ふかば、にほひおこせよ、梅の花、あるじなしとて、春をわするな。（菅原道眞）

餘例一二

赦され無ければ、都までこそ叶はずとも、せめては此の船にて九國（九州）の地まで着けてたべ。（平家物語の俊寛の話による）

痛蛙まけるな一茶こゝに在り。（一茶）

風よ吹け吹け。紙鳶あがれ。（童謡）

いそがばまはれ。（諺）

四、感動文

感動文は特に感動をあらはす文である。例へば、

あな、勇ましの人々や。（新體詩「城山」）

すは、城の中より打出でたるは。（太平記）

名月を取つてくれろと泣く子かな。（一茶）

餘例一二

手をついて歌申しあぐる鮒かな（宗鑑）

古池や蛙とびこむ水の音。（芭蕉）

悲しきかなや、無常の春の風、忽ちに花の御姿を散らし奉る。（平家物語）

あつぱれ、彼は日本一の剛の者なり。

以上の四種類のうち、場合によつて一方の文は他方の文に言ひかへられるから、それぞれの場合に適當するやう、各種の文を用ひねばならぬ。同一の物事に對しても、つぎのやうに種々に敍述される。

（平敍文）　國恩は廣大なり。

（疑問文）　豈國恩は廣大ならずや。

（命令文）　國恩の廣大なるを知れ。

（感動文）　あゝ、國恩は廣大なるかな。

附　錄

附表の注意

○第一表の注意

一、假名音圖を諳誦して之を明記し得るやうにさせること。

二、本表の下に記した標準音及び假名遣の注意を善く會得させること。

三、標準音について今一つ補說しておくことがある。それは、語中と語尾と助詞とに用ひるカ行の假名の音を鼻濁にしてンガ（ŋga）ンギ（ŋgi）ング（ŋgu）ンゲ（ŋge）ンゴ（ŋgo）ンギャ（ŋgya）ンギュ（ŋgyu）ンギョ（ŋgyo）と發音すること。但し、この標準音の鼻濁を全く存してゐない地方においては、語頭と同じ濁音を許容しても可いこと。

四、東北地方や關東や越後などではイ段とエ段との發音が混同されがちであるから母音三角圖を示して善く標準母音の區別を明かにさせること。

（前）（後）は口腔の前方と後方とを示し、三角のイエアオウの位置は舌の前後と高低との位置を示す。

○第二表の注意

一、この一覽によつて文語と口語との活用の異同を明かにさせること。

二、この一覽によつて何段活用といふ意義を明かにさせること。

○第三表の注意

一、文語の動詞には正格活用五種と變格活用四種とあり、口語の動詞には正格活用三種と變格活用二種とあるのを明かにさせること。

二、口語の活用にはない文語の活用を善く會得させること。

三、「倦む」は文語ではマ行上二段活用であり口語ではマ行四段であり、その四段活用が現代文においては文語にも許容されてゐること。マ行上一段活用には「恨」を充てられないから、特に「滲」（しみる）の活用を充てたこと。

四、命令形には、便覽のため助詞の「よ」「い」「ろ」を附けてあること。なほ口語の上一段と下一段との命令形には、「よ」の代りに「ろ」を附けても可いこと。

三、カ行變格とサ行變格とは三段活用であり、ナ行變格とラ行變格とは四段活用の變態であること。

○第四表の注意

一、先づ助動詞を相と時と法との三種類に大別してあること。

二、助動詞の活用表は、助動詞の語幹と語尾とを分けないで活用形を示すのを便とする慣例に從つてあること。

三、概して文語の助動詞は口語のより多種多樣であること。

○第五表の注意

一、この表においては、文語の動詞または形容詞と助動詞または助詞との連續を練習させること。その讀み方の例は、「書かす、書かしむ、書かる、書かす、書かじ、書かむ、書かまし、書かば、書かばや、書かなむ」

二、形容詞の第二種活用の終止形には、正則では語尾の(し)を缺くけれども、特に慣例のある語には「惡しし・や」「惜しし・や」のやうに語尾を附けることを許容されてゐること。

三、本表の注意書きを善く會得させること。

四、(　)を附けてある活用形は、古く用ひられたものであること。(　)を附けてあるものは連續の助動詞であること。

五、兩屬の助動詞「けむ」などは兩方に記してあること。

六、口語の命令形には、助詞の「よ」の代りに「ろ」を附けても可いこと。

○第六表の注意

一、この表においては、文語の助動詞と助動詞及助詞との連續を練習させること。その讀み方の例は、「せらる、せず、せじ、せむ、せまし、せば、せばや、せなむ」(その上に然るべき動詞を連れて「書かせらる、書かせず、……」の例に讀んでも可い)。

二、本表の注意書きを善く會得させること。

三、文語の助動詞と助動詞との連續を口語にいひかへさせてみること。

□係結法大要

文語において、文中の上にある助詞と下に來る用言とが相互に照應すべき特別の約束がある。その上にある助詞を係または係詞といひ、下に來る用言を結または結詞といひ、その照應の約束を係結といふのである。係結に三種がある。

○こその係結

花、こそ美しけれ。(「美し」の已然形)
花、こそ咲け。(「咲く」の已然形)
花、こそ咲きたれ。(「たり」の已然形)
花、こそ咲きたらめ。(「む」の已然形)
かくこそあるべけれ。(「べし」の已然形)
雪とのみこそ花は散るらめ。(「らむ」の已然形)
願はしかるべき事こそ多かるめれ。(「めり」の已然形)
月見ればちゞに物こそかなしけれ。(「かなし」の已然形)わが身ひとつの秋にはあらねど。(大江千里)

右のやうに、助詞のこその係は、用言の已然形で結ぶ。

○ぞ・なむ・や・か の係結

花、ぞ美しき。(「美し」の連體形)
花、なむ咲く。(「咲く」の連體形)
花、や咲きたる。(「たり」の連體形)
何か惜しまむ。(「む」の連體形)
かくぞあるべき。(「べし」の連體形)
櫻ばひとへなるなむなかしき。(「なかし」の連體形)
の連體形)
ほととぎすや聞きたまへる。(「り」の連體形)
世の中は何か常なる。(「なり」の連體形 飛鳥川きのふの淵はけふは瀬になる。(古今集)
夏草はしげりにけれど時鳥などわが宿に一こゑもせぬ。(「す」の連體形)(延喜帝)

右のやうに、助詞のぞ・なむ・や・か及び疑の詞のなど等の係は、用言の連體形で結ぶ。

(注意)疑い詞の他の例は、「いかゞすべき」。「なぞ恐るる事の甚だしき」。「うれしさなににつつまむ」の如きである。「なぞ・なに・いかゞ」は疑問の副詞であるが、「なぞ」は「何ぞ」の約、「など」は「なぞ」の變、「いかゞ」は「いかにか」の約と解せられる。

○は・も・徒の係結

花は美し。
花も咲く。
花咲きたり。(係の助詞の無いのを「徒の係」といふ)
三吉野の山は雪ふる。
かくもあるべし。
巖の下に波、白くうち寄す。
年ふれば、よはひは老いぬ。
山里は冬ぞさびしさまさりける、人目も草もかれぬと思へば。(源宗于)
わが宿の池の藤なみ咲きにけり、山時鳥いつか來鳴かむ。(古今集)

右のやうに、は・も・徒の係、そのほか前の二種の係結に入らない助詞の係は、すべて用言の終止形で結ぶ。

(注意一)「は・も・徒」の係結を第一段の係結

ともいひ、「ぞ・なむ・や・か」の係結を第二段の係結ともいひ、「こそ」の係結を第三段の係結ともいふ。

（注意二）二種の係を重ねた場合には、第一段と第二段との係の重ねは第二段ので結び、第一段と第三段との係の重ねは第三段ので結ぶ。

（注意三）文の從節の係は係結の法によるに及ばず。例へば、

雪かとぞよそに見つれど（「見つる」と結ぶのが法則）櫻花折りては似たる花なかりけり。（玉葉集）

古は月をのみこそながめしに（「ながめしか」と結ぶのが法則）今は目を待つ我が身なりけり。（金葉集）

（注意四）文の成分の省略によつて結詞の省かれることがある。例へば、

人々感じあへりとぞ（「云ふ」）

その振舞げに勇ましかりし事にこそ（ありけれ）

（注意五）「よ・や・かな・ばや・」等の助詞、その他命令禁止の語で終る文は係結の法則によるに及ばない。例へば、

東風吹かば香おこせよ梅の花、あるじなしとて春を忘るな。（菅原道眞）

いにしへの奈良の都の八重ざくら、けふ九重ににほひぬるかな。（伊勢大輔）

（注意六）掛詞を用ひる場合は、係結の法則によらない。例へば、

さよ千鳥聲こそ近くなるみ潟（「なれ」）

と結ぶのが法則であるのを地名の鳴海潟に掛けたのである）かたぶく月に汐や滿つらむ。（藤原季能）

（注意七）係結の法則は、中古文において最も正しく行はれてゐたが、後世になると、特に意を用ひない文語では亂れてきた。さうして現代の口語文においては、第二段と第三段との係結の法則は全くすたれてしまひ、すべての係詞は第一段の結詞で結ばれ、そのうへ用言の活用にも助詞にも變化が生じたのである。

□品詞分解の方法

品詞分解とは、文章をそれ〴〵の品詞に分解することである。品詞分解には左のやうな方法がある。

○練習

一、左の和歌や文章の中の係結を說明せよ。

（一）神にぞおはする。

（二）いづれかまされる。

（三）夜明けにけり。

（四）人麿なむ歌のひじりなりける。

（五）斯かる事を知らずやある。

（六）きのふこそ早苗とりしか、いつのまに稻葉そよぎて秋風のふく。（古今集）

（七）見わたせば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける。（素性法師）

（八）奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の聲きくときぞ秋はかなしき。（猿丸太夫）

二、讀本などの中にある和歌や文章について係結を說明せよ。

○第一法　單に各品詞の名目を用ひて分解すること。例へば、

山は（名）さけ（動）、海は（助）あせなむ（助動）世（名）なりとも（助動）、君に（名）ふたごころ（名）、我（代名）あらめやも（動）。

○第二法　各品詞の名目と用言の活用の種類と活用形の名目を用ひて分解すること。例へば、

山は（名）さけ（動）、海は（助）あせなむ（助動）世（名）なりとも（助動）、君に（名）ふたごころ（名）、我（代名）あらめやも（動）。

（下二、連用）（下二、ナ變、終、連用、未然、連體）（ラ變、終止）

□文の分解の方法

文をその成分に解きわけて、各成分のその文における位置を明かにすることを文の分解といふ。文の分解には、左の順序によるのがよい。

一、その文が常態であるか變態であるかを見、變態であるなれば、倒置な常態の位置になほし、省略の語を補充し、さうして主部と述部の所在をたしかめること。

二、主部と述部との關係が、單に一回だけであれば單文であり、その關係が二回以上であれば、文の本幹に主節があるか對立節があるかを見わけて、複文か重文かを見定めること。

三、單文か複文か重文かを見定めた上は、それ〴〵の主語と述語と乃至は客語と修飾語との有るかぎりの成分にわけて見ること。

文の分解の形式に、およそ二種類ある。その一は、傍記分解法であり、他の一は圖式分解法である。

第一、傍記分解法。これは、文の行のまゝ、その文の各成分の傍に線をそへて各成分の名を記すもので、複雜でない文の分解に適する。例へば、

（一）櫻の花が美しく咲く。

（二）富士は日本一の山。

（三）夏がくれば、青葉が茂る。

名詞　名　代名　動　助動　助詞

君に（名）ふたごころ（名）、我（代名）あらめやも（動）。

（人代、自稱、未然）（ラ變、終、已然、第四第四）

（注意）品詞分解はまづ第一法で、つぎに第二法で、後に第三法で練習するのがよい。

○第三法　品詞の解說に關する種々の名目を用ひて分解すること。例へば、

山は（名）さけ（動）、海は（助）あせなむ（助動）世（名）なりとも（助動）、君に（名）ふたごころ（名）、我（代名）あらめやも（動）。

（普通第一、下二、連用、普通第一、下二、ナ變、終、連用、未然、連體、普通ラ變、第三終止、第三）（人代、自稱、第一、普通）（ラ變、終、已然、第四第四）

○練習

一、讀本などにある散文について品詞分解をせよ。

二、讀本などにある韻文について品詞分解をせよ。

（四）紅葉はばら〳〵と散り、山鳥はほろ〳〵と鳴けり。

（右の分解）

（一）櫻の花が美しく咲く。（單文）

（二）富士は日本一の山（なり）（單文）

（三）夏がくれば、青葉が茂る。（複文）

（四）紅葉はばら〳〵と散り、山鳥はほろ〳〵と鳴けり。（重文）

（注意）右の主語と述語と客語と修飾語とは、頭字一つを略記しておいた。また煩を避けて、主語や客語につく助詞は別に書きわけないで主語や客語に含めておいた。なほ符號を設けて各成分を記しわけてもよい。

第二、圖式分解法。圖式を設けて、文の各成分を解きわけるもので、複雜な文の分解に適する。九三頁の「文の解說」に示した二種の圖式分解の例の外更に一案を示す

主語の修飾語　述語の修飾語　客語の修飾語　主語（助詞とも）　述語　客語（助詞とも）

日の照りつよく甚だ暑く

夏は風の吹きしきる特に寒し

上は單文の圖式である。複文の從節は、それ〴〵の位置で十字線を引いて、これを分解するのであり、重文の各節は、單文の圖式を重ねるのである。左に複文を含んだ重文を分解して示す。

（文例）日の照りつよく夏は甚だ暑く、風の吹きしきる冬は特に寒し。

○練習

一、本書の下篇第二章「文の種類」に列擧してある練習の諸文を分解せよ。

二、讀本などにある文について文の分解を試みよ。

□文法上許容スベキ事項

（明治三十八年十二月二日文部省告示第五十八號）

一「居リ」「慣ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用ヰルモ妨ナシ。

二「ジク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用ヰル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

三　過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用ヰルモ妨ナシ。

例

火災ハ二時間ノ長キニ亙リテ鎭火セザリシ。

金融ノ緩慢ナリシ割合ニハ、金利ノ引弛チ見ザリシ。

四「コトナリ」（異）ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用ヰルモ妨ナシ。

五「ヽヽセサス」トイフベキ場合ニ、「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

例

手習サス。

周旋サス。

賣買サス。

六「ヽヽセラル」トイフベキ場合ニ、「ヽヽサル」ト用ヰル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

例

誹サル。

評サル。

解釋サル。

七「得シム」トイフベキ場合ニ、「得セシム」ト用ヰルモ妨ナシ。

例

最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム。

上下貴賤ノ別ナク、各其ノ地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ。

八　佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ、「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ場合ヲ、「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ。

例

唯一過ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ。

攻擊開始ヨリ陷落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ。

九　てにをはノ「ノ」ハ、動詞・助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ。

例

花ヲ見ルノ記。

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ。

一〇　疑ノてにをはノ「ヤ」ハ、動詞・形容詞・助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ。

例

有ルヤ。

面白キヤ。

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ。

一一　てにをはノ「トモ」ノ、動詞、使役ノ助動詞、及ビ受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

例

數百年ヲ經ルトモ。

如何ニ批評セラルヽトモ。

强ヒテ之ヲ遂奉セシムルトモ。

一二　てにをはノ「ト」ノ、動詞、使役ノ助動

詞、及ビ時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

例　月出ヅルト見エテ。
　　嘲弄セラルヽト思ヒテ。
　　終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ。
　　萬人皆其ノ德ヲ稱ヘケルトゾ。

一三　語句ヲ列擧スル場合ニ用ヰルてにをはノ「ト」ハ、誤解ヲ生ゼザルトキニ限リ、最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

例　月ト花。
　　宗教ト道德ノ關係。
　　京都ト神戸ト長崎ヘ行ク。

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例。
　　史記ト漢書(ト)ノ列傳ヲ讀ムベシ。
　　史記ト漢書ノ列傳(ト)ヲ讀ムベシ。

一四　上ニ疑ノ語アルトキニ、下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

例　誰ニヤ問ハン。
　　幾何ナルヤ。
　　如何ナル故ニヤ。
　　如何ニスベキヤ。

一五　てにをはノ「モ」ハ、誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ、「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用ヰルモ妨ナシ。

例　何等ノ事由アルモ(アリトモ)、議場ニ入ルコトヲ許サズ。
　　期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)、準備ハ未ダ成ラズ。
　　經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)、昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ。

誤解ヲ生ズベキ例。
　　請願書ハ會議ニ付スルモ(ストモ スレドモ)、之ヲ朗讀セズ。
　　給金ハ低キモ(クトモ ケレドモ)、應募者ハ多カルベシ。

一六　「トイフ」「トイフ語ノ」ノ代リニ「ナル」ヲ用ヰル習慣アル場合ハ、之ニ從フモ妨ナシ。

例　イハユル哺乳獸ナルモノ。
　　類同ナルモノアリ。
　　○理由書

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承認セラルルモノハ、德川時代國學者ノ研究ニ基キ、專ラ中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ。然レドモ之ニノミ依リテ今日ノ普通文ヲ律センハ言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナラズ、コレマデ破格又ハ誤謬トシテ斥ケラレタルモノト雖モ、中古語中ニ其用例ヲ認メ得ベキモノ尠シトセズ。故ニ文部省ニ於テハ、從來破格又ハ誤謬ト稱セラレタルモノノ中慣用最モ弘キモノヲ擧ゲ、之ヲ許容シテ在來ノ文法ト並行セシメンコトヲ期シ、其許容如何ヲ國語調査委員會及高等教育會議ニ諮問セシニ、何レモ審議ノ末許容ヲ可トスルニ決セリ。依テ自今文部省ニ於テハ、教科書檢定又ハ編纂ノ場合ニモ之ヲ應用セントス。

（注意）右の告示に「終止言」「連體言」と云つてあるのは、「終止形」「連體形」と云ふと同じ。また右の告示は「用」をワ行上一段に活用させる例に從つてある。さうして本書は「用」を、ハ行上一段に、文語はハ行上二段に活用させる例に從つてある。

□練習問題解答

上篇の部

◎練習一（四頁）

（主語）　（述語）
（一）雫　消ゆ。
（二）鳥　鳴く。
（三）花　散る。
（四）月　清し。
（五）冬は　寒い。（口語）
（六）山が　聳える。（口語）

◎練習二（六頁）

各問題の客語（○印は目的語、無印は補足語）
（一）我等を
（二）師に
（三）百に
（四）關白と
（五）遠方より
（六）汝を、玉に
（七）男で
（八）使を、ローマに
（九）正行を、櫻井驛から、故郷へ

（七）以下は口語

◎練習三（七、八頁）

各問題の修飾語（括弧内は修飾される語）
（一）吸き（風）
（二）遠く（飛ぶ）
（三）流れる（水）
（四）枯れた（枝）
（五）驚くべき（事實）
（六）惠む（人）惠まれる（人）
（七）は文語口語共通、（三）以下は口語

◎練習四（一一百一一頁）

（一）吾輩（代名詞）猫（名詞）
（二）彼（代名詞）論文（名詞）一等（數詞）
（三）富士山（名詞）高さ（名詞）一萬二千三百七十尺（數詞）
（四）敷島、大和心、人、朝日、山櫻花（みな名詞）
（一）（二）（三）は口語

◎練習五（一四頁）

（一）咲か（動詞）む（助動詞）（「ん」と書くのは音便）
（二）振は（動詞）ず（助動詞）
（三）行き（動詞）たし（助動詞）
（四）歸る（動詞）べし（助動詞）
（五）降る（動詞）らしい（助動詞）
（六）輕く（形容詞）重い（形容詞）
（五）（六）は口語

◎練習六（一一七頁）

（一）大いに（喜ぶ）
（二）甚だ（篤し）
（三）なほ（早し）
（四）しば〳〵（行きたり）
（五）突然（來た）
（五）は口語

◎練習七（一一八頁）

各問題の接續詞
（一）ならびに
（二）但し
（三）さうして（口語）

（四）および（口語）

◎練習八（一九頁）

各問題の感動詞

（一）あな

（二）もし〳〵（「兎と龜」の唱歌の語）

（三）あれ（塙保己一の門人の語）

（四）さて〳〵（右の師の語）

中篇の部

◎練習一〇（二四頁）

固有名詞

（一）日本　（二）元祿　松尾芭蕉　井原西鶴

近松門左衛門（口語）

普通名詞

（一）櫻　國花　（二）古池　蛙　水　音

（三）文學史上　光彩　時代　偉人

◎練習一一（二六頁）

山々　川々　諸都　諸市　町町　諸學校

生徒ら　親たち　兄弟ども　朋友ら　知人ら

會員がた　來賓がた

◎練習一二（二七、八頁）

分量の數詞

（一）一日　三回　一回　一服

（三）一千メートル（口語）

（二）以下は口語

◎練習九（二〇頁）

問題の助詞

（一）ども

（二）が　ば　も（口語）

（三）から　まで　で（口語）

（四）は　も　が（口語）

順序の數詞

（一）一（第一の意）　二（第二の意）

（三）第一着

◎練習一三（三〇頁）

（一）自分（自稱の單數）

（二）このかた（他稱の單數）

（三）某々（不定稱の複數）

◎練習一四（三七頁）

第一問に答へる六つの短文の例

（一）花はまだ咲かない。

（二）花が咲きかけた。

（三）花が美しく咲く。

（四）冬咲く花は少い。

（五）櫻の花が咲けば嵐山はにぎはふ。

（六）花も咲け、鳥も鳴け。

第二問に答へる活用表

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
か（書）	か	き	く	く	け	け
およ（泳）	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
かへ（返）	さ	し	す	す	せ	せ
か（勝）	た	ち	つ	つ	て	て
あつか（扱）	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
と（飛）	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
す（住）	ま	み	む	む	め	め
あやま（誤）	ら	り	る	る	れ	れ

◎練習一五（三九頁）

第一問に答へる六つの短文の例

（一）彼はまだ飛行機を見ない。（二）我等は飛行機を見た。（三）人々が月を見る。（四）月を見る人々が居る。（五）月を見れば心が淸らかになる。（六）あの月を見よ。

第二問に答へる活用表

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
（鑄）	い	い	いる	いる	いれ	い（よ）
（煮）	に	に	にる	にる	にれ	に（よ）
（簸）	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひ（よ）
こゝろ（試）	み	み	みる	みる	みれ	み（よ）

かんが（鑑）	み	み	みる	みる	みれ	み（よ）
おもん（惟）	み	み	みる	みる	みれ	み（よ）
（居）	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐ（よ）

◎練習一六（四五頁）

第一、上二段活用と下二段活用との活用形の異同を比較すれば

（イ）未然形、連用形、命令形ともに、上二段活用はイ段に活用し、下二段はエ段に活用する（異なる點）

（ロ）兩活用ともに、終止形はウ段に、連體形はウ段に「る」がそひ、已然形はウ段に「れ」がそつて活用する。（同じ點）

第二、上二段活用

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
す（過）	ぎ	ぎ	ぐ	ぐる	ぐれ	ぎ（よ）
お（落）	ち	ち	つ	つる	つれ	ち（よ）
と（閉）	ぢ	ぢ	づ	づる	づれ	ぢ（よ）
さ（錆）	び	び	ぶ	ぶる	ぶれ	び（よ）
お（老）	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	い（よ）
お（下）	り	り	る	るる	るれ	り（よ）

下二段活用

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
さづ（授）	け	け	く	くる	くれ	け（よ）
の（載）	せ	せ	す	する	すれ	せ（よ）
ま（交）	ぜ	ぜ	ず	ずる	ずれ	ぜ（よ）
い（出）	で	で	づ	づる	づれ	で（よ）
ゆだ（委）	れ	れ	ぬ	ぬる	ぬれ	れ（よ）
かぞ（數）	へ	へ	ふ	ふる	ふれ	へ（よ）
しら（調）	べ	べ	ぶ	ぶる	ぶれ	べ（よ）
あらた（改）	め	め	む	むる	むれ	め（よ）
み（見）	え	え	ゆ	ゆる	ゆれ	え（よ）
なが（流）	れ	れ	る	るる	るれ	れ（よ）
う（飢）	ゑ	ゑ	う	うる	うれ	ゑ（よ）

◎練習一七（五〇頁）

文語	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
出席	せ	し	す	する	すれ	せ（よ）
空し	せ	し	す	する	すれ	せ（よ）
く	せ	し	す	する	すれ	せ（よ）
寄か	せ	し	す	する	すれ	せ（よ）
に	せ	し	す	する	すれ	せ（よ）
ス	せ	し	す	する	すれ	せ（よ）
ポ	せ	し	す	する	すれ	せ（よ）
ッ	せ	し	す	する	すれ	せ（よ）
損	じ	じ	じる	じる	じれ	じ（よ）
案	じ	じ	じる	じる	じれ	じ（よ）

サ變　上一段

口語	愛	害	略	略	略	略
	さ	し	せ（ぬ）	せ（ぬ）	せ（ぬ）	せ（よ）
			し（いな）	し（いな）	し（いな）	し（ろ）
			する	する	する	
			する	する	する	
			すれ	すれ	すれ	
			せ	せ	せ	

サ變　四段

（注意）終の三語は、口語では四段活用にも云ひ、サ行變格にも云ふ。（サ變から四段にかはりつゝある過渡的のもの）

◎練習一八（五六頁）

（一）急がす。（四段）　まばらす。（四段）

（二）仰がす。（四段）　愧ぢす。（上二）

（三）後れす。（下二）　制せす。（サ變）

（四）勝たす。（四段）　しめす。（下二）

（五）老いす。（上二）　劣らす。（四段）

◎練習一九（五九頁）

○戸開かす。（自カ四）　戸を開かす。（他カ四）

○門閉ちす。（自タ上二）

門を閉ちす。（他タ上二）

○身冷えす。（自ヤ下二）

身を冷さす。（他サ四）

○人來す。（自カ變）

○人員增減す。（自サ變）

人員を增減せす。（他サ變）

◎練習二〇（六三頁）

第一問の答

呼んで　咲いたり　衣を脱いで　叫んでいふ
凝つては　髪つて　當つて　進んで　退いて

第二問の答

（一）謹んで新年を賀す。
（二）未明に星を戴いて行く。
（三）明日は遠足に行かう。（文語は「行かむ」）（口語）
（四）強ひて寄附を求むべからず。

◎練習二一（六八頁）

第一問の答

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	
善	く	く	し	き	けれ	（第一種）
醜	く	く	し	き	けれ	（第二種）
古疎	く	く	（し）	き	けれ	（第三種）
惡し	く	く	（し）	き	けれ	（第三種）
美し	く	く	（し）	き	けれ	（第三種）
新し	く	く	（し）	き	けれ	（第三種）
睦じ	く	く	（し）	き	けれ	（第三種）
同じ	く	く	（し）	き	けれ	（第三種）
恥かし	く	く	（し）	き	けれ	（第三種）
懼かし	く	く	（し）	き	けれ	（第三種）
懇ろし	く	く	（し）	き	けれ	（第三種）

第二問の答（線つきは形容詞）

（一）大御言たふとくも畏し。
（二）快諾を得ば幸甚だし。
（三）人を欺くは惡しし。（正則は「惡し」）
（四）河豚は食ひたし、命は惜しし。（正則は「惜し」）
（五）新年おめでたうございます。（「おめでたく」の音便）（以下三問口語）
（六）誠にいたましい事である。
（七）梅雨の頃はうつたうしい。

◎練習二二（七〇頁）

（一）品行正しからず。
（二）一言無かるべからず。
（三）利益乏しければ廢業す。（「乏しかれば」の轉化）

◎練習二三（七二頁）

（一）近來稀なる大火なり。
（二）舉動甚だ活潑なり。
（三）春の日長閑なり。
（四）珍らかなる品到來せり。
（五）岩頭に立つ人危ふげなり。
（六）豐太閤の生涯は華やかなりき。

◎練習二四（七四頁）

（一）星光爛（ラン）たり。
（二）鳳采堂々たり。
（三）流血淋漓（リンリ）たりき。
（四）義士從容（ショウヨウ）として死に就く
（五）勇士の面目躍如（ヤクジョ）たり。
（六）公等碌々（ロクロク）として人に依つて事を爲す。
（七）春色駘蕩（タイタウ）として、櫻花爛漫（ランマン）たり。
（八）秋風颯々（サツサツ）として、月光皎々（カウカウ）たり。
（九）慨然として天下を廓清するの志あり
（一〇）君が代の奏樂嘲哳（リウリヤウ）として聞ゆ。

◎練習二五（七八頁）

（一）天恩を辱うす。
（二）オつたなうして學あさし。
（三）嗚呼哀しいかな。
（四）辛うじて災を免れたり。
（五）有りがたう存じます。（口語）

◎練習二六（八三頁）

（一）老人、子に手紙を書かす（書かしむ）。
（二）頼朝、二弟をして義仲を討たしむ。
（三）早く起きさする（起きしむる）は、健康のためなり。

（四）早く起きさすれば、（起きしむれば）子の健康を增す。

◎練習二七（八五頁）

（一）人に救はれたる孤兒あり。
（二）盜賊、警官に捕はれたり。
（三）勇士に助けられて有りがたい。（口語）

◎練習二八（八六頁）

（一）一同水を飲まれず。（未然形）
（二）余は余の志を達せらるれば幸なり。（已然形）
（三）余は近日病床より起きらるべし。（終止形）
（四）ロシア文の讀まれる人は少ない。（連體形）（口語）

◎練習二九（九〇頁）

第一

（一）第一皇子、皇太子に立たせらる。
（二）殿下、御參拜あらせられたり。
（三）總裝の宮令旨を下し給へり。
（四）大臣閣下が御視察になつた。（口語）
（五）私もお伴致します。（口語）

第二

（一）殿下、行啓あらせられたり。
（二）會長がお話になる。（口語）
（三）私が御案内致します。（口語）

◎練習三〇（九三頁）

（一）予は久しく彼處に住みたり（連用形）き（終止形）。
（二）心の中を見せたら（未然形）ば、疑とけぬ（終止形）べし。
（三）薪を負へる（連體形）人、花の蔭に休めり（終止形）。
（四）君の宜ひつる（連體形）は何事なるか。
（五）別れな（未然形）ば、君も我も慕はしかるべし。
（六）斯くなりぬれ（已然形）ば、詮方なし。
（七）賊の勢强かりしか（已然形）ば、皇軍轉じて紀伊に入り給ひき（終止形）。
（八）それは以前に見たり（連用形）聞いたり（連用形）した（連體形）ことである。（口語）

◎練習三一（一〇〇頁）

（一）君はまだ遠くは行かじ。（口語では「行くまい」の意）
（二）雉子も鳴かずば撃たるまじ。（口語では「雉子も鳴かれば撃たるまい」の意）
（傳說）振津の淀川の長良の橋を架ける雜工事の時に人柱を橋杭の下に埋めるがよいと言つた人自身が人柱にされたのでその子が詠んだと言ひ傳へる歌「日ゆゑに父は長良の人柱、きじも鳴かずば撃たるまじ」
（三）おくびにも出すまじき事なり（口語「あくびにも出してはならぬ事だ」の意）

◎練習三二（一〇五頁）

（一）一兩日後には花も咲くべし。（未來の「べし」）
（二）赤道直下は甚だ暑かるべし。（推量の「べし」）
（三）我等徒らに一生を過すべけんや。（適當の「べし」の反語）
（四）この土手に登るべからず。（警視廳（命令の「べし」で禁止）

◎練習三三（一〇七頁）

（一）いかなる故ありけむ。（「どういふわけが有つたらうか」と過去の推量）
（二）かの君に人の語りたまふめり。（「あの君に人が話されるやうだ」と現在の輕い推量）
（三）誰に見よとて花の咲くらむ。（「誰に

見よと思つて花が咲くのだらう」と現在の推量）

（四）かなたの山にしぐれ降るらし。（「あつちの山に時雨がふるらしい」と聯想の推量）

◎練習三四（一一一頁）

第一

（一）早く起くべし。

（二）遠かに實行すべし。

（三）不當の制裁を受くまじ。

（四）こし方を顧みけり。

（五）油斷をせしため失敗せり。

（六）陳列品に手を觸るべからず。

（七）この所に塵芥を捨つべからず。

第二

（一）我等は協力をしよう。

（二）我は違約をしない。彼も違約をしまい。

（三）見まい、聽くまい、しやべるまい。

（庚申塚の三匹猿の事）（右三問口語）

◎練習三五（一一六頁）

（一）有り（動詞）し（過去）なら（指定）む（推量）

（二）心がけ（動詞）ざる（打消の「ず」と動詞の「ある」）べから（指定の「べく」と動詞の「あら」）ざる（前達）なり（指定）

（注意）（二）の「べからざる」は指定から打消に後戻りしてゐるのは、動詞「あり」が中間に結合したからである。但し、その前後の「ざるべからず」と「ざるなり」とは後戻りしないで順に連續してゐる。

（三）用心（名詞）せ（サ變の動詞「せ」を略す）させ（使役）られ（受身）まし（敬語）た（過去）（口語）

◎練習三六（一一九頁）

（一）祖父は久しく京都に住みたりき（住んでゐた――進行的過去）

（二）去年吉野に遊びし（遊んだ）時、櫻の花咲きたりけり（咲いてゐた――進行的過去）

（三）風おとづれて、早くも秋は來にけり（來たわい――完了と感動）

（四）三年の後には今の學校を卒業しなむ（卒業してしまはう――未來完了）

（五）龍あらば射獄して頷の玉を取りてむ（取つてしまひたい――未完了を以て願望をあらはす）

（六）私は來春までにこの事をかたづけてしまはう（口語の未來完了）

◎練習三七（一二七頁）

第一類の助詞の例

（和歌）○山は（主語）さけ海は（主語）あせなむ世なりとも君に（客語）二心我あらめやも。　源實朝

○君が（所有）代は（主語）千代に八千代にさゞれ石の（主語）いはほと（標準）なりて苔の（主語）むすまで。（讀人知らず）

（俳句）○長松が（主語）親の（所有）名で（客語）來る御慶かな。　野坡

○月に（客語）柄を（客語）さしたらば好き團扇かな。　宗鑑

○清水の上から（起點）出たり春の月。　許六

（文章）○ひとり燈火のもとに（客語）文を（客語）ひろげて、見ぬ世の（所有）人を（客語）友と（標準）するこそ、こよなう慰むわざなれ。　徒然草

○義朝これを（客語）見て「惡源太は（主語）なきか。信頼と（標準）いふ大臆病人が（主語）待賢門を（客語）はや破られたるぞや。あの敵追ひ出せ」と宣ふ。　平治物語

◎練習三八（一三六頁）

第二類の助詞の例

（和歌）○武藏野は月の入るべき山も（強め）なし萱より出でて萱にこそ（最上の強め）入れ。（古歌）

○君が代は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで（大限度のまで）。（古今集）

（俳句）○これは〳〵とばかり（程度）花のよしの山。　貞室

○庭にさへ（輕い方のさへ）さぞな落葉は東山。　立圃

○それでこそ（最上の強め）御ほとゝぎす松に月。　一茶

（文章）○大日本は神國なり。天祖はじめて基を開き、日の神長く統を傳へ給ふ。我が國のみ（限度）この事あり。異朝には（差別）その類なし。　神皇正統記

○これを中ごろの住みかになすらふれば、また百分が一にだに（輕い方）も（強め）及ばず。　方丈記

◎練習三九（一四六頁）

第三類の助詞の例

（和歌）○敷島の大和心を人問はば（未然形）をうける假定のば）朝日に匂ふ山櫻花。　本居宣長

○山はさけ海はあせなむ世なりとも（終止形をうける假定のば）君に二心我あらめやも。　源實朝

（俳句）○わが雪と思へば（已然形をうける既定のば）輕し笠のうへ。　其角

○おう〳〵と云へど（已然形をうける既定のば）叩くや雪の門。　去來

○五月雨を集めて（連用形をうける經過の て）早し最上川。　芭蕉

（文章）○毀譽は人の大節なり。世擧りて譽むるも（連體形をうける接續の「も」で許容されて居る。正則は「譽むとも」）必ず察すべし。人擧りて毀るも（同前）必ず察すべし。（三浦梅園の梅園叢書）

○人に接するの（連體形をうける助詞の「の」で許容されて居る。正則は「接する法」）法な柳下惠にして、自ら守るの（同前）心を伯夷・叔齊にす。（福澤諭吉翁百話）

◎練習四〇（一五四頁）

（一）第四類の助詞の例

（和歌）○東風吹かば香おこせよ（命令で願望の意）梅の花、あるじなしとて春なわすれそ（禁止で願望の意）　菅原道眞

○山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心我あらめや（歌調を整へるため特に已然形に接する反語のや）も（感動）　源實朝

（俳句）○古池や（感動）蛙とびこむ水の音。　芭蕉

○花の雲鐘は上野か（疑問）淺草か（疑問）。　芭蕉

○手をついて歌申し上ぐ蛙かな（感動）。　宗鑑

（文章）○養和の頃か（疑問）とよ（感動）、久しくなりて確かには覺えず。　方丈記

○古の人云はずや（反語）禍福は糾へる繩の如し。　八犬傳

○そも〳〵の砧のかなしきか（未決定の「か」）、住む里のさびしきか（同前）、打つたりの憂きゆゑか（同前）。皆あらず。聞く人の心のさびしきなり。（清水濱臣の泊洒含集）

（二）第一類の助詞の用例一種づつ。

（が）上杉謙信と武田信玄とが川中島で戰

つた。

（は）花は櫻木、人は武士。

（の）空の星の數はかぞへつくされない。

（を）伊達政宗は支倉常長を西洋へ遣はした。

（に）支倉常長がローマ法王に謁した。

（へ）右へ行つて左へまがりなさい。

（より）論より證據。

（から）右から左へ向きかはる。

（まで）横濱からロンドンまで。

（と）五十歩と百歩との差。

（にて、で）爲替にて（で）金を送る。

（三）第一類の「は」（甲）と第二類の「は」（乙）との用例。

（甲）鯨は獸である。（主語を示す「は」）

（乙）英雄が稀には現はれる。（差別した程度の「は」）

（甲と乙との併用）君は（甲）まだ遠くは（乙）行かじ。

（四）第一類の「が」と「は」の區別。

（が）私が行きます。（「私が」と特に擧げて云ふ。卽ち「他の人が行くのではなく、私が行きます」。の意味）

（は）私は行きます。（「他の人は」と各自に差別して云ふ。卽ち、「私は行きますが、他の人は行くかも行かないかも知れません」。の意味）

（五）第一類「の」「に」「より」「と」「にて」の各種類の用例。

（所有）私の本。

（性質）金の茶釜。

（所在）奈良の大佛。

（由來）竹馬の友。

（比喩）柳の眉。霜の鬢。

（の）「といふ」の意）重衡の中將。道長の大臣。

（主語を）河風の涼しくもあるかな。

（下の名詞を省く）あなたの（繪）を見ました。

（名詞に代る）燕の來るの（時節）は春です。

（に）（相手）友に逢うた。

（目標）的にあたつた矢。

（場所）高い山に登りついた。

（時限）午後十時に寢る。

（比較）大關が關脇に負けた。

（資格）文部大臣に任ぜられた。

（轉化）水が氷になつた。

（原因）大地震の號外に驚いた。

（尊敬すべき主語を示す）皆樣には御機嫌よういらつしやいますか。

（より）（起點）青森より下の關まで。

（經由）シベリアより歸るか、印度洋より歸るか。

（時限）來る四月一日より始業。

（由來）樽詰は樽より製す。

（制限）これより外に好い方法は無からう。

（比較）梅は桃より早く咲く。

（と）（共同）英國と同盟した。

（轉化）少年も終には老人となる。

（標準）こゝを起點とする。

（比喩）山と積んだ貨物。

（引用）雨天順延と掲示された。

（列擧）五と五と三との比例。

（にてや）（場所）我が國にて（で）製造。

（時限）今日にて（で）閉會。

（原因）病氣にて（で）一年間休學。

（方法）爲替にて（で）金を送る

（六）第二類の助詞「ぞ」「なむ」「か」「や」「こそ」の係結の用例。

（ぞ）人ぞ知らぬ。（「ず」の連體形）かくぞ有るべき。（「べし」の連體形）

（なむ）喪なむ明けぬる。（「ぬ」の連體形）「十代になむなりにける（「けり」の連體形）

（か）誰かある。誰かある。（「あり」の連體形）世の中は何か常なる。（「なり」の連體形）

（や）花や咲きたる。（「たり」の連體形）時鳥や聞きたまへる。（「り」の連體形）

（こそ）人こそ知らね。（「ず」の已然形）かくこそ有るべけれ。（「べし」の已然形）

（七）第一類（イ）第三類（ロ）の助詞の「が」の用例。

（イ）本を讀むの（準體言）がおもしろい。（主語を示す「が」）

（ロ）時刻は來たが、まだ會は開かれない（接續を示す「が」）

（イとロとの併用）誰が（イ）何と言はうが、（ロ）、すてゝおけ。

（八）第三類の助詞と用言との連續。

○未然形につらなるもの

（で）風も吹かで、海靜かなり。（打消の「で」）

（ば）天氣よくば舉行せむ。（假定の「ば」）

○連用形につらなるもの

（て）春過ぎて、夏來れり。

（ながら）歩きながら往事を語る。（形容詞には連體形に）

（つつ）風景をながめつつ詩を吟ず。

（たり）榮えたり衰へたりする。

（たら）相談したら得心した。

（ても）省略しても妨ない。

○終止形につらなるもの

（し）花も咲くし、鳥も鳴く。

（とも）繪にかくとも、筆も及ばじ。

（と）繪にかかうと、筆も及ぶまい。（この「と」は「とも」の意）

○連體形につらなるもの

（が）花は美しきが、實はならず。

（な）喪は明けぬるな、月は殘れり。

（ものを）約束せしものを、君はなど來ざりし。

（に）日くれたるに、登山者は未だ歸らず

（ながら）苦しきながらも忍ぶ。（動詞や助動詞には連用形に）

（と）天氣がよいと舉行する。（この「と」は「ときには」の意）

（なら）天氣がよいなら舉行する。

（から）天氣がよいから舉行する。

（ので）天氣がよいので舉行した。

（けれども）天氣はよいけれども、延期した。

○已然形につらなるもの

（ば）天氣よければ舉行す。

（ど）相手かはれど、ぬしはかはらず。

（ども）物は薄けれども、志は厚し。

（九）第三の助詞の中で、（イ）假定の條件を示すものと、（ロ）既定の條件を示すものと。

（イ）未然形につらなる「ば」、たら（既定にも）、なら、とも、と、ても

（ロ）已然形につらなる「ば」、たら（已然にも）、から、ども、ど、ので、けれども

（一〇）第四類の「か」「や」と用言との連續

疑問の「か」は連體形につらなる。例へば外國語の試驗あるか。
この河はよほど深きか。
疑問の「や」は終止形につらなる。例へば外國語の試驗ありや。
この河はよほど深しや。
感動の「や」は動詞や助動詞には命令形につらなり、形容詞には終止形につらなる。例へば、
祝へや祝へ。　舞へや踊れや。
うれしや。　うれしや。　かなしや。　なげかしや。
反語の「や」は推量の助動詞の終止形につらなる。例へば、
徒らに死すべけむや。

◎練習四一（一六二頁）

（注意）（1）動詞や形容詞などを限定する副詞（2）他の副詞を限定する副詞（3）文句を限定する副詞

（一）そはいと（1）易し。
（二）我豈（3）二心あらむや。
（三）我も人もなさ〳〵（1）用意を怠らず。
（四）風ます〳〵（1）強く、波いよ〳〵（1）高くして、船體非常に（1）動搖せり。
（五）遙かに（1）西の空を望めば、富士の峯高く（1）聳えて、恰も（3）白扇を倒にせるが如し。
（六）人々は皆（1）日光を浴びて、せつせと（1）働いてゐた。（以下五問口語）
（七）簡單明瞭に（1）說明されたので、我等は能く（1）了解した。
（八）私は大層（1）親切にしてもらつて、實に（1）嬉しかつた。
（九）僅かに（2）一票の差で敗れたのは、いかにも惜しいことでした。
（一〇）折角（3）私へも御案內下さいましたのに、あひにく（3）先約の差支がございまして、いまし據なく（1）不參致します。どうぞ（3）惡しからず（1）思召下さるやう願ひます。

◎練習四二（一六五頁）

（注意）（1）並列または累加の接續詞（2）分岐または未決の接續詞（3）前後の關係順當の接續詞（4）前後の關係不順當の接續詞

（イ）早く橫濱に行き、而して（3）船出を待たむ。
（ロ）大戰爭には慘敗し、しかのみならず（累加）巨億の價金を出せり。
（ハ）大地震あり、且又（累加）大火災あり。
（ニ）鳥獸すら恩を知る。況や（3）人に於てなや。
（ホ）歌をよみ、そのうへ（累加）詩をも作る。（口語）
（ヘ）兄と相談したが、尙（累加）弟とも相談しよう。（口語）
（ト）甲の方法でも、或は（分岐）乙の方法でも、共に宜しい。（口語）
（チ）天の成ししか、人の成ししか。はた又（未決）諸天善神の蔭にて操り給ひしか。
（リ）土曜の晩に會合するか、それとも（未決）日曜の午後會合するか。（口語）
（ヌ）控訴の申立無し。然れば（3）始審の公判に決定す。
（ル）京都は名勝と舊蹟に富む。されば（3）遊覽の客常に多し。
（ヲ）明日は天候が惡いとの豫報、それなら（3）遠足は延ばさう。（口語）

（ワ）驕る者は久しからず。故に（3）平家も急に衰亡しけり。
（カ）驕奢の害毒を知り、因つて（3）儉約を奬勵す。
（ヨ）私は一箇年ほど外國に行きます。就ては（3）留守を願ひます。（口語）
（タ）品質が良い。それで（3）價格も高い。（口語）
（レ）からだは小さい。しかしながら、（4）力は强い。（口語）
（ソ）要害は堅固なり。然るに（4）主將が油斷したり。
（ツ）夜中に火事起り折柄風强かりしかされど早く之を消しとめたり。
（ネ）才智はある。けれども（4）信用が缺けてゐる。（口語）
（ナ）彼は大概優勝する。尤も（4）不時の失敗がないではない。（口語）
（ラ）彼は段々と出世する。尤も（3）彼は常に修養を怠らない。（口語）

◎練習四三（一六八頁）

（注意）（1）感激によつて發するもの、（2）意志の傾向をあらはすもの

第一（文語の方）

（一）嗚呼（1）
（二）おう〳〵（2）
（三）いでや（2）
（四）さて〳〵（2）
（五）すは（1）
（六）あつぱれ（1）（「あはれ」と同源）

第二（口語の方）

（一）やあ、久しぶりだれい。
（二）まあ、それは感心なことだ。
（三）いいえ、存じませぬ。
（四）なあに、大丈夫だ。
（五）さあ、參りませう。

◎練習四四（一七一頁）

（一）すし（鮨）—形容詞の「酸し」の終止形を名詞に
（二）光—動詞の「ひかる」の連用形「ひかり」を名詞に
（三）遠く—形容詞の「とほし」の連用形「とほく」を名詞に
（四）あまり—動詞の「あまる」の連用形「あまり」を副詞に
（五）善き、惡しき—形容詞の「よし、あし」の連體形「よき、あしき」を名詞に
（六）問、答—動詞の「問ふ、答ふ」の連用形「とひ、こたへ」を名詞に
（七）宜しく—形容詞の「よろし」の連用形「よろしく」を副詞に
（八）退治た—名詞の「退治」を上一段活用の動詞「たいぢる」に
（九）はや—形容詞の「はやし」の語幹「はや」を副詞に
（一〇）どれ—事物代名詞の不定稱の「どれ」を感動詞に

◎練習四五（一七七頁）

（一）朝日（名・名—名）日の丸（名・助・名—名）
（二）すみわたる（動・動—動）大空（形・名—名）
（三）雪月花（名・名・名—名）折々（名詞の疊語—名）
（四）路ばた（名・名・—名）辻音樂師（名・名動—名）
（五）夜もすがら（名・助・接尾語—副）秋風（名・名—名）
（六）落葉（動・名—名）散りしく（動・動—動）さびしさ（形・接尾語—名）
（七）まきあぐる（動・動—動）たつまき（名動—名）

（八）我等（代・接尾語―代）國民（名・名―名）雄々しく（名詞の疊形容詞の語尾―形）生ひ立つ（動・動―動）

（九）敷島（動・名―名）大和心（名・名―名）朝日（名・名―名）山櫻花（名・名・名―名）

（一〇）君が代（名・助・名―名）千代（數・名―數）八千代（數・數・名―名）さゞれ石（名・名―名）

◎練習四六（一八四頁）

第一（　）の内に常語を記して敬語に對照する。

（一）（神皇正統記の推古天皇の御代の中から）

聖德ましまして（至德有り）、仰ぐ（尊ぶ）、皇子にてまし〳〵（皇子にて有り）、誅し給ひし（誅せし）、政をしらせ給へば（政を治むれば）、弘め給ふこと（弘むること）、かくれ給ふ（歿す）、始め奉りて（始めとして）、惜しみ申す（惜しむ）

（二）（增鏡の「おどろの下」の中から）

御門始まりたまひてより（人皇始まりて）申す（云ふ）、おはしましき（有りき）、生れさせ給ふ（生る）、卽かせたまひけり（卽きけり）、かくれさせ給ひ（歿し）、御門（天皇）、世をしろしめして（世を治めて）

（三）（明治天皇奉悼の大隈侯爵謹話の中から）

申し上げ奉る（云ふ）、長れ多い（憚る）、御天分をお具へになつて（天分を具へて）、恐察し奉る（察する）、御境遇に觸れて益々御偉大となり（「御」が敬語）、國家を御統治になり國民を御指導あらせられて（國家を統治し國民を指導して）御偉蹟をお現しになつた（偉蹟を現した）、拜察する（察する）

第二（　）の内同前

（一）（謠曲「安宅」の中から）

（富樫）「かやうに候ふ（有る）者は、加賀の國富樫の何某にて候ふ（有り）。さても頼朝義經御中（中）不和にならせ給ふ（なれる）により、判官殿（判官）十二人の作り山伏と爲つて、奥へ御下向（下向）の由、頼朝きこしめし及ばれ（聞きつけ）、國々に新關を立てゝ山伏を堅く選び申せとの御事に候ふ（選べとの事なり）。さる間此の所をば某承つて（受け合つて）山伏を留め申し候ふ（留むるなり）。今日も堅く申し付けばやと存じ候ふ（言ひ付けばやと思ふなり）。如何に誰かある」。（强力）「御前に候ふ」（前に居る）。富樫「今日も山伏の御通りあらば（通らば）こなたへ申し候へ（われに言へ）。强力」かしこまつて候ふ（受け合つたり）」。

（注意）「候ふ」の語尾の「ふ」は略してもよい。

（二）（新井白石の「折たく柴の記」の中から）

父にておはせし（有りし）人は、四歳にして母におくれ、九歳にして父におくれ給ひしかば（おくれしかば）、父母の御事（事）詳なることは知らぬなりと仰せられき（云ひき）。

（三）菊の花薫る。（一つの文）

（四）山高く（第一節）、水長し（第二節）。（一つの文の中に並立節二つをもつ）

下篇の部

◎練習四七（一九〇頁）

（一）梅に鶯。（連語一つ）

（二）氏より育ち。（連語一つ）

（三）鎌倉の右大臣（實朝）が詠みし（形容詞的節）

（四）能ある（形容詞的節）

（五）何の能もなし（連語的節）

（六）體大きくして（連語的節）目小さし（連語的節）

（七）「狼來れり」（名詞的節）

（八）人住まぬ（形容詞的節）

（注意）（六）の『牧童「狼來れり」といふ引用文は客語の資格をもつてゐるから、名詞的節と見る。

また『狼來れり』は牧童の虚言なりき』の「狼來れり」は、主語の資格をもつてゐるから、これも名詞的節と見る。

但し『東風吹かば香おこせよ梅の花、あるじなしとて春を忘るな』（菅原道眞）の「あるじなしとて」の如きは、忘るなを修飾して副詞の資格をもつてゐるから副詞的節と見る。

◎練習五〇（一九八頁）

（一）東宮殿下（主部）、棒太に（客部）行啓あらせられたり（述部）

（二）櫻の咲くは（主部）、三月より（客部）なり（述部）

（三）花咲き鳥鳴く春は（主部）、のどかなり（述部）

（注意）「花（主部）咲き（述部）、鳥（主部）鳴く（述部）」は二つの形容詞節で、「春は」（主語）を修飾してゐる。

（四）人に惠むは（主部）、人に惠まるゝより（客部）、幸なり（述部）

（五）我等は（主部）、奈良の東にある三笠山に（客部）、登りたり（述部）

（六）かしこの森は（主部）、氏神の鎭まります所（客部）、なり（述部）

（注意）「氏神の（主部）鎭まります（述部）」は一つの形容節的で、「所」（客語）を修飾してゐる。

（七）象は（主部）、體大きくして目小さし（述部）

（注意）「體（主部）大きくして（述部）、目（主部）小さし（述部）」は二つの述語的節で、共に「象は」（主部）に對して述部を成してゐる。

（八）志は（主部）、百難起るとも屈せられず（述部）

（五）花もあり（第一節）、實もある（第二節）（一つの文の中に並立節二つをもつ）

（六）星の飛ぶ（從節）闇夜は物すごい（主節）一つの文の中に二つの從節と一つの主節とをもつ）

（七）世界大戰の講和會議は、西曆一千九百二十年に巴里で開かれた。（一つの文）

（注意）（一）（二）は文語と口語とに共通。（五）以下は口語。

◎練習四八（一九二頁）

各問題中に含む述語

（一）庭前の（形容詞的連語）

（二）鏡の如く（副詞的連語）

（三）鏡の如き（形容詞的連語）時の間に（副詞的連語）曇りそめたり（述語的連語）

（四）天を摩する（形容詞的連語）聳ひ立つ（述語的連語）

（五）尾張の（形容詞的連語）

（六）自ら助くる（形容詞的連語）

（七）過ぎたる（名詞的連語）及ばざる（名詞的連語）

◎練習四九（一九四頁）

各問題中に含む節

（一）氏神の鎭まります（形容詞節）

（注意）「百難（主部）起る（述部）とも」は「屈せられず」（述語的連語）を修飾して副詞的連語となつてゐる。

（九）その困難（主部）、百人の杖を失へるに（客部）、異ならず（述部）

（注意）「百人の（主部）杖を（客部）失へる述部）に」は、名詞的節の客語で、「異ならず」（述部）に對して客部を成してゐる。

◎練習五一〔二〇三頁〕

（一）重文

（説明）「松青く」は一つの單文（第一節）、「砂白し」は一つの單文（第二節）、の並立節二つで成り立つ。

（二）單文

（説明）「海面」は一つの主部、「鏡の如く靜かなり」は一つの述部。

（三）單文

（説明）「庭前の梧葉」は一つの主部、「秋聲を」は一つの客部、「已に傳ふ」は一つの述部。

（四）複文

（説明）「雪の降る」は「夜」を修飾する一つの從節、「夜は寒し」は一つの主節。

（五）重文

（説明）「月明に」は一つの單文（第一節）、「星稀に」は一つの單文（第二節）、「烏鵲南に飛ぶ」は一つの單文（第三節）、の並立節三つで成り立つ。〔魏の曹操の詩句の譯〕

（六）單文

（説明）「天」は一つの主部、「自ら助くる者を」は一つの客部、「助く」は一つの述部。〔ギリシアの古諺〕

（七）單文

（説明）「惠む人は」は一つの主部、「惠まるゝ人より」は一つの客部、「幸なり」は一つの述部。

（八）複文

（説明）「この猫は」は一つの主部、「何の能もなし」は一つの述部で從節。

（九）複文

（説明）「牧童」は一つの主部、「『狼來れり』と」は一つの客部、「欺き呼べり」は一つの述部。

（十）重文

（説明）「約は」は一つの主部、「死して皮を（客部）留め」は一つの述部、（第一節）「人は」は一つの主部。「死して名を（客部）留む」は一つの述部、（第二節）、の並立節二つで成り立つ。

（十一）複文

（説明）「これは」は主部、「鎌倉右大臣が詠みし」は「歌」を修飾する一つの從節で、「鎌倉の右大臣が詠みし歌」は一つの客部、「なり」は一つの述部。

（十二）複文

（説明）「はなやかなりしあたりも」は一つの主部、「人住まぬ」は「野ら」を修飾する一つの從節で「人住まぬ野らと」は一つの客部、「なりぬ」は一つの述部。〔徒然草から〕

（十三）重文

（説明）「土裂けて（一つの從節）、水湧きあがり（一つの主節）」は一つの複文（第一節）、「いはほ割れて谷にまろび入り」は一つの單文（第二節）、「渚こく船は波に漂ひ」は一つの單文（第三節）、「道行く駒は足の立ちどをまどはせり」は一つの單文（第四節）、の並立節四つで成り立つ。〔方丈記から〕

（十四）重文

（説明）「天地は萬物の逆旅にして」は一つの單文（第一節）「光陰は百代の過客なり」は一つの單文（第二節）、の並立節二つで成り立つ。〔實語教の文句の譯〕

は一つの單文（第二節）、の並立節二つで成り立つ。〔李太白の文句の譯〕

（十五）重文

（説明）「祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり（一つの主部）」は一つの複文（第一節）、「沙羅雙樹の花の色（一つの主部）、盛者必衰の理を（一つの客部）、あらはす（一つの述部）」は一つの單文（第二節）、の並立節二つで成り立つ。〔平家物語から〕

◎練習五二〔二〇八頁〕

（注意）諸問題における述語の修飾語の位置は、（1）述語の直上にある場合、（2）客語またはその修飾語の上に隔たつてある場合、（3）主語またはその修飾語の上に隔たつてある場合の三形式となる。

（一）比良山の一角には（3）、雪未だ（1）白し。

（二）松杉黑く、苔したゝりて、卯月の天今なほ（1）、寒し。〔奥の細道から〕

（三）東天漸く（1）、白みて、海の面遙かに（1）、現れたり。

（四）宿からむとすれど、更に（2）、宿かす人なし。

（五）世の不思議を見ること、たびたびに（1）、なりぬ。〔方丈記から〕

（六）また（3）、いとあはれなることも侍りき。

（七）その日（3）、芭蕉と曾良は漸く（2）、草加（武藏の内）といふ町にたどり着きぬ。〔奥の細道による〕

◎練習五三〔二一二頁〕

（一）嗚呼、忠臣楠子の墓。

「嗚呼」といふ感動詞をそへた名詞的連語「忠臣楠子の墓」

（二）急がば廻れ。

主語を省いた命令體の諺で廣く「人」に教訓するもの

（注意）古い道歌に「もののふの矢橋の渡し近くとも急がば廻れ勢多の唐橋」

（三）人食ふ鬼もありとぞ。

下に「世の人云ふ」の如き語を省いたもの。「ぞ」は係の助詞で「云ふ」は結の用言。これを常態に云へば「世の人（主部）人食ふ鬼もありと（客部）云ふ（述部）」となる。

（四）死にのこれ、一つばかりは、秋の蟬。〔横井也有の句〕

倒置をなほせば「秋の蟬、一つばかりは死にのこれ」と平凡な言ひ方になる。

（注意）也有の「蟬の引」に「三伏の日ざかりの暑さに堪へ難くて、「蟬あつし松きらばやと思ふまで」と口すさびし日數も程なく立ちかはり、やゝ秋風にその聲のへり行く程、さすがに哀れに思ひかへして」と述べて、次にこの句を記してある。

（五）目には青葉、山時鳥、初鰹。〔山口素堂の句〕

省略を補充すれば「目には青葉を見、耳には山時鳥を聞き、口には初鰹を味はふ好き季節かな」の意である。「目にはあを葉」と六音で字餘りによみ、差別の助詞「は」を利かせて、省略の「耳には」「口には」を含蓄させた所が巧妙である。

（六）勅なれば、いともかしこし、鶯の、宿はと問はば、いかゞ答へむ。〔大鏡に見えてゐる紀貫之の女の歌〕

「我が家の梅の木を奉れとの勅なれば、いともかしこし、されど鶯の歸りきて、我が宿は如何になりしと問はば、あはれなる鶯に我はいかゞ答へむ、答ふるすべもなかるべし。」といふ意を縮約して詠んだ

ものでは、省略した語が頗る多い。

（七）立ちわかれ、いなばの山の峯に生ふるまつとし聞かば、今かへりこむ。（在原行平が因幡守となつて彼の地に下る時に相別れる妻に與へた歌だと云ふ）

「立ちわかれ往ん」と「因幡の山」とを掛詞とし、また「峯に生ふる松」と「待つ」とし聞かば」とを掛詞にしたものである。歌の意は、「我は立ちわかれて因幡の國に往ぬとも、因幡の山の峯に生ふる松の如く貞操にして我を都に待つとだに聞かば今やかて歸りきて逢ほむとするぞ、思ひなげくな」と慰めたのである。

◎練習五四（二一六頁）

（一）大君の恩は廣大なり。（平叙文）

右は、「大君の恩は豈廣大ならずや」（疑問文）、「大君の恩の廣大なるを知れ」（命令文）、「嗚呼、廣大なるかな、大君の恩」（感動文）、などと言ひかへられる。

（二）國家内外の情勢を知れりや（疑問文）

右は、「國家内外の情勢を知れ」（命令文）、「あゝ、國家内外の情勢を聞かむかな」（感動文）、などと言ひかへられる。

（三）報國の至誠かさゝげざるべからず。（平叙文）

右は、「何ぞ報國の至誠をさゝげざらむや」（疑問文）、「奮つて報國の至誠をさゝげよ」（命令文）、「いで、報國の至誠をさゝげむ」（感動文）、などと言ひかへられる。

（四）盛年再び來らず。（平叙文）

右は、「盛年、豈再び來らむや」（疑問文）、「青年再び來ると思ふな」（命令文）「あはれ、盛年は再び來らざるなり」（感動文）、などと言ひかへられる。

（五）徒らに月日を過すこと勿れ（命令文）

右は、「徒らに月日を過すは蓋かなり」（平叙文）「いかで月日を徒費すべけむや」（疑問文）、「月日をあだに過すまじきよ」（感動文）、などと言ひかへられる。

308
687

昭和二年八月一日印刷
昭和二年八月四日發行

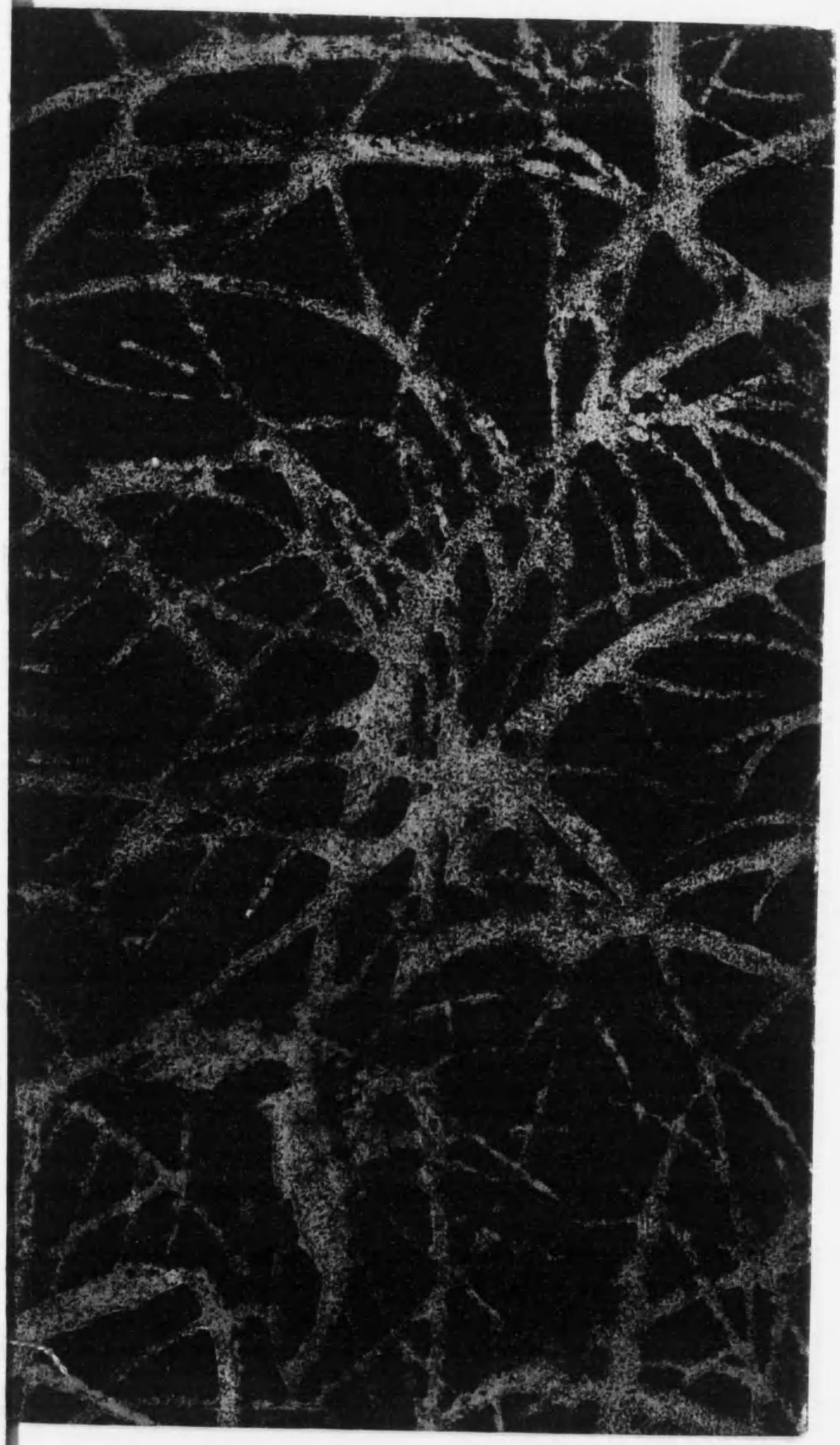
中等新國文法要解　全

著作者　日下部重太郎

發行兼印刷者　東京市小石川區小日向水道町八十四番地　株式會社東京開成館　代表者　松本繁吉

發行所　東京市小石川區小日向水道町八十四番地　株式會社東京開成館
（電話）小石川（85）二六八・三二八・四八五・八三一・八九九
（振替貯金口座）東京五三二二番

著作權所有
教師用非賣品

（常磐印刷所印刷）

終